

# 女の言いたい放題誌

わいふ NO.236.

週次刊行物

3 歳

4 年 6 月  
国立編

特集 近所づきあい・私の苦勞

特別寄稿 乳房再建

特別寄稿 口があるならモノを言え





**有斐閣** 出版案内  
(定価は税込み)  
東京・神田・神保町2 / tel:03-3265-6811

## 性の法律学

角田由紀子 著

有斐閣選書  
定価1,545円

- 女の視点で「性」を考える
- 私のからだは私のもの
- 結婚は女のおとし穴
- 愛情の売買が許されている
- 買売春と法律婚
- セクシテル・ハラスメント
- 同性愛に生きている権利
- 未成年者の性的自由

「性」をぬきにしてトータルな人間の生き方は考えられない。「性」を抑圧の道具とさせないために問い直す。

## ウーマンリブから20年

日本の女性学の

創始者が書き下ろしたテキスト決定版

\*

### [本書主要目次]

- エビローグ女性学のセカンドステージ
1. 性学誕生の歴史  
2. 性学と男子の学校生活  
3. 恋愛と結婚  
4. 母になるという  
5. 働く女なら職場における性差別  
6. 主婦の一日をめぐって  
7. 変化する女の一生
- エビローグ女性学のセカンドステージ

有斐閣選書  
定価1,545円

井上輝子 著

## 女性学への招待 変わる／変わらない 女の一生

他人から学ぶだけでなく、疑い、問い、そして自ら表現することが、いま必要なのではないか。日頃の憤懣や疑問を大事にしつつ、自己の経験問い直す——これが女性学の出発点だ。

## 足・腰・肩の痛みを断つ 健骨法

西法正(国立立川病院院長・整形外科医)著

老化を防ぎ、からだの痛みを治す方法。

むりのない姿勢、日常生活での注意点、腰痛治療体操、首と肩こりの治療体操、筋肉ストレッチングなどについて、整形外科の名医である著者が、イラストを使ってわかりやすく説明する。  
●新刊 1494円(税込)



[家族の健康をまもる本]

### 鼻の相談室

なやむ患者となやまされる医師  
高橋良[著] ●新刊 1854円(税込)

### 健康をつくる自転車ののりかた

鳥山新一[著] 1236円(税込)

### 健康スイミングのしかたと効果

武藤芳照[著] ●2刷 1009円(税込)

### 子どもの成長とスポーツのしかた

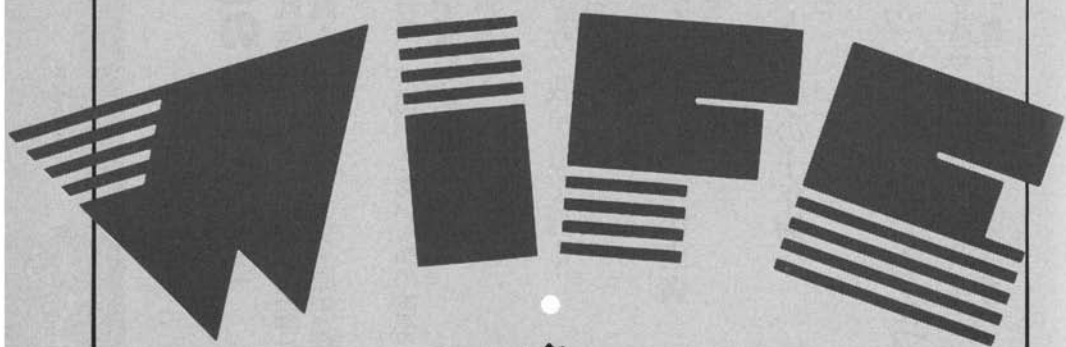
武藤芳照+深代千之+深代泰子[著]  
●6刷 1009円(税込)

### 足のはたらきと子どもの成長

近藤四郎[著] ●14刷 1009円(税込)

**築地書館**

〒104 東京都中央区築地2-10-12 ☎03-3542-3731・FAX 03-3541-5799  
[1992年度版]総合図書目録進呈いたします。ご請求は上記宛先まで!



あなたのフリースペースです。

4 私のこと場 ③

再就職アドバイザー・原田静枝  
写真・佐々木恵子 文・原田静枝

10 ●特集 近所づきあい・私の苦勞  
社宅渡りある記

大味恵子

14 ひとり、我が道を行く  
匿名

17 「みんなと一緒」の伝染病  
重住麻悠

20 じつとガマンの十年間  
匿名

24 エッセイスト・クラブ

家守恭子・高松恭子・古沢涼子  
田中慶子・高島直子・中塚末子

34 ズバリ一言

清水宏子・佐藤乃麻・星恵

40 口があるならモノを言え

——無口な夫たちへ——

立花芳子

46 働きたい

豊城智子・定永淳子  
石川真澄・匿名

52 乳房再建  
小林雪子

62 サーフレシーブ

門馬ひろ子・荻野菜穂子・上谷亜育



65 ワンポイント情報

引ッ越し上手・下手  
伊藤眞砂子・清水宏子  
刀祢啓子・木場恵子

70 フリースペース

島 初美・和田 緑・日下部直子  
太田差恵子・中野正美・西村 治  
浅田節子・手塚和美・福田幸子  
塚本真理・中田康子

85 平成おとなまじーの② 西田淑子

86 読んでみました  
たまき久美・山田永子・和田好子

89 父

鶴留百合・藤田和子

104 コミック●痛快ノ一般人⑨ 栗田笑

連載7

108 私の愛する外国人 新井ひふみ

115 情報コーナー

118 ブック情報

121 わいふ文章講座(9) 編集長・田中喜美子

連載小説③

124 契約結婚 山影冬彦

132 わいわいがやがや

神山寿子・匿名・堀場美代子・井上治子  
小林智枝・福田由利子・匿名  
佐藤玲子・岩田佳子・加納礼子

次号投稿募集ー141 投稿規定ー142 編集だよりー144

ご投稿のさいの注意ー16 わいふ原稿整理方針ー19  
バックナンバー45 お友達に“わいふ”をー84  
情報コーナーもつとご利用をー117  
氏名・住所を秘密にしたい方・仕事をしたい方へー141

# 私のしごと場

3

再就職アドバイザー

## 原田 静枝

原田ワーキングライフ  
研究所主宰



### 〈再就職相談〉

- 毎週水曜日 AM10時～PM4時  
東京都新宿区立婦人情報センター相談室  
☎03-3353-2000(直通・面談希望の場合は  
☎03-3341-0801に申し込むこと)
- 第2・4金曜日 PM1時～4時  
神奈川県立かながわ女性センター・労働部  
☎0466-27-2111代  
※面談を主としているので県内の方に限る



●神奈川県立かながわ女性センター金森トシエ顧問(右)は女性問題の先駆者。とてもチャーミングな大先輩として尊敬しています。



●新宿区立婦人情報センター穂積所長(左)に相談内容の報告。対応できる公的機関があるかないかの検討もします。



●再就職だけでなく人生相談何でもOK。硬い表情が少しずつほぐれ、やがて明るい笑顔がよみがえってくる。その一瞬を共有できる喜びは何にも代えがたいものです。

「わいふ」誌上に「知的内職の落とし穴」「男の仕事に乗っ取ろう」「再就職の落とし穴」など主婦の再就職に関する取材記事を書いていて私のところに、編集部を通して「新聞連載」という話が飛び込んで来たのは数年前。「再就職アドバイザー」とはその時新聞社が名付けてくれた肩書きだ。

いま、女性の労働力率は五十・一％。一八三四万人の女性が社会に出て働いているが、まだまだ専業主婦から抜け出せない女性が大勢いる。また、すでに働いている女性たちの中にも家事・子供や夫の対応・親の介護・職場の人間関係などさまざまな悩みを抱えている人が少なくない。その彼女たちに、働く本当の意味や再就職に関する確かな情報を伝えるのが私の仕事。



●産経新聞に連載中の記事。働く女性たちの「声」を読者に伝える大切な場です。すでに再就職したあなた、働いてみてよかったこと悩んでいることなど聞かせてくださいませんか。取材に伺います。



「今日は西、明日は東」と講座や取材に飛び回っているのに、仕事場は「日替わりランチ」のように毎日変わる。しかし、どこに行っても新しい出会いがあつて、それがまた私をより一層成長させてくれる。情報収集とネットワーク作りのために昨年春設立した研究所もますます充実させたい。何より「生涯現役で働くこと」が一番大きな夢である。



●相手の顔が見えないだけに電話相談は難しい。全身を“耳”にして相談者の訴えを聞き、可能な限りの助言をしていきます。



●今日の仕事も無事に終わってほっと一息、相談室を後に家路へ。



●大分県婦人就業援助センター講座。「あなたが変われば夫も変わる」「年齢制限にこだわらず、キャリアゼロから出発」と事例を挙げての二時間です。



●フリーライターとしての仕事も続けています。農機具に挟まれて両手を失った熊本の大野勝彦さん(左)の取材を終え天草までドライブ。事故にもめげず義手で絵を画き詩を読む彼の著書「両手への讃歌」は素晴らしい作品です。

●友人の出版記念会。執筆の苦勞を知る一人としてお祝いの一曲をプレゼント。



●「“戯”を見てせざるは“遊”なきなり」(山藤省二)という言葉が私の座右銘。遊び仲間とカツラを付けて振り付けて…。



●講演の後にその地方を旅するのも楽しみの一つです。この日は親友と一緒にだったので大変なはしゃぎよう、景色よし地酒よし。(宮城・遠刈田温泉)

ひがしやま

東山書房

〒104 東京都中央区新川2-2-1-108  
〒615 京都市右京区山ノ内大町5-3

☎03-3553-8358  
☎05-841-9278



ティーンズボディQ&A

河野美代子 著  
(広島・産婦人科医)

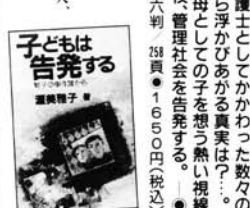
ベテラン婦人科医が、他人には相談しづらい「体」や「性」の悩みに誠実に答えます。ティーンはもちろん、父母・教師にも好評。性器・月経・避妊・人工中絶・一重まぶたの手術・毛染め・他・四六判・沼貫・1300円(税込)

# 子どもは告発する

渥美雅子 著

●雅子の事件簿から

いじめ、体罰、家庭内暴力、リンチ、殺人、生命と宗教、女教師駆け落ち、チビツゴロ人、丸刈り訴訟、自死……



# Human Sexuality

「人間と性」を考える話題の総合情報誌

●編集長・村瀬幸浩  
●企画編集・「人間と性」教育研究協議会  
●季刊・B5判・128頁・定価1400円(税込)

7号(新刊)「緊急特集」新教科書がもたらすもの  
●学校・家庭の性教育の新段階  
●座談会「性教育の新たな展開を目指すとき」山本直英・谷森正之・高沢寿美子・大戸ヨシ子・入江彰彦(ベテラン教師が語る)  
●授業実践「(月経)沖本昌子」「(調情・射精)城 英介」「(生命の誕生)岡田法子・鈴木貞女」  
●論文「新指導要領と性教育・家庭でできる性教育」  
●ルポ「小学校の性の授業の実態」  
●教科書の問題点をさぐる「母親・父親は語る」  
●子育てと性(座談会)「親へのアドバイス」他掲載  
★連載③ 金城清子(法女性学) 源淳子(宗教学) 和秀雄(憲法・政治学者) 奥田健夫(作家)  
★海外レポート ストックホルム サンフランシスコ サンパウロ フィリピン

6号 シルバーエイジの豊かな性と生  
5号 ビル解禁を控へ、いま避妊を問う直す  
4号 エイズの現在と近未来  
3号 障害者の性にとって「障害」とはなにか  
●直送定期購読者受付中●郵便・京都4-1067番  
1年 5,600円 2年 11,200円(送料・税込みです)

★自然環境保護のこころを育てるファンタジー写真絵本

## 写真絵本 自然からのおくりもの

- ★このシリーズの特徴!
- ①自然のドラマを写真でよむ
  - ②自然のひみつを写真でよむ
  - ③自然と人間のつながりを写真でよむ

●B5判・上製・美装カバー・32頁・オールカラー●予約各1800円

★全5巻★5月より刊行開始!

★全5巻の各巻構成——●別冊4頁解説付★

- アユの四万十川 語り・加用辰美・写真・大塚高雄
- クジラの海・小笠原 写真と文・望月昭伸
- 出羽のフナノ森 写真と文・太田 威
- 知床の流氷 写真と文・岡田 昇
- 木のくに・日本(仮) 写真と文・丹地保典

全日本図書協定会  
佐治晴夫・文  
成瀬政博・絵

●B5判・上製  
●定価各1500円  
●美装輸入セット価7500円

## 宇宙からのおくりもの

★全5冊・好評発売中

- ①夜はなぜあるの?
- ②宇宙はどこから来たの?
- ③みんな(星のかけら)なんだ
- ④かわいいうる星入はいるの?
- ⑤ほら宇宙を感じてみよう

●絵本★星の子どもたちへ  
●全国学校図書館協議会選定図書  
●日本図書館協会選定図書

●魚たちからのおくりもの  
●お魚まるごと写真館 ●全2冊  
●A4判・カバー付  
●定価各1800円  
●子供から大人まで

★おおぞらが好きな子どもたちへ★  
お天気12か月  
岸田杢子・文・さいと ゆづし・絵 倉庫厚 監修  
「お天気」という、わたしたちをとり巻くことも身近な自然現象を中心に、季節の変化と動植物たちのかかわりをファンタジックに描く、あたらしい自然科学の絵本。  
●上下2冊「上おてんきと野山のどうぶつ」「下おてんきと村のしよくてふ」  
●B5判各40頁・上製 4色+2色 ●定価各1500円  
●発売中! ●近刊「下おてんきと村のしよくてふ」



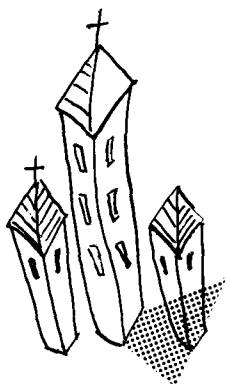
●  
特集

近所づきあい・私の苦勞



大味 匿重 匿住

恵子 麻悠 名



# 社宅渡りある記

千葉県船橋市

大味 恵子 (37歳)

## （当番責め）

現在、私の住まいは三世帯独立同居である。四年前、古くなった主人の実家を三階建てに改築して引っ越して来たのである。主人の親兄弟、合わせて十二人が同じ建物の中にいる。「それじゃ、さぞ大変でしょうね」などよく言われるが、一世帯一フロアーずつで完全に三世帯が独立しているのも、他人が思うほどのわずらわしさはない。こちらへ引っ越す前、私は実に七年半の間、社宅暮らしをしていた。結婚と同時に名古屋、そして福岡、埼玉と全部で四つの社宅を渡り歩いて来たので、それ相応の苦労もあったし、ここに記すだけの価値ある体験も色々してきたつもりだ。

昭和五十六年七月、主人が名古屋から福岡へ転勤になった。妊娠七カ月のお腹を抱えて引っ越した先の社宅で、あいさつまわりをしたときのことで。「〇〇当番」という何種類もの札がある。こちの家の扉の前にぶらさがって

た。後で聞いてみると、社宅内での雑用を分担するための当番札ということであった。どんな当番があったかという、社宅の補修で職人さんが出入りしているときにお茶を出す当番、それからゴミ出しの日の後片付けをするゴミ当番——当時はポリバケツに入れてゴミを出していたので、明け方のゴミ収集時間に合わせてまず、各々バケツは夜暗くなってから出し、朝はまだ人が起きないうちに当番は起きてバケツを拾い集め、洗い場へ持って行き、すべてのバケツを柄付きタワシでゴシゴシ洗ったものだった。

焼却炉の灰を始末する当番もあった。「燃やせるゴミはできるだけここで燃やし、生ゴミだけ出しましょう」という考えだけは、ゴミ減量が叫ばれている今なら表彰ものだったであろう。しかし、腰をかがめて灰出しをする作業は、ここで二度の身重の体験をした私にとってはかなり辛いものだった。後に、焼却炉が壊れたのを機にこの当番は廃止になった。

こっけいなのは、「旗当番」なるものがあつたことだ。社宅の庭に国旗掲揚塔があつて、祝祭日には日の丸の旗を掲げなければならなかつた。一回掲げたら、次の人にバトンタッチしていくのだが、ゴールデンウィークのあたりに当たる人は、悲惨だつた。例えば四月二十九日に当番だから、どこかへ遊びに行くのは五月三日に決めていたとする。二十九日に雨が降つてしまつたら、当番は三日に延期になつてしまふのである。子供との約束はどうなるの？ たかが旗のために空とにらめっこしながら、とんだ氣を遣わなくてはならなかつたのだ。

そして、月ごとに二人ずつペアを組んで行なう「月当番」があつた。これはガスや水道のメーターを決められた日に見てまわり、料金を計算して各家に請求し、集金をして銀行に振り込むまでをしなければならぬ。振り込みならまだしも、その前の名古屋の社宅では、集金したお金を会社の総務までご主人に持参してもらつていたのだから、

ら、本当に原始的なことこのうえなかつた。メーターを読むのはほかの社宅でも同じだつたけれど、ほかの会社の社宅でこんなことをしているところがあるのだろうか、私が来て一年くらいはこんな状態が続いていた。

しかし、社宅というもののよいところは回転があることで、色々と言つてさい人たちが一人去り、二人去り、メンバーは次々と入れ替わつていった。社宅のきまりも少しずつ見直され、月二回の草むしりも一回に減つた。暑い福岡では夏の草むしりがまた、かなりの重労働だつたのだ。

福岡へ転勤後、まもなく長男が生まれ、初めての育児が始まつた。ただでさえも子供に束縛され、振りまわされる生活でストレスがたまる毎日なのに、当番制にがんじがらめにされているようにそれはそれはたまらない気持ちだつた。「社宅」という狭い世界の中でしか身動きできないでいる自分がほんとうに情けなかつた。社宅の奥様たちとも心からうちとけて話ではできなかったよ

うに思う。というより私自身が周囲に垣根を作つていたのかもしれない。

## （長男、行方不明）

ところが、長男が一歳十カ月の時、社宅の奥様たちへの認識が百八十度変わるようなできごとが起つた。長男が行方不明になつたのである。

初夏のある午後、私は近所の公園のベンチに座りながら、長男があちこち走りまわっているのをぼんやり眺めていた。活発な彼はここかと思えばまたあちら、と遊具の陰に時々見え隠れしている。お腹に二人めの子供がいた私は、疲れていたもので、しばらく目をつぶっていた。

そしてハッと氣がつくと子供の姿が見えない。ギョッとした私はあわてて近くを一人で捜しまわつたがどこにもいないのだ。「そんな遠くへ行くはずがない」と思いつつも不安は募るばかりで、ついに私は社宅の方たちにも応援を求めた。

社宅内のほとんどの人が一緒に捜し

てくださった。大搜索すること約二時間、長男は大人の足で歩いて十分ほどの場所で見知らぬ子と一緒に遊んでいた。どうも公園を横切った小学生の後にくっついて一緒に行ってしまったらしい。そしてその子の親が、見慣れない長男を見て、どこかで捜しているのではないかと思い、それとなく自転車であわててくださったということだった。

近くには池もあったし、車も走っていたのだからゾツとする。このことがあってから、私には二人も三人も子供を無事に育てている社宅の奥様方が、どれほど偉大に見えたことか。もしかしたら私は、一人の子さえも満足に育てられなかったかもしれないのだ。もしもこんなとき、周囲は昼の間勤めに出ていて、誰もいないようなマンションに住んでいたとしたら、どんなにか心細かっただろう。今までは、顔を合わせれば井戸端会議ばかりしていた、暇な人たちだなあと思っていた私であったが、彼女たちに対する軽蔑の

念は、半ば尊敬の念に変わってしまった。私はまさに、「目からうろこの落ちる思い」をしたといえるだろう。

## （別の社宅で）

時は移って三年後、私は埼玉の社宅で暮らすことになった。こちらへ来て間もなく三男が誕生した。今度の社宅は同年代の子供たちがたくさんいたので遊ぶ友達にはこと欠かなかった。親子共々すぐにこちらでの生活にも慣れた。例の当番ももちろんあったけれど、それ程負担になるものではなかった。子育ての最中にいる人たちがほとんどだったので、自然と助け合いながらやっていく体制ができていた。「ああ、子供にとってはこんな環境が一番いいんだ」とホッとした。

しかしながら、ここでも困ることはいくつかあった。就園前の次男と同年代の子供たちが六人もいたので皆でかたまつて、こっちの家、次はあっちの家、とよく集団移動したものだ。その中に一人、片時もお母さんのそ

ばを離れられない子がいた。その子は次男が最もよく遊びに行く家の子であった。

次男があちらに行く方が多かったが、その子が我が家へ来たいと言えば、お母さんも必ず一緒に来た。子供が何人も遊びに来る分には苦にならなかったが、いつも親同伴となると結構気も遣うし、負担にもなってくる。私はどうも、べったり人と付き合うのが好きではないのだ。もっともまったく人と話すことがなかったら、きつとノイローゼになってしまうだろうが……やはり、一定の距離は置きたいと思う。

もうひとつ困ったことは、子供が行く先々でおやつをもらって食べ歩いてしまうことだった。今でこそかなりいい加減になったが、当時はおやつの中味と与える時間には厳しくしていた。夕方ごろになって甘いアイスなどをよその家でもらったりすると、まず食事は食べられなくなる。私はこのことでどれだけ腹が立ったことか。

お母さんたちにも二とおりの。お



やつの与え方に無頓着な親と、気を遣う親である。後者同志は「何時以降はやめようね」と申し合わせたものだったが、前者に面と向かって「あげないで！」とはなかなか言えなかった。そうこうしているうちに、今の家を建て直す話が決まったので、「あと少しの

がまんだ」と、その件に関しては、とうとう何も言わずじまいであった。

（社宅を離れて）

長男、次男の入学、入園に間に合うよう、新しい家は完成する予定だったが、四カ月ほど予定が遅れてしまった。

わずか数カ月のことでは転校などさせたくなかったもので、近くのアパートにしばらく仮住まいすることになった。初めて社宅を離れて感じたことは、「社宅にいるときの方が楽だった」ということだった。今までは、誰か彼か大人の目があったので、少々の時間、子供を放っておいても大丈夫だったのである。それがここへ引っ越したとたん、どこへ出かけるにも三人ぞろぞろ連れて行かなければならなかった。家の前は交通量が激しかったし、子供たちもどこに何があるかわからない。友達もまだいない。三男はまだ二歳前で何もわけがわからず、片時も目も手も放せない状態で私は疲労こんぱいした。

社宅にいた時は、それはわずらわしいことがたくさんあったけれど、やはりそこは同じ船に乗り合わせた者同志であったと思う。子供が病気のとき、自分が病気のときは互いに手を差しのべ合った。「何とありがたい環境であったことか」と離れてみて、初めて痛感した私なのだった。



# ひとり、我が道 を行く

匿名

## （群れたがる）

やわらかな風が、桜の花びらを散らせている。道路も川面も桜色だ。

この桜の名所の近くへ転居して、ちょうど八年目の春を迎えた。文教地区・高級地というイメージのこの住宅地の住み心地は、総合的にはいい。

つまるところ、住む者の意識の持ち方によると思えた。

知人たちは居住地を聞くと、

「よい所にお住まいですね」

とおっしゃる。私も最初はそう思った。高校、大学は近い。駅も近く、都心へもすぐだ。だけれど……、住んでみなければわからない。

皆、群れたがる。子供ではない。おとなも、だ。

まず週二回のごみ収集日。玄関先へ出ると、庭ぼうきを持ったまま二十分は立ち話をしている。その横をご主人が会釈をして出勤なさる。

昼前には、

「密閉容器のパーティをするの。コー

ヒー飲みがてら見に来て」

と誘われ、午後は、

「下着の販売だけど、どう」

と電話がかかる。

「生協よォ、取りに来てェ」

「みかんのまとめ買い」

「ケーキ焼くう？」

「ふとん干したあ？ 手伝おか」

よくいえば結束が固い。親切には違いない。

地域を知るには、まず先住者から情報を得る。学校の雰囲気も知りたい。土地の実力者を覚え、町内の冠婚葬祭のしきたりも学ばねばならない。それやこれやで、義理も好奇心もありで、ほぼおつき合いをさせていただいた。余分な器、下着も購入したが、まとめ買いで助かったこともある。

だが、一年で私には限界がきた。うっとうしくなったのだ。他人と違うことをするヒトのことが気になる、保守的な名古屋人気質をひしひしと感じる。というのは、近所の主婦で忘年会をするからとお誘いを受けたときのこと。

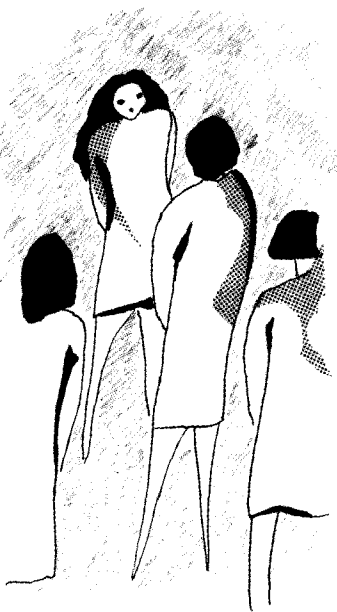


幹事役の方が、おすしやケーキの手配をしてくださり、花が生けられ、BGMも流され、私はわくわくして座ったのだ。ところが話題といえ、この場にいらない人の批判。その人の子供の通っている学校の査定。姑さんの悪口雑言は聞くに耐えない。とてもそんなおばあ様にはみえない、と少しでも反論しようものなら、涙を浮かべつつ、あーだ、こーだと毎日の生活の細部を話し出す。また、よその家の冷蔵庫を勝手に開ける。「山の手の奥様」がこんなお行儀の悪いことをする。つまり私から見ると、破壊的ではあれ、建設的ではない。

## （つかず離れず）

それからは、経済に余裕もほしいし趣味にも浸りたい、と勤め始めた。しばらくは、  
「あらァ。どうしたの。何かあったの」  
「月給はいくら？ 私も使ってもらえる？」  
かしこしいこと。そのうち、朝な夕な

に一軒の家へぞろぞろ入り、ぞろぞろ出て来るのを目にするようになって、「私もあることないこと、言われているのでしょね」とは思ったが、その仲間でないことに、気分はハミングしたいほどだった。先日も、



娘には、  
「入試、いつ。どこ受けるの」  
「受かったの、どこ行くの」  
大きなお世話もはなはだしい。学校が決まったらしい、とどこかから聞き及ぶと、  
「女の子はラクね。どこでもいいし」

「うちの子、行ける大学ない。二浪になりそう。どうしよう」  
などと話しかけられてしまった。どうしようと言われても、たばこ吸って、車磨いて遊んでる子が楽に入れる学校はない、今日だ。それでもってうちの

とのたもうた。  
「お陰さまで」  
と答えるのが精一杯というものだ。  
というわけで、今の私は夫、子供が出てから洗濯ものを干して、犬の散歩をする。抹茶を一服いただいて、いざ

出勤。会社へ着けばゆっくり新聞を読んで疲れをとり、おもむろにワープロを打つ。おやつを食べる。夕食の献立を考えて、アフター５のエネルギーを貯える忙しい身なのだ。

夕方、買物袋から大根をのぞかせ、自転車の前カゴへ入れ、主婦の集団の脇を笑顔であいさつしてすり抜ける。

しかもカルチャーセンターへは、月二回通う。それまでに宿題もこなせば、会員さんたちと親睦の会食もある。

種々の講演会、映画へも出かける。モニターの報告書も仕上げなくてはならない。"わいふ"も読まねばならぬ。学生時代の友人との旅行もあれば、両方の実母つまりおばあ様方のご機嫌伺いもあるのだ。これは、悪口を言うより、久し振りに話の弾む私にとっての楽しい作業ではあるけれど。

近所づきあいどころか、私の家のことだって手を抜かかねない状態である。娘が、

「お隣のおばちゃんが『ママ、お忙しそうね。なにしてるの』って笑ってた

わよ」

と言うのへ私は答えた。

「人のウワサも七十五日と昔からいう。倍に見積もっても百五十日。そのうちウワサの内容もなくなるのよ。つき合ってもつき合わなくてもウワサはされるならつき合わない方がいいの。ただし、あいさつだけはニコニコ元気で明るくいこっ」

「アイ・シー」

ただのおしゃべりも楽しいけれど、趣味を同じくした同志はもっと広がりがある。そちらを開拓して、のぞき趣味のあるご近所は、つかず離れずで仲よくしていただくと思っている。

もっとも、小さい子供がいないのでできることもわからない。

念のため申し添えるが、「主婦だから」こうだと言っているのではない。たまたまこういう集団のところに住んでしまった、そして私にはおつき合いできかねた、というお話である。

## ご投稿のさい、次の ことにご注意下さい

●住所変更や本のご注文など、事務連絡を原稿末尾に書いたり、びんせんに書いたものを同封することは間違いが起ります。

編集部では原稿と違って扱うので、見落したり、封筒に残って発見されなかったりします。何度か例がありますので、別便になさるか、同封の場合は表書きに「事務連絡同封」と赤ペンでお書き下さい。

●原稿用紙を二つ折にし、製本のように重ねて、ホチキスで二〜四か所もとじてくる方があります。二つ折ですと整理、割り付けが困難です。ホチキスを大苦心ではずして、開かなければなりません。

原稿用紙は開いたまま、右肩一か所をホチキスなどで止めていただくとう助かります。

●投稿のさいはまず投稿規定をよくお読み下さい。



# 「みんなと一緒に」 の伝染病

神戸市西区

重住 麻悠 (35歳)

マンション暮らし四年目で、最も不思議に思うのは、なぜこのようにみんなと同じことをしたがる人が多いのだろう、ということである。いわゆる「横並び感覚」の根強さには、いささかウンザリしてしまう。

最初は、「キュロットスカート病」であった。全国的な流行より一年ほど早かったのは、さすが神戸の主婦と言えきか。しかしエレベーターの中で、「ねえ、このとき靴下は何が似合う?」「そうねえ、やっぱりひざ下ストッキングかな」「うん、それに決まり」などという会話を聞かされると、この人たちは一体何を考えて生活しているのだろうと、情けない気分になったものだ。当時私は、二人目を妊娠していて、ミニのキュロットスカートなどで、はきたくてもはけなかったのだけれど……。

## （自 転 車 病）

次の夏は、子供の自転車であった。このマンションは、全百世帯ほどな

のだが、そのうち半数以上は子育て真っ最中なので、長女と同じ年齢の子供も八人いる。

そのなかの一人が、六月で四歳になった誕生日にと、コマつき自転車を買った。もらった。すると、その後わずか一カ月ぐらいの間に、このメンバーのほとんどが、次々と三輪車からコマつき自転車に乗り替えたのである。うちの娘は、ようやく三輪車でスピードを出して走ることができるようになったばかりだったので、その楽しみを奪ってまで次の乗り物に挑戦させる気にはならなかった。何しろ新しい経験には、人一倍抵抗の大きい子だし、それに、三輪車でしっかりと足をきたえるのも



よいと思ったのである。

しかし、その夏何度か自転車二、三台で三輪車のまわりを囲まれている光景を見た。口だけは達者なので、何とか泣き出す前に切り抜けてほしいと、祈るような気持ちで見守っていたのを覚えていた。

## （幼稚園病）

次はいよいよ幼稚園選びである。

私が住んでいる「学園都市」というところは、大学は四つもあるのだが、幼稚園は私立が一つあるだけ。当然、そこは超マンモス幼稚園となる。クラス四〇数人を詰め込み、年少から年長まであわせると十五クラス以上になる。そのうえ、私が見かけたその先生は、子供に対してギョルそのままのようなしゃべり方をなさるのだ。園外への引率を見ても、四〇人以上もいるたよりなさそうな園児の先頭に、先生一人だけである。

いくら近いとはいえ、このような幼稚園に娘を預ける気にはならなかった。

あと、少し離れた私立の幼稚園バスが三種類ほど回って来るのと、市バスで五分ほどの隣の住宅地に公立の幼稚園がある。

長女と同じ昭和六十一年生まれ組の八名のうち、なんと六名は十月一日午後一時、着飾ってロビーで待ち合わせ、素直に、マンモス幼稚園に申し込みに行った。

「幼稚園なんてどこも同じよ。みんな一緒にあそこ（マンモス）に行きましょうよ」と誘ってくれたけれど、私は、「みんな一緒」というのが、それほどいいことだとは思わなかった。「あそこの幼稚園に、月二万円払う気にならないのよ」とだけ答えておいた。

素直でない二名の母親は、送り迎えは少し手間がかかるが、公立に通わせている。先生は、親が緊張するほどのベテラン、一クラス二十数名、思う存分遊び回ることのできる環境……。結果を、期待しているのではない。子供に、良質の時間を過ごさせたいだけである。

## （ピアノ病）

幼稚園に入園すると、次はピアノ病であった。近所の、特に女の子の多くは、四歳の春になるとY楽器の「幼児科」なるものに通い始める。

今回は、長女も伝染して、「私も、ピアノ習いたい」と言って、母親のエ



レビアンを頻繁に触りだした。

ところが私は、親子七、八組で一緒にレッスンを受ける「幼児科」のシステムは、理解できなかった。なぜ、母親が一時間のレッスン中、ずっと隣りに座っていなければいけないのだろう。同時に七、八人も弾かせて、個人の指使いやタッチなど、どこまで講師が把握できるというのだろう。どの母

親も小ぎれいにして、幸せそうにつきそっているが、私はどうしてもいやだった。

そこで、私はY楽器へ行って、「幼児科」以外のレッスンシステムはないのか尋ねてみた。すると、秋から個人レッスンが始まるというので、そちらを予約した。一對一で三十分、じっくりと指導してくださる。「幼児科でも六千五百円なのに、個人だときつと月謝が高いわよ」とひやかされたが、「幼児科」と同額だった。春にあわてないで、半年待っててよかった。でもまた、ご近所の反感を買ってしまったかもしれない。

## （テニス病）

最近はやっているのは、テニス病であらうか。子供を、学校や幼稚園に送り出すやいなや、パステルカラーのトレーニングウェアに身を包み、テニスラケットを抱えてマンションのロビーに集合する。

この、「ロビーに集合」というのも、

奇妙な習慣である。マンモス幼稚園に通う親子たちは、毎朝九時にロビーに集合して「みんな一緒に」登園する。

小学校で授業参観などの行事がある日も、母親たちはここで待ち合わせて、集団で賑やかにしゃべったり、高い笑い声をたてながら出発するのでいやでも目立ってしまう。自然と、服装も競うようにおしゃれになっていくのが分かる。小学校に勤めていた私は、あんな埃っぽいところに行くのに、とびきりのよそいき着なんて……と眺める。それより、授業参観で最も迷惑なのは、母親たちのおしゃべりなのだが、出発時からあの調子では、教室での様子が思いやられる。

いよいよ来年は、長女も「みんなと一緒に」の小学校に入学する。母親と違っていて、娘は今のところ、「みんなと一緒に」が好きなから、いろんな「でんせんびょう」を持ち込んでくるかもしれない。わたしは、それと戦いながら、「自分で決める」ということを見せていこうと思っている。

## わいふ原稿整理方針

◆投稿誌であるので、「原稿尊重」の方針で整理しています。

◆常用漢字表にない漢字または読みであっても、間違いでない限り、原則としてそのまま載せています。ただし次のような語はかな書きに直しています。

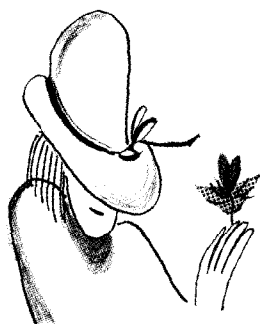
又↓また 程↓ほど 位↓くらい 為↓ため 事↓こと 丈↓だけ 方↓ほう 様↓よう 御↓ご 迄↓まで etc

◆送りがなについては、一応次のような方向で統一しています。

例 変(わ)る↓変わる 浮(か)ぶ↓浮かぶ 話(し)合う↓話し合う 気持(ち)↓気持ち 行(な)う↓行なう 表(わ)す↓表わす

◆用字用語の原則は三省堂発行「用字用語辞典」に準拠しています。

◆投稿は必ず原稿用紙にたて書きでお願い致します。



# じっとガマンの 十年間

匿名

## （トラブルの始まり）

我が家の狭い庭も今が花盛り。チューリップ、シャスターデージー、かきつばた。どれも強い品種だから、手入れが悪くても十年間も咲き続けたのだらう。

「そう十年だ」改めて年数を数えながら、深いため息が出る。私の生まれて初めての近所づきあいの苦労もこの家から始まった。

ダイニングテーブルで、この原稿を書きながら目を上げると、窓越しに花壇が見える。

うちの花壇には春咲く花しかない。だから今が満開。花壇の後ろに生け垣が植えてある。生け垣の向こう側に隣のK家がある。どここまでは普通の家並みを想像してもらえばいい。

この先が少し違う。K家は我が家よりも一メートル五十センチほど低くなっている。

つまりうちが一段高くなっている。これはこの辺の地形の特徴だ。かつて

海であった低地がたんぼになり、たんぼから坂道をヨイショと登ってくると広い台地になる。

坂の途中にK家があり、坂のてっぺんに我が家がある。この上と下という地形の特殊性もK家とのつきあいに大きな影響を及ぼしているのだらう。

K家は敷地面積三百坪。親から譲り受けた土地だそう。もちろん代々この土地に住む。

家はかなり古く狭い。長男が嫁をもらうとき建て替える予定だそうだが嫁は来ない。

長男の年齢ははっきり知らないが、四十五歳は下らないと思う。

不動産屋からこの土地を紹介され、初めて見学に来たとき、あまり好印象でなかった。地形がかわっているし、地震のときが怖いと思った。でも見晴らしはいい。K家の庭は広々として、木は沢山植えられていた。うちが建ってもK家の人々には気にならないだろうと勝手に推論した。結局この土地を購入した。



その後土地代が急騰し、夫と共に「ちょうどいい時期に買ったね」と話し合った。

よかったのはここまでで、その後から現在に至るまで、私はK家から泣かされている。

最初のK家の攻撃は、うちの建築時に始まった。我が家の土地の形は、きちんとした正方形、長方形をなしていない。変形土地だ。そこへ四角の家を建てようとする、土地の境界線ギリギリにかかる場所が出てくる。

K家の主人は、停年を過ぎた六十代の孫のいる老人である。ひさしが自分の境界にかかると言ってきた。うちは平屋根のプレハブ住宅を建てる予定であり、木造のようにひさしが広くないから、境界線にはかからないと家の見取り図を見せて説明した。

建築中に隣家から苦情がくるのはよく聞く話である。我が家だけが例外でない。

次の場面に転回して、あっと驚くことになる。

## トタンべい

ほぼ家が完成したころ、娘たちを自転車に乗せて見に行った。家のドアを開けて中に入り、窓から隣家を眺めて、「あっ」と言った。

トタンべいが境界に沿って張りめぐらされていた。我が家が一段高いのに、そこにトタンべいが張られている。随分力仕事だったろうと想像する。太い棒を境界線に沿って何本も立て、はしごに登って、トタン板をその棒にくぎ付けしたようだ。三方まではいかないが、二方に張りめぐらされたトタンべいを見て、私は言葉を失った。

菓子折りを持って、トタンべいの理由を聞きに行った。大工が水をバシャッと庭にまいた時、ちょうど境界下で庭仕事をしていた水浸しになったそうだ。腹にすえかねてトタンべいを立てたそう。私はK家の老人の性格を垣間見た思いだった。

莫大な建築費を銀行に振り込んだ後で、こんな土地をどうして選んだのだ

ろうと嘆いても後の祭り。

友人は、「あなたの人柄を知らないから意地悪するのよ。気心が分かればしないわよ」と励ましてくれた。

「あの新居を売ろうよ」と夫に言っても取り合ってくれない。

新居の二階からはるか遠く富士山が見える。紫色の富士山のシルエットが美しいとも感じず、私の心は重かった。引越した後も、共稼ぎで忙しかった。三カ月が過ぎたころ、夕方帰宅すると、あのいまわしいトタンべいが取り外されていた。一方だけが外され、もう一方はそのままだった。

その二、三日後、K家の老人に庭越しに会った。東風が強すぎるのでトタンべいを外したと何気なく説明していた。私は黙って聞いていた。

当時、私はK家の人々と仲たがいはしていなかった。引越しのあいさつに行き、会えばニッコリ笑って社交辞令の季節のあいさつを欠かさなかった。

さらに一カ月が過ぎて、夕方帰宅すると、一方に残っていたトタンべいが

なくなっていた。

簡易仕立てのトタンべいが強風ではがされ、バタバタ音を立てていたから、仕方なく外したのだろう。

私は勝ったぞと思った。忍耐してよかった。相手は苦勞して、嫌がらせのトタンべいを張ったが、それを持て余して取り外した。ヤレヤレと思った。

四年ほどは何事もなく過ぎた。もちろん、K家の人々に会々と、庭の美しさをほめ、土地の広さをうらやましがって見せた。近所の新参者は、下手にしなければ問題がない。

## （ピアノ騒音）

次にわき上がってきたのがピアノ騒音だった。うちの二人の娘がピアノの練習をするとき、窓を開けたまま弾いていた。これが非常に隣にはうるさかったようだ。

夏の日ざしの強い日、ピアノの練習中、突然トタンべいを打ち付け始めた。ピアノの音に対抗するかのようにはバンバン打ちつける。びっくりしてピアノ

の練習をやめさせる。もちろん非はこちらにある。私が無神経過ぎた。

ピアノの調律師に相談してピアノの後部に防音パネルをつける。その調律師の特許だそう。音量が十分の一に減るという。クーラーを買って窓を締め、音量の弱いピアノを弾かせた。

それにしても、ピアノが気にさわるなら、一言注意してくればいいものと思う。突然実力行使に出てくる。

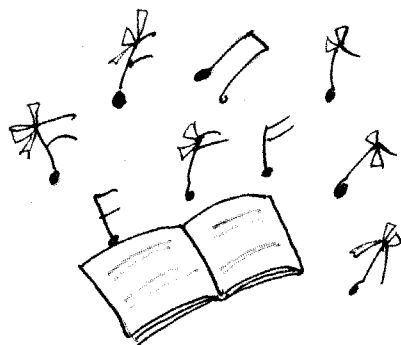
二年ほど前になるが、K家の老婦人がうちにやって来た。「お宅の風呂場はどういう造りになっているの」と問う。私がいぶかしげにしていると、夜は七時に床に入る。テレビをつけ放して寝るが、うちの風呂場からパーンと大きな音が聞こえる。とても気になるという。

トイレの床にプラスチックの手桶けや洗面器を無雑作に置くと、パーンと音がする。夜の静寂の中でうるさいらしい。一体どこまで神経を使えばいいのだろう。

その日の晩から、家中でそっと入浴

するようになった。娘たちは暑いのを我慢して窓を閉めて入る。

風呂場の件から一週間くらいしてから、K家のテレビの音量が高くなった。急にである。K家は住まいが二棟あり、



うちの二メートルぐらいしか離れていない所に一棟ある。そのテレビのボリュームが上がった。

私の憶測だが、この仕打ちは明らかに風呂騒音に対する嫌がらせである。



庭で聞くと、テレビの場面が想像できるくらいすごい音だ。

秋風が吹いて、窓を閉めても我が家に響いてくる。あの音量で家の中でテレビを見て、耳がおかしくならないかと疑った。半年後、音は消えた。

半年間、私は憂うつだった。K家の人格は分かっているじゃないか。あの連中に悩まされるなんてばかばかしいと思っても心が晴れない。うちが加害者になると必ず仕返しをする。あの行為が許せないと思った。

## 人間ウォッチング

あるとき、うちのすぐ近くに住む娘の同級生のお母さんから言われた。

「奥さん、隣のK家にいびられているんだってね」私はK家のうわさ話は母と妹にしかない。近所でK家の悪口を言った覚えもない。隣人はよく観察しているものだと思う。

窓越しにK家の庭の木々が見える。新緑がすばらしい。風にそよぐ新芽を見ながら、ふとペンを置く。K家の手入れの行き届いた庭を眺められることに感謝すべきかも知れない。

高台の我が家が常にK家を見下ろす立場にあり、K家は見上げる。この心理的な違いも考慮すべきかもしれない。K家の十年間に及ぶ嫌がらせ行為を書いていて自分が惨めになってきた。私の場合の近所づきあいの苦勞を書いたが、人の行為をいろいろあげつらうのは気分が悪い。

うちの家族だって無意識にK家の感情を害しているかもしれない。人は皆

違うのだ。

違う人間同士が住み合うのだから近所づきあいは難しい。

難しい近所づきあいをさらに難しくしているのが日本の住宅事情だ。簡単には引越せない。

家屋の値段、日当たり、通勤事情などは検討できるが隣家の人格調査までは不可能だ。

「願わくば、我が家が借家だったら」と何度思ったことだろう。

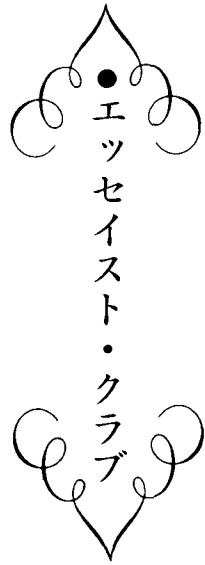
住宅難の日本で、何もかも満足ゆく住まいを見つけることが困難ならこちらの価値感を変えることも必要だとつくづく思う。

引越したかったが、じっと待っていたらトタンべいが外され、テレビ騒音も消えた。

生まれて初めて近所づきあいの苦勞を体験し、相手のある問題はすぐ行動に移すものではないと悟った。

つらい経験だったが、人間ウォッチングにはなった。冷静にじっと待つこともときには必要なのだ。

(元・田沼千恵)



## 月曜日の人

大阪市鶴見区 家守 恭子（61歳）

かれこれ三十年もまえ、小柄でやせぎすなおばさんが奈良から定期的に神さん仏さんの供花を売りにきていた。

それから十年ほどのち、四十歳前後の金太郎さんのような女性が、年をとったおばさんに代わって花を届けるようになった。

「まえの人はお姑さんやの？」

「いえ、母親に当たりまんねん」

似てない親子だな、との印象が残っている。

彼女は次第に得意先をふやし、毎週月曜日には奈良から電車で運んだ花を、足場のよい四ツ橋の私の会社へいったん下ろすようになった。

私が出勤すると彼女は洗い場のタイルにひざを置いてせっせと花の小分けをしている。その花や小枝のカサだかいこと、駅から五分足らずとはいえ、一体どうして運ぶのかその姿を一度も見たことがない。

何年かして、私が三日間のドック検査をうけた梅田の病院で、花を商う彼女と出会い、ほかの曜日にもそれぞれ置き場を確保して連日働いているのを知った。「検査でも花はあるほうがよろしまっしゃろ」と花瓶も調達して真っ赤なバラをベッドのそばに飾ってくれた。

月曜日の朝、洗い場で花束をこしらえる彼女の近くを歩き交って掃除をしながらのわずかな会話で、二人はお互いに年が近く、家付き娘、母親は実母でないことまで同じと知り、親しみが増していった。

彼女は、供花はあげたりもらったりしてはいけないとの信条で、月千六百円の花の料金はうけとり、場所を借りる礼として毎年欠かさず正月花を進呈してくれる。若松、福笹、梅、寒菊、南天、葉牡丹とその豪華な花に、損得ぬきの彼女の義理

堅さが感じられた。

また、売り物に向かない花があると、恐縮して事務所へ持ってくる。仕入れ物だから元値だけでも払うといっても絶対に受けとらない。私は朝夕に水揚げをし、生き返った花を次の月曜日には二



人でながめ、奥さんは手入れがうまいと彼女が言い、私は性のよい花を仕入れたからよ、とほめ合い楽しむ仲であった。

今年の正月あけの月曜日、私が大好物と知ってお餅をいかかえも持参してくれた。

「今日は大阪も寒いけど、奈良はもっと寒かったでしょう？ 特に朝早いとねえ」

「たしかに三度はちやいますわ、いつも三時に起きまんねん」

私は驚いた。家事をこなし、仕事支度を整え、一番電車に乗る日課を続けるのは六十三歳の彼女にはもうハードではなからうか。そのほほが赤く、上気した感じの顔に、もしかして血圧が高いのではと思った。

三月のお彼岸に入る週の月曜日、きまって洗い場にあるはずの花がない。

たしか、彼女の息子の結婚式を春に挙げると言っていた。それでお休みなんだと納得した。

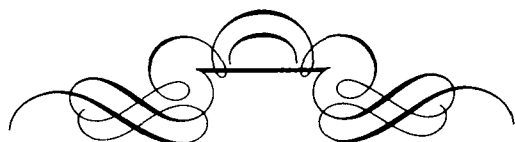
ところが、次の月曜日にも来ない。

二度も続けて休むなど彼女に限ってただごとではない。きつと病気なんだ。それも彼女本人が。家族の病気なら二度も休んだりはしない。

うかつなことに、私は彼女の名前も住所も知らない。

心配でたまらず、梅田の病院まで行って尋ねてみたが、彼女は「花屋のおばさん」でしか通用していないかった。

あれから五回月曜日はめぐりきても彼女はまだ来ない。もう彼女には会えないという悪い妄想が



私の頭から離れない。

二十年近い年月くり返した、四季の花を介しての交流は私にとってかけがえのない大切なものだったとようやくにして気がついた。

住む所は違っても、彼女と私は同じころ結婚し、子供を産み育て、家族の和をはかり、時には体の無理も押して仕事を続けてきた。

いま、老いの恐れに向き合うときになって、突然戦友とはぐれた思いである。

私は彼女に心からお礼を言いたい。そして、ごめんなさいも言わずにはいられない。

## 十二色の絵の具

奈良県生駒郡 高松 恭子

数年前、旅先のドイツで町を歩いていたとき、ショールウィンドーの中に鮮やかな色彩の色鉛筆を見つけた。数えてみると六十色もの色がそろっていた。

思わず見はれてしまった私に夫が言った。

「旅の記念に買ったら？」

ドイツの文房具がいいというのはよく知っていたし欲しかった。しかし私は買わなかった。非常

に高かった値段以外に私を躊躇ちゅうちうさせたものがあるならば、それは幼いころ、父が私に言った言葉だろう。

「絵の具は十二色あれば十分」

私が小学校に入ったころ、二十四色の絵の具が始めた。友達の人か、これを持っていて、私は親に買ってくれとせがんだ。本と学用品は、たいてい買ってもらえた。

ところが意外にも父は、色は混ぜるといくらでもできるから、十二色あれば十分なのだと聞いた。妙に説得力のある言葉だった。私はそれ以上要求できなかった。

しばらくして私は絵を習い始めた。絵画教室へ初めて行った日のことは、今もよく覚えている。教室には十数人の子がいた。まず、私の目に飛び込んだできたのは、ほとんどの子が使っていた二十四色の絵の具だった。

私は圧倒されて思わず立ちすくんだ。そしておずおずと席に着き、十二色の絵の具を取り出した。隣の子がすかさず言った。

「あつ、この子の絵の具十二色しかないわ」まわりの子は一斉に振り向いて、「ほんとほんと」とはやしたてた。

そのとき、にこにこしながら先生がそばに来て



言った。

「絵の具は十二色あれば十分、私は六色でもかけるわよ」

なんと力強い言葉だったことだろう。

ここでは毎回決められたテーマで、それぞれ好きな絵をかくのだが、同じものをかいても、自分で色を作らねばならない私の絵は、いつもほかの子の絵と微妙に色合いが違っていた。私は、それが大層気に入った。

のちに油絵を習うようになった。このときも父が買ってくれたのは、十二色の油絵の具だった。絵の具には、私の読めない横文字が書かれていて、なくなると父に頼んで大阪で買ってきてもらった。中学校に入って絵画教室に通う暇がなくなるまで、私は自分で絵の具を買いに行ったことはなかった。私が画材屋へ初めて足を運んだのは、大人になって版画に凝りだしてからである。そこには、まあ何とさまざまな色がそろっていたことだろう。すっかり色のとりこになってしまった私は、かつて自分が手にしたことのない色をいくつも買った。

コバルト、エメラルド、ラベンダー……。ところがそれらの色は、何年もたった今も、私の絵の具箱に入ったままである。つまり、ほとんど使っていないのだ。

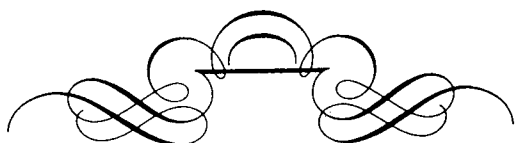


私が、「十二色で十分」という父の言葉をほんとうに理解したのは、これらの絵の具を使って実際に版画を刷ったときだっただろう。

絵の具がチューブに入っているときには、あれほど魅力的だったのに、出来上がった私の版画は、まるで安っぽい広告の写真のようだった。

このとき改めて、私は二つ以上の色が醸し出すあやに、不思議なおもしろさを感じた。

最近、五百色の色鉛筆が発売されたという。しかし私はこれからも、十二色の色鉛筆と絵の具を使うだろう。ドイツの街角で見た、あの立派な布張りの箱に入った色鉛筆より、薄っぺらいブリキの缶に入った十二色の色鉛筆が、私にはよく似合っている。



エッセイスト・クラブ

## 子育てトンネル

栃木県宇都宮市

古沢 涼子

私は夜行列車に乗っている。幼児を抱いて。車窓には私たち母子の姿が映る。そればかり、くつきりと映る。待っても夜景がちっとも見えてこない。暗いのはトンネルの中を走っているせいなのだ。気づく。乗りあわせただけの他人の中で、続く長いトンネル。いやでも自分自身を見る。私が「子育てに専念」していたころを思うとき、そういう光景がしつこく浮かぶ。夢にみたのか、心象風景なのか、繰り返し思い出しているうちに忘れてしまった。わが子はもう二人とも中学生。「トンネルと山越えと、どっちが好き？」子供を持つとか持つまいかと、道標の前に迷っている人に尋ねられると、私はそんなふうに聞かえす。二つの道は行きつくところが同じことも、異なることもある。ただし人生の旅は戻れない、決して両方は通れない。

「歩み続ける根気と、飛び込む勇気と、どちらを選ぶ？」

私はいつでも物好きだったから、十五年前、ト

ンネルに突入した。もっとも当時は「あれもこれもやりたいみち」に踏み込んだだけのこと。気がついたら暗いなかを相当なスピードで走っていたのだ。

子育ての半分は孤独な世界。赤ん坊以外の誰と一緒に暮らしていようと、昼のあいだ誰に預けようと、夜は母子が一对一。健康であれ病気であれ、子供の切望に母親は反応する。乳だ、オムツだ、熱だ、トイレだ。その数々の夜、ほかの誰が子供の声をきく？

そのうち気づく。このごろ私、新聞もテレビも見えない。会話といえば「バア、ブウ」に答えるだけ。わが国に今日、戦争が起きても分かるまい。でも、子供と私の健康だけでほんとうに精一杯……これが闇でなくて何だろう。そして時間がどんどん過ぎ去っていくのだけは強烈に感じる。こういうときだ、暗い窓に自分のほんとうの姿が映ってしまうのは。

やりたいこと、できること。やめてしまったこと、できないこと。それでも、どうしても、やりたいこと。

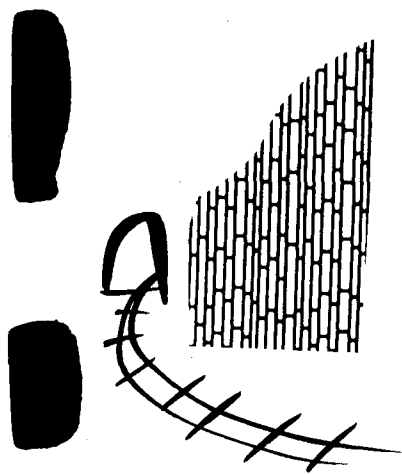
トンネルの出口はいつたいどこ？ 今までとまったく違う景色の中で、今までとは少し変わった私はどう歩きたそうか……と楽しみに思える人には

トンネルが向いている。

しかし、トンネルにさえ入らなければ、よい景色はたぶん中断されることなく続くのだろう。目をつぶるのが惜しいくらい、今の旅に夢中人人は、そのまま光の中をひたすら走ってみれば？ トンネルの上にそびえる山しか、高みはないかもしれないし。きっと、そうかいだろうなあ、二十一三十代の若いヤマ。

私はもう、トンネルはぬけてしまった。あとは見えるかぎりの旅しかないと思うと、ちよっと残念なのだ。

どちらを選ぶ？ 選べるものならば。もうすぐ、友達の一人が、遅めの初産を迎える。



## 桜

奈良県奈良市 田中 慶子（46歳）

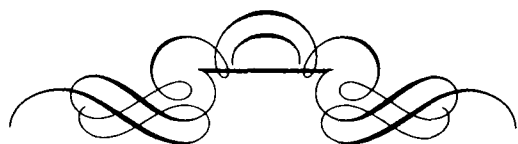
母の看病で大阪阿倍野区の実家に滞在した。地下鉄西田辺に降り立つと、いつも来ているところなのに、そこですれ違う見知らぬ人々が、今までは違ってみな懐かしい。五分ほど歩くと長池幼稚園がある。その三軒西に私の実家があり、さらに一分西へ行くと阪南小学校がある。まだ真つすぐ十分歩くと阪南中学校があり、その向こうが住吉高校である。私の通った幼稚園から高校までが自宅を含めてほぼ一本の道に収まっている。

毎日医者が点滴に来てくれたが、四十六歳の私を彼は「お嬢ちゃん」と呼ぶ。私が赤ん坊のときから診てもらっているからだが、「お嬢ちゃん」には笑ってしまった。

「お互い年を取りましたなあ」

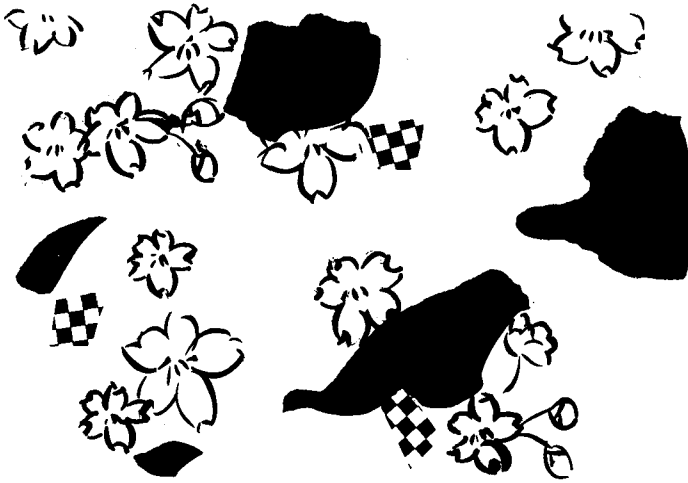
彼は点滴の用意をしながら母にしみじみと言った。この福井先生とは、私たち一家が戦後すぐ満州から引き揚げて来て以来のお付き合いである。

値の安いことで評判の王子商店街の入り口に先程の福井先生の医院がある。買い物に出たとき支



エッセイスト・クラブ

払いをしようと中に入ると、近くに住む、母の生野高女時代の友人に会った。彼女は好きな人との結婚を、家の格が違うという理由で父親に「反対され、意に添わぬ結婚をした。数カ月で離婚した彼



女はその後、既に結婚していたその好きだった人との道ならぬ恋を、相手の男性が十年ほど前八十歳で死ぬまで続けた。往年の美しさをしのばせる彼女は、

「もうすぐあの人に会えると思うとうれしいです」と、このとき私に語った。

商店街に入るとなじみの魚屋さんが遠くから、「けいこさあん」

と叫ぶ。次々と変わる店員さんが皆、主人を倣<sup>なま</sup>って親しげに「けいこさん」と言う。そう呼ばれると悪い気がしなくて、つい買ってしまうのが我ながらおもしろい。新しくできた店と思っていたのに、もう二十年以上経つのだ。

お昼はおうどんにでもしようと、うすあげ四十円のを一枚買った。

「何しましょ」

「うすあげでっか、へっ」

「へっ、四十円だす」

「へっ、おおきに」

と、最後には腰までかがめて頭を下げてくれる。まことに大阪商人のかがみと感心した。

商店街を出ると女の人が親しげに、

「こんにちは」

と言う。近眼の私が相手をよく見ると、

「覚えてはりますか？」

確か小学校で一学年下の人だった。そのころは言葉も交わさなかったが、顔は知っていた。大人になって出会うと、懐かしくてつい声をかけたくなるのだろう。

「お変わりございませんか？」

とその人。

「ええ、今ちょっと実家に来てますねん」

「まあ、それはそれは」

と言って別れた。

「まあ、それはそれは、だなんて、大人びた口きいて」と思ったとたん「あのこも四十五なんだ」と気づきおかしくなった。

帰り道、毎年見慣れている阪南団地の公園の二十数本の桜が、今も見事に夢のように咲いていた。その横に団地へ通じる階段がある。そこは夜になると水銀灯に照らされて労働で親たチェーホフの舞台装置を思わせた。昔、団地のピアノの先生のところに通うとき、そこを歩くほんの数秒間、私は恍惚とした気持ちになったものだ。

七月になると八十九歳と八十二歳の両親は、郊外に住む兄のところへ引越す。この桜の花をまた見ることがあるだろうか。満開の花の下に、私はしばしたたずんだ。

## 季節の中で生きること

三重県四日市市 高島 直子（28歳）

我が家の味噌は自家製である。作り方はいたって簡単で、自家製大豆を圧力鍋で柔らかく蒸してから「もちつき機」でつぶす。塩とこうじを加えて混ぜ合わせる。よく混ぜたら一つかみずつ丸め、プラスチックの容器に入れてふたをする。後は小屋の中にいれて、一年以上寝かせれば豆味噌の出来上がりである。

手間暇かけて作った味噌は、添加物もなくて抜群においしい。今年も私と八十五歳の祖母と二人で、台所中べたべたにして作った。二歳の次男も、しゃもじ片手に奮闘した。顔や服に、大豆のつぶしたものをいっぱいつけて、いかにも得意そうに手伝っていた。

味噌づくりが終わると、もうそろそろ冬が去って春が来るのだなあと、季節の流れを感じる。農家の暮らしては季節ごとの仕事があつて忙しいけれど、とても楽しい。素朴なしみじみとした生活の中には、自分のためだけではない誰かのための作業があり、私はそのひとときを愛している。

庭の片隅につくしんぼを見付けたときは、とてもうれしかった。長い間さがしていた恋人と巡り会ったような、わくわくした気分だ。ふきのとうが顔を出した朝は、空の青さが格別だった。桜の花が咲くころになると、庭の竹の根元から、竹の子がよきによき生えてくる。小屋の裏の湿った場所には、みつばがいっぱい伸びてくる。家の庭なのに、庭じゃない。不思議な空間を農家は持っている。



私は農家に嫁いでよかったと思うのは、季節の中で生きられることだ。それを教えてくれる小さな植物たちと、一緒に生きていけることがなによりも楽しい。うれしい。

都会には都会のよさがある。人がいっぱいいて、新しいものがあふれている。私は、昔から変わらぬもの、よさを見詰めていこうと思っている。それがある暮らしは、農家の暮らしなのだ。

## 点訳奉仕

大阪府東大阪市 中塚 末子(68歳)

戦中、長いドレスの高貴の女性が、包帯巻きの奉仕をされている写真。それが私のボランティア意識の原点であった。そんな私が、有閑マダム仲間入りをするような面はゆさを押して、三カ月の市の点訳講習を受けた。当時の私は、急速に片眼のみ白内障が進み、ライフワークとして精出してきた染色をあきらめ、日常生活にもさまざまな不自由を味わっていたからである。

市のボランティアセンター傘下の点訳サークルには、昼の部と、夜の部があり、メンバーは、意外にも忙しい主婦やお勤めを持つ人たちが多かった。

自分の打つ点字が待たれて読まれることに感激し、つたない指先をむち打って習った。さらに、白内障でやむなく断念した趣味に代わり、再び生きがいを得た喜びも大きかった。以来、易しい点訳ものばかり引き受けて、打てる、打てる、と自己満足を続けてきた。

私の参加した昼の部の「あかつき」では、月刊

点字ミニコミ通信の製作、地域盲学生の教科書や課題図書の点訳など。最近は盲学生を受け入れる普通校が多くなり、高校や大学の参考書、試験問題の点訳もする。

「間違っ打って、それで試験に落ちはったらえらいことや」

メンバーは常に正確さに責任を感じ、二級英点、数学理科、未だ確立されていない点字文法、と、いつまでも勉強を欠かせない。

表音符号である点字は、打つのに比べて目で読

み直す校正は厄介な作業である。戸棚には校正を待つ未完成本が積み重なり、点字がつぶれそうになっている。

それでも毎年数冊、点字図書館へ私たちは自主的な点訳本を贈ってきた。

変わったものには、大晦日の紅白歌合戦の歌詞カードの点訳。市内の高架駅の手すりに方向案内を、切符の自動販売機に金額を張り付けるなど。

当初、点字板と点筆で一字一字を打っていたのだが、六点の点字タイプが普及し、一気に能率が上がった。はじめは、私が盲目になったときのために点字を習っているのだ、とばかり信じていたらしい夫も、最近出始めたパソコン点字機や、紙の寄贈に尽力してくれるようになった。さらに小形人力機「ポツポツ君」を、当市の身体障害者の青年が開発したり、点訳も変わりつつある。

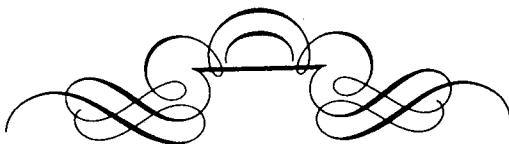
毎年夏休みに中高生の点訳講習を行なう。彼等の打つ手紙は楽しい。

「ハロー元気かい……」

何と軽やかな呼び掛けだろう。

この子らが福祉に関心を持っていて心強い。ボランティアが、障害者とかかわり方が、日常の何気ないことになるのも、そう遠くはあるまい。

(え・カステラネコ)



エッセイスト・クラブ

# ズバリ一言



## 生活科と 子供たち

横浜市鶴見区・清水宏子（36歳）  
（獣医師）

生活科の指導計画の中に、  
『生き物を育てよう』という項  
目があるため、我が家（我が家  
は動物病院）の近くの小学校の  
どのクラスも小動物を飼い始め、

ハムスター・モルモット・うさ  
ぎなどを連れてくる。

無制限に繁殖してしまい管理  
が行き届かなくなったり、症状  
が進んでから連れてこられたり、  
学校の飼育動物は、それなりの  
苦勞がある。

たまたま居合わせたお客さん  
の中には、「結局無責任になる  
んだから動物にとってはかわい  
そう」という人もいれば、「今  
の住宅事情では飼えない家が多  
いから、今触ったり世話したり  
しなかったら恐らく一生動物と  
かわれなくて、そのかわいさを  
感覚的に分らないで終わって  
しまう」など賛否両論。なる  
べく環境をよくして病気の予防  
に心がけていくよう指導するが、  
やはり徹底するのは難しい。

しかし子供たちの反応は「あっ  
先生、モルモットね元気だよ」  
「ねえねえ、学校のチャボ下痢  
してるけど大丈夫?」「あのう





さぎ、赤ちゃんいっぱい生んだよ」と、目がキラキラ。こんな時、動物たちがさまざまな形で私と社会を結ぶ接点になって、



こんな形で少しは地域に役立つことができるんだなあ、仕事の中でもこの部分は子供たちに夢を与えられる部分かなあと思う。

こうして動物を通じ子供たちの感受性・自主性・理解力・責任感が自然に強まり、より大きく成長していくことができればすばらしいことである。

アメリカでは、小学校の教育プログラムの中で「小動物に慣れる」から始まって「猫について」「犬について」「野生動物について」「動物と人はいかに助け合うか」「動物の死にあたって」などを学年ごとに学ぶそうである。日本も将来、生活科からもう一歩前進発展してそんな授業もあったら、と生活科に期待している私である。

注・生活科・次世代への学校教育を意図していろいろな活動や体験を大切に、さまざまな技能や習慣の定着につながることを願い、理科と社会の代わりに新しい教科として取り入れられたいもの。

## のんき 暢気な女の 暢気な話

埼玉県浦和市・佐藤乃麻

誰にけんかを売る気も勇気もないけれど、心の奥底で秘かに思いつけていることがある。

男女同権、男と女の平等・不平等。男の自立に女の自立。叫ばれ続ける常套句。

男と女は同権に決まっているし、男女平等なのは自然の流れ。そんな当たり前のことは、分かっている。

だが、男と女は本質的な部分で、どうも違いがあるような気がしてしょうがない。そこを踏まえなくて語られる平等は、何だかとても不自然。神様はやっぱ偉い。人間をうまく創ったもんだ。

難しい話は抜きにして、男は度胸に女は愛嬌めいせう。男は強くたくましく、女は優しくしたたかだ。世の中作っているのが男だとしたら、世の中支えているのは女に違いない。

どういうわけか、時流に逆って、それでもいいんじゃないかと思えてくる。

男女平等の名のもとに、仕事も同じに頑張って、家事も二人で分け合って、それも確かに素晴らしい。

女性の自立を背中にしよって、給料互いに出し合って、何でもかんでもひざ詰め談判、カンカンガクガクの意気込み、それも確かに頼もしい。

だけど私は元来怠け者らしく、やっぱ男に守って欲しい。

だからって、私だって毎日フラフラ遊んでいるわけじゃない。ちゃんと仕事もしているし、恐れながらも社会にだって参加し

ているつもり。

それでも最後には守ってもらえるという安心感と心地よさが得られるならば、多少の家事には目をつぶりましょう

えっ？ そんな安心感はただの思い込みだって？ まあ、いいじゃありませんか。考えてみれば、世の出来事の半分は思い込みと勘違いの繰り返し。何でもかんでも理詰めで考えるのは、ちよつと息苦しい。

ついにもう一つ言ってしまう、男女が平等ということと、一直線上のラインに並ぶということとは、同じことではない、と思いたい。同じラインに並んだことで、背負うリスクは大きく。かといって、権利は主張するが、リスクはごめんじゃ、女の名がすたる。

前に読んだショートショートの一つにこんな話があった。思わずうなったのをよく覚えてる。



―時は昔、男たちは山に猟に行き、女たちは河原で洗濯。女たちはギューギュー洗濯物を絞りながら、楽しそうに笑う。「男って単純よね。あんたが一番、あんたが頼りとおだてていれば、どこにだって獲物を探しにいくのだから」ほんとうよね。すごいすごいと言いながら、酒

の二本もだせば、次の日も喜び勇んで出掛けていく』……男ってほんとうに単純／＼」そしてまた、各自の夫の下着をザブザブと洗う――。

作者は男。要は男も知っているんだ。おだてられていることも、女に育てられていることも。「だから女は駄目なのよ／＼」どこかで嘆く声が聞こえたとしても、私はこの考えと暮らし方を、変える気なぞサラサラない。

これでも、毎日いら立つこともなく私は結構生活を楽しんでいる。

負けるが勝ち、という言葉もある。気楽にいきましょう。肩の力を抜いて。人生、楽しいに越したことはない。

男と女に必要なのは、尊重しあう気持ちと譲り合い。少しの真実と大きな錯覚。そして、忘れてはいけない、単純明快なおおらかさ。

あなたが楽しいなら私も楽しい。私が幸せなのだからあなたも幸せに違いない。こうして私は今日もまた、鼻歌交じりに一人つぶやく。

「女は偉い／＼」

あなたは  
どう  
思いますか

山口県・星 恵

私は今、とてもショックを受けている。四十年も愛読してきた朝日新聞に裏切られたからだ。いや、正確に言うところではない。私が、「朝日」をよく知らないままに、全面的に信頼していたから、こんな思いをする羽目になったのだ。

「朝日」の家庭面に最近掲載さ

れた次の投稿が原因だった。  
「激流——」を読んで胸を痛めたが、励ましのアドバイスなど、とてもできるものではなく、私はただ好転を祈るだけだった。  
八日目に「夫婦の——」が載った。

「激流——」の主婦と同世代の主婦が、自分にも可能性のある問題としてとらえたうえでの熱い声援だった。  
私はホッと、これで辛い立場に立たされているあの妻も、少しは元気づけられることだろう

うと思った。  
勇気を出して投稿したかいがあったというものだ、他人ごとながら喜んでた。  
ところが一週間後、先の二つの投稿を受けて「妻や母——」と「妻にとり——」の二つの投

稿が続いて載ったのだった。  
なんだか引くかかるものを感じた私は、繰り返し読んでみた。すると、だんだんに憤りがこみあげてきた。  
二人の投稿からは、自立(精神的に)もできていない主婦の

ていたら、我が家に離婚といふものが、現実みを帯びて侵入してきた。  
恋の激情に身をおいている人にとっては、平凡な幸

福など、スリリングで熱い時間の前には吹きとんでしまふのだらう。実際、恋をしている時、自分自身、変ど、それが私の毎日の仕事にわたってしまうものだし、退だ。子育てと家事の繰り返し、屈な日々が、また生き生きと輝き始める

ものだ。この恋があれば、何もないと思う。

夫の場合は、我が子までも、かすんで見えなくなるほどの激流に流されているらしい。岸辺で呼び戻して

しなか、ため息をつく日もある。  
けれども、激流の中の夫を思いつつ冬の日だまりの中を遊ぶ、子供たちを眺めていると、今さらながら、今の時点で、私が夫の言う

愛が思っている場所なのだ。  
平凡さの中に埋まってゆく、あせりは、もちろん私も知っている。けれども、今の時点で、私が夫の言う

「子供のこと、自分の長い人生のことも、考えてみたら」。そう言う私に對し、自分の生き方の方が大切だと夫は答えた。  
きょうは、朝から冷たい雨が降り続いている。私は、これから先のことを、決めかねている。



## 激流に身をまかせ夫婦

生活の基礎づくりという、家庭の中で私の担っている重要な役割に気づく。静かな生活を続けていたうちにな、見慣れすぎて気づかなくなるけれど、家庭とは、ホッとすると、

夫に好きな女性ができ、私と別れたいと言っている。テレビや雑誌によくある、よその話、だと思っ

福など、スリリングで熱い時間の前には吹きとんでしまふのだらう。実際、恋をしている時、自分自身、変ど、それが私の毎日の仕事にわたってしまうものだし、退だ。子育てと家事の繰り返し、屈な日々が、また生き生きと輝き始める

ものだ。この恋があれば、何もないと思う。

夫の場合は、我が子までも、かすんで見えなくなるほどの激流に流されているらしい。岸辺で呼び戻して

しなか、ため息をつく日もある。  
けれども、激流の中の夫を思いつつ冬の日だまりの中を遊ぶ、子供たちを眺めていると、今さらながら、今の時点で、私が夫の言う

愛が思っている場所なのだ。  
平凡さの中に埋まってゆく、あせりは、もちろん私も知っている。けれども、今の時点で、私が夫の言う



傲慢さが見えてくるだけだった。

単に運がよかっただけかもしれない平穩無事を、魅力的な女でいる努力を怠らなかつた自分の功績とでも思っているらしいベテラン主婦が、若い主婦に対して、人生訓の一つも垂れてやろう、ということだったのだろう。「夫に好きな人ができるのは、妻が魅力的な女でいる努力を怠るからだ」との、男の身勝手な論理を、それとも知らずに有り難く信奉して、妻の座にしがみついている二人。それを堂々とほかにも押しつけようとすることの態度。

その態度が、今回の場合には、苦境に立たされて泣いている者を鞭打つことになっているのが分らないのか、と言ってやりたい。

「朝日」は、一体どういうつもりでこの二人の投稿を載せたのだらうか。まさか、全面的に肯

定して載せたわけではないだろう。いろいろな意見を載せて、ここでみんなに考えさせようとしているのか。そう考えた私は反論を投稿したのだった。

私の反論もほかの人のそれも載らず、結局あの二人の意見が「朝日」の意見でもあったことがハッキリした。信じられない私は、担当者が年配の男性だったのかと思い、往復ハガキの質問状を出してみた。返事はなかった。

長い年月、信頼し、尊敬さえしてきた「朝日」が、あの程度のレベルでしかなかったのか。

つづいて「激流——」考

これは投稿者が、極力、感情を抑えて書いた文章であつたかもしれない。それにしても、この大変な状況に立たされている人の文章にしては、冷えた感じを受けるのはなぜだろう。

ほんとうに、投稿者は夫に向

かつて、「子供のころ、自分の

長い人生のことも考えてみたら」としか言わなかつたのだらうか。もしそうだとしたら、妻は夫を愛していなかったのではないか、という疑問が湧いてくる。愛しているのに、そんなふうにしかなえないのだったら、それも問題だ。いわゆる「ブライドが高すぎる」結果だろうから。

「妻にとり——」投稿者考

この投稿者は私と同じ地方都市に住む投稿マニアで、ここ十年くらい絶えず朝日新聞に投稿している。したがって、彼女の文章のバターンはもとより。生い立ちから家族構成、近況に至るまで、皆に知られている。

良妻賢母の彼女は、向上心の強い勉強家で、新聞をよく読むのはもちろんだが、読書もよくし、講演会や美術館などにもせっせと出掛け、魅力的な女になろうと日夜努力を重ねているらし

い。

文章教室へは十年も通っていて、昨年は、県立図書館主催の読書感想文コンクールでも受賞しているほどだ。

現代に生きる主婦として、模範的とも見えた彼女だったが、今回の投稿によって、そうではないことが分かった。

「婦らぬ人」の意味も知らずに書いていたのにも愕然としたが、彼女が読んだ「生きて行く私」は、自立した女性として先駆的に生きている宇野千代の自伝ではないか。そんなあれこれを熱心に読んでいながら、自立とは無縁に生きている彼女。

人生の重大事を抱えて困惑している人を、思いやることもできない心の持ち主。

おそらく今後、彼女は必死になつて「自分を磨く作業」を重ねてゆくことだろう。

(え・奥島千恵子)

# 口があるならモノを言え

無口な夫たちへ

東京都国分寺市 立花 芳子

## 「会話」が続かない

しゃべらない男としゃべり過ぎる男とどちらがイヤかというと、正直言ってしゃべり過ぎる男のほうが見苦しいような気がする。しゃべらない夫にいらいらするのと、しゃべり過ぎる夫にうんざりするのと、どちらを選ぶときかれたら、多分いらいらのほうを選ぶと思う。

しかし、私の周りの妻はほとんどみなしゃべらない夫にいらだっている。

しゃべり過ぎる夫の悪口はしゃべり過ぎる夫の妻たちに任せて、私は「しゃべらない夫」を俎上に乗せることにする。

しゃべらない夫を持つと家の中が静かになるかといえば、決してそうではない。夫の分も妻がしゃべるから、妻の声だけがきんきんと響く。子供が女の子だった場合（うちはそうだ）、その子もしゃべるから、家の中は四、五人の女がいるのではないかと思われるくらいやかましい。

自分でもよく思う、何てうるさい家だろう。

でも妻は夫の分もしゃべっているのだ。子供が何か相談してくるとする。男親が答えたほうがよいのではないかと思われる質問に対して、夫はまず自分から声を発することはしないから、一瞬沈黙が訪れる。

子供がうけた顔をして答えを待っているのに、妻は夫の代わりに夫の意見（と思われること）を口に出す。夫に「そうでしょう？」と念を押すと、「ウム」とのどの奥から音を出す。決して言葉で答えることはない。常に音である。会話はそれで正しい。あとが続かない。

作家の宮本美智子さんが、

「男は大切な話の時は、必ずといってよいほど眠っている」

と言っていた。

そう言えばうちの夫も私が真剣に話しているときに限って、新聞に顔を埋めて例の「ウム」という音を発するのだ。

## 妻にのしかかる重責

しゃべらない夫の妻として、私が一番つらい思いをしたのは長女が二、三歳の時であった。私たちはそのころ、経済的な理由もあって共働きをしていた。長女は非常に体が弱く、ひと月に一度は熱を出していて、その度に私が会社を休まなければならぬという有様だった。頑張ってよい仕事をしようと思っていた矢先のことだったから、無念さが先に立って、ほとんど長女を可愛がることができず、時にはひどい仕打ちをしたこともある。

会社を辞めたほうがよいのではないか。でも生活がかかっているし、第一今まで築いたキャリアをすっかり捨てなければならぬ。私はあれこれ考え過ぎて、頭がおかしくなりそうだった。実際、少しノイローゼぎみだったのだろう。お皿を壁に投げつけたり、ダイニングテーブルをひっくり返したり、時には精神安定剤を大量に飲んだりした。それでも夫は何も言わず、怒りもせず、黙って私を見ていた。

私だけがひとり、仕事か家庭かという選

択を迫られている。そしてどちらに転んでも育児という重責をたったひとりで担うことになるだろう。しかもいつも私ひとりが悪者にされてしまう。「○○さん（夫の名前）は穏やかでいい人」というのが衆目の一致するところだからである。でも私の目には、夫が家庭のトラブルから逃げようとしているとしか映らなかった。

夫は私が何を相談しても、「ウーン」と考え込むだけで自分の考えを口にしない。「ウーン」と考えた後、「ご飯にしようよ」とか「風呂に入ろう」とか「明日が早いからもう寝よう」と言う。私は少しくらい寝るのが遅くなっても、夫の言葉を聞くほうが大切だった。しかし夫は、妻が働く、働かないはあくまでも妻の問題で、自分には関係ない、という態度をとった。「君が働きたいなら、働いてもいいよ」と繰り返し続けた。

私は、これは二人の問題なのだから夫自身がほんとうはどうしたいのか、どうしてそれが聞きたかった。

今、夫を責め立てると、彼は決してそんなことはないと言い張る。そして当時を振

り返って、「僕はあのころ、君の虐待から由美子を守るために、君には内緒でよく由美子遊びに連れて行ったり、一緒にテレビを見たり、慰めたりしていたよ。それに君のこともとても心配していた」と言う。

私もまた自分のことしか頭になかったから、そんな夫の姿は目に入らなかった。夫が「言葉で」私を説得したり、自分を表現



したりしなかったからだ。夫は頼めば何でもしてくれるが、言葉だけはかたくなまでに出し惜しむ。それは今でもあまり変わらない。

## 離婚した友人

つい先日、やはりししゃべらない夫を持つ友人と、お互いの夫の悪口を言い合ったのであるが、彼女の家もまったく同じで、この前は「もう離婚してもいいかな」とまで思ったそうである。彼女は冗談で言っているのではなかった。今は落ち着いたが、いつなんどき、何があるかわからないから現在職業訓練に通っているという。

壁に向かってししゃべっている気分になるのなら、いっそほんとうの壁のほうが諦めもつくというものだ。特に子供の問題や双方の実家の問題を話すときに夫が「無言の行」をきめこむと、妻の言葉が宙に浮いて行き場がなくなり、それがそのうちまとめで頭上に落ちてきて、最悪の場合は離婚ということにもなりかねない。私は実際にそんな例を知っている。

離婚したその友人の夫もししゃべらない夫だった。「フロ」「メシ」「ネル」も満足に発音できない人だったから、子供の問題や二人の人生など語れるはずもなかった。口をきくと寿命が減るでも思っているのだ

はないか。彼女が話しかけても目を合わせようとせず、まして自分からまとまったことを話しかけてきたことなど一度もなかったという。

「ししゃべらない」という以外にもいろいろ



問題はあったのだろうが、彼女には「ししゃべらない」というのが特に耐えられなかった。「ししゃべらない」ことがすべてを象徴していた。自分がばかにされたような気がするというのだ。

妻の存在をまったく認めていないような夫。ほんとうにこういう夫は多い。仕事

大変なのは認める、疲れて口をきくのも面倒くさいことだであるだろう。毎日とはいわない、一週間のうち一日でも話しかけてくれればよいのに。

一体何のために私たちは一緒にいるの？

これじゃあ、主人と奴隷じゃないの、しかもセックスつきの。私はこんなところで一体何をやっているのだ。というわけで、ある日突然彼女は仕事を始め、「会話したい欲求」を外に向けた。そして、子供が二十歳になったのと同時に家を飛び出してしま

い、離婚届だけを夫に送り付けた。



「なぜだ、オレが何をしたというのだ」  
（男はいつもこれだ）とあわてた夫は彼女のところに駆け付けて、それはそれはよくしゃべったという。こんなにしゃべれるのならもつとまんべんなくしゃべっておけばよかったのに。彼女の心が戻るはずもなく、ほどなく二人は離婚してしまった。

この夫は何か悪事を働いたわけではない。要するに「何もしなかった」のである。何もしなくても、生活レベルでは全て誰かが（ママか妻が多い）面倒見てくれる、という日本の構造悪の中でぬくぬくと暮らしていて、足元をすくわれたのである。

## 我が家を救った夫の一喝

これは「しゃべらないで」妻に捨てられた夫の話であるが、モノも言わずに妻を捨てた夫の話もある。これはここでテーマにしている「しゃべらない夫」とは多少タイプが異なるが、家庭の悲劇という点では同じなので書いておきたい。

彼女（私の友人の友人）は現在四十歳前後だと思ふ。二十五歳の時に三十歳の夫と結婚して子供が二人生まれた。彼女自身は

東京生まれの東京育ちだったが、夫の仕事の関係で九州大分県の田舎で暮らしていた。夫は誠実でおとなしい人だった。知らない土地では友達もなかなかできないし、おまけに夫はあまり口をきかない人だったので、彼女は長い間寂しい思いをしてきた。

二人の子供が学校に上がると彼女にも時間ができた。家族ぐるみの友達もできた。彼女の周りの夫婦は、日本では珍しくよく連れ立って外食をしたり、酒を飲みに行ったりしていた。彼女も頻繁に誘われたのであるが、彼女の夫は仕事が忙しくほとんど妻に付き合うことはなかった。しかしだからといって、妻が夜出かけることに対して反対をするわけでもなかった。

ほかの夫婦と、あるいはひとりで夜の街に飲みに行くと、男たちは夫とは違ってまっすぐに自分を見て、自分に向かって話しかけてくれる。彼女は今までにない晴れやかな楽しさを味わうようになった。

当然のように彼女は一人の男と恋に落ちた。相手にも妻や子供があった。彼女の夫は事実を知りながら、見て見ぬふりをした。一言も何も言わなかった。彼女は夫が何か

言ってくるのを心のどこかで待っていたという。でも夫が何も言わないものだから、彼女も意地になって男との関係を続けた。どこまでやれば夫が怒るか、彼女は一度見たいと思った。

そして二年。夫はついに「オレたち、もうダメだな」と言う一言と、離婚届を彼女にたたき付けた。彼女は申し開きをするにとすらできず、二人の子供を置いて家を出た。相手の男は結局自分の家庭を選んだ（このことはまた別のところで話そうね）。

情けない話だ。これは妻の自覚と自立心の欠如が最大の原因であるといって間違いない。夫が黙々と働いているのを横目に、妻はほかの男と不倫関係に走る。どう見ても妻が悪いに決まっている。

しかし、私が解せないのは、夫は妻の不貞を知っていて、なぜそれを黙認したのかということである。もはや妻に何の未練も愛着もなかったのだろうか。だから妻の不倫は渡りに船であり、それだからこそ妻を「泳がせた」のか。そうであれば何と陰險な夫かと思う。敵ながらあっぱれというべきか。そうではなくて、夫も苦悩し、妻が



自分から戻ってくることを願っていたのだろうか。

妻のほうは、もし夫が何か強い言葉を自分に向けて発していたら、自分は夫の下に戻ったという。無責任で勝手な言いぐさだと、不愉快になる人も多いかもしれないが、私には妻のこの気持ちが分かるのだ。

私も結婚七年目に片思いの恋をしたことがある。来る日も来る日もその人のことばかり考えているから、食事の支度も満足にできず、グループで飲みに行くのと、その人が帰るまで私も席を立てなかった。であるから、表面に出る行動は「夜遊びばかりして、食事は毎日ほかほか弁当」ということになる。

そんな状態が数カ月続き、私はこの辺りで本気で誰かに救ってもらいたくなった。虫のいい話で恐縮だが、そのとき、私を救えるのは夫しかいないと思った。その「彼」が私を救ったりしてくれたら大変なことになるからである。私は子育てのときと同様、このときも夫の言葉を待った。夫が真剣に何か言ってくれなければ、今度こそ私たちはおしまいだとさえ思った。他力本願もいそこだ。

結果は、半年ほどたったある日、ほかほか弁当を前にして夫が「こんなもの、もう食えない。オレが『ウソだよな』と思っているうちにやめとけよ」と一喝して、私の浮気も幕となった。

七年前のこと。これは夫が言葉で一家を救った珍しい例である。

## 夫の「言葉」が欲しかった

私も寡黙な男は好きだ。軽薄で、妻のおしりばかり追いかける「ワシモ族」なんて、考えただけでもゾツとする。けれど、場合によっては自分の考えを言葉で表明しなければならぬこともあるのではないか。しゃ

べらなければわからないときだってある。根津甚八や田村正和なら、何も言わないでそこにいるだけで絵になるかもしれないが、普通の夫はそうはいかない。妻に向かってもっと言葉を発してもバチは当たらないし、将来のことを考えるなら、そのほうが絶対に得だと思う。

夫に「なぜしゃべらないの？」と聞くと、「女がしゃべり過ぎるからだ」と姑しゅうとこのような答えが返ってきた。でも私がしゃべらなくとも、夫はやはりしゃべらない。夫は「アゴの筋肉が男のほう弱いのではないか」と言う。それに、人生にはそんなにムキになってしゃべらなければならないことはめったにない、と言う。

夫はまた、「よくしゃべるほうがきっと悲観論者で、世の中を動かすのはこういう人だから、せいぜい頑張れ」と、人をばかにしたようなことを言う。

ここまで書いて思ったのだけど、最近夫が少しはしゃべるようになった。今までは「フロ」と「メシ」しか言わなかったのが、最近「ネル」まで言えるようになった。一言増えて一・五倍だからいたしたもので

ある。

原因は何かと考えてみた。土地価格の下落にも見られるように、最近景気に陰りが見え始め、夫の会社にもその影響が微妙に反映されてきているというのだ。したがって、仕事に忙殺されるようなことがないらしい。帰宅時間が平均一時間くらい早い。平均一時間というのはすごい数字である。早く家に帰ると家族と日常生活をともにする時間も長くなる。

綿の詰まったような頭に妻から何時間もかけて子供の話をたたき込まれるより、三十分でも一緒に過ごすほうがずっと子供の様子も成長もよく分かるというものだ。そうなれば自然と共通の話題も増える。不景気も何かの役に立つものだ。

妻はほんとうは「しゃべらない夫」を槍玉に上げているのではない。「心を閉ざしている夫」「妻を人間扱いしない夫」をなっているのだ。「会話」とは「さあ、しましょう」といってするものではない。何かが伝わるなら言葉などほんとうは必要ないのかもしれない。けれども夫の沈黙に妻は拒絶を見る。ある時期、妻はとても孤独



だから、夫に拒絶されたらもうどこにも行き場がなくなってしまう。

長女が幼かったころ、私はほんとうに、心から夫の「言葉」が欲しかった。あんなに夫との「会話」を渴望した時期も珍しい。妻にはそういうときが必ずある。自分が生きているということを確認するのに、夫との会話以外、いかなる方法も閉ざされてしまふという時期がある。ときに言葉はむなしなものだけれど、徹底的に言葉を交わさなければ解決しないときもあるのだ。言葉に飢えた者でなければこの気持ちは分らないだろう。

(元・小宅昌枝)

## ★わいふバックナンバー

(在庫のあるもの)

各号特集テーマ

- 186号 お医者さんを診断する
- 209号 わがふるさとの現代史
- 213号 私の夫の労働人生
- 226号 セカンドハウス持ってみたらば
- 227号 子どもの出現
- 229号 私の職業人生
- 233号 私と学校
- 234号 父
- 235号 我が家を手に入れるまで

定価二一八号までは四五〇円、二一九号より四六〇円。送料は実費負担で。

Tel〇三ー三二六〇ー四七七ー  
三二六〇ー四七七三

# 働きたに

## ライターへの道

東京都三鷹市・豊城智子

私が初めてライターになりたいと言ったとき、夫はあ然として絶句した。

「お前自分のことが分かっているのか？三十歳をすぎておまけに子持ちなんだぜ」というわけである。

「それにお前にはキャリアがあるじゃないか。それを全部捨てようというのか……。十八や十九じゃあるまいし、今、一から出直すなんて気違いさだよ」

私は結婚するまで六年間、宝塚に在籍していたのである。観客側からいえば、好き嫌いのはっきりと分かれる劇団とはいえ、一流であることは確かだ。おまけに私が入っ

たときは、「ベルバラブーム」の真ったで中で、史上最高の二十六倍という倍率だった。

それでもスターになれる人はほんの一握り。私もご多分にもれず、スターにもならず退団し結婚してしまった。

結婚後は、キャリアを生かして子供のダンス教室をやっていた。今は子供が少なく、どの教室でも生徒のとりあいである。にもかかわらず、クラシックからジャズダンスまでマルチにできるところが受けたのか、七十人も生徒がいて、かなり順調にやっていったのだった。

ところが、妊娠を機に休職したところ、代稽古の先生に乗っ取られるかたちになり、復職ができなかった。クラシックがかなり専門的にできること、おまけに若くて未婚で子供がいらないというのがその理由だった。

た。

まさかのことに私は狼狽し、みっともないほどオタオタした。十八歳からプロとして仕事をして、職に就いてない時期が一度もないのである。ブラックホールに吸い込まれたようだった。子供が大っ嫌いだった私だが、我が子だけはやはり可愛い。だけど、この子を得たために仕事を失ったのかと思うとやるせなくて、つい子供に当たったりする。

だけど、今は神様がくれたお休みなんだ。一生懸命子供を育てればいいんだ。焦る気持ちを抑え、自分で自分に言い聞かせながら、専業主婦への道に入った。

働く女にありがちなことだが、今まで私は専業主婦というのはばかだと思っていた。何の能力もなく努力もしない、夫に養ってもらっている飼猫だと思っていたのであ

る。

ところが初めて専業主婦の友達を持つようになると、彼女たちがあつと驚く才能の持ち主だと思ふようになったのである。何でもないおばさんが洋裁のプロだったり、元保母だったりとキャリアを抱えている人もいたが、ただの専業主婦というのも、それなりかなりの技術や才能がいるということに初めて気付いた。

私は、歌って踊って芝居ができるが、そんなことは主婦にとって何の必要もない。料理を作るのは大好きだが、片付けや掃除といったことがともかく嫌いなのである。別に汚いところに住みたいと思つてゐるわけではない。私だって清潔な整理整頓された家に住みたい。

夫と二人で暮らしているころは、彼の我慢でなんとか生きていたのだが、子供ができるとそうはいかない。今まで自分が能力のある人間だと思ひ込んでいたのに、地獄へ突き落とされた思ひだった。自己嫌惡に陥つたがどうしてもだめなのだ。今、家人がきたら泥棒が入ったあとだと誰もが思うだろう。ほんとうに恥ずかしいかぎりで

ある。

逃げるわけではないが、冷静にみて私に家事はまったく向いていない。早く仕事をしたくてたまらない。やはり人間には、向き不向きがあるのである。

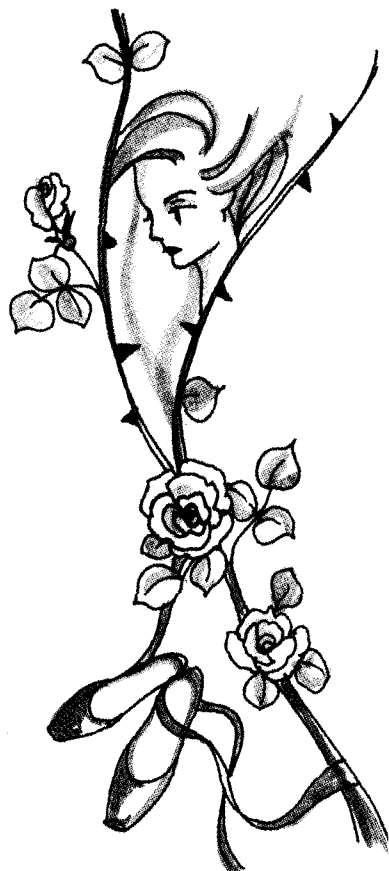
ところが、もう一度ダンスの仕事に戻る気持ちがないのである。不思議なほどである。「あれだけの倍率をくぐつてあれだけ大きい劇団に在籍した。それだけで十分なキャリアではないか。もう一生何にもしなくても、元宝塚だというだけで大手を振つて生きていけばいい。これ以上何がほしいのか？」と方々で言われた。

だけど、私は何事も諦めない。蛇のようにしつこいのである。幼いころから、物書

きになりたいと言ひ続けていたではないか。あの夢が実現していない。そして私は全てのキャリアを捨てて、ライターになるべく一歩を踏み出したのである。

とりあえず、家の近くで某有名誌の元編集長だった方が、文章教室をやっていることを聞いた。決断したら即実行するのが私のモットーである。しかし、娘はまだ一歳の昼間である。近所の友達に保育をお願いできるほど親密な人もいなかった。だけど、どうしても行きたい。友人が何人か集まつた日に、思い切つて話してみた。

「私は今どうしても勉強がしたい。みんなが何かしたいことができたなら、そのときは



私が必ず協力するから助けてください」

背水の陣で切羽詰まって言ったのが効を奏したのか、何人かの友人が交替で週に一回娘の保育をしてくれることになった。

喜び勇んでそこに三カ月通った。しかし、やはり保育のほうは特定の人に負担がかかりすぎ、もうこれ以上は頼めなかった。

しかし、そこで先生に、

「まだまだ使いものにはならない。けれど何かがある。ダイヤに例えれば原石だけど、磨き続けられれば何とかなるかもしれない」と言われたのである。

百分の一でもよい。可能性があるなら諦めることはできない。赤ん坊を抱えて勉強を続けられないかと思索していたところ、ある通信教育が新聞に出ていた。「これだ！」

ここで一年近く勉強をした。ふだんは自信家の私だけれど、文章に関しては素人である。原稿が返送されてくるたび、こわごわ封筒をあける。ところが、これがえらく評判がいいのである。採点者は毎回変わるわけだが、どの人もびっくりするほど褒めてくれるのである。

もちろん、あちらも商売だから悪いことは書かないのだろうが、それにしてもである。私はますます天狗になった。いつか鼻が折られるだろう。いつ地獄に突き落とされるのだろうと思いつながらも、ちょっぴり自信を持った。

そんなころ、女性ライターの登竜門だという「わいふ」という雑誌に原稿を送った。今度はそううまくいくわけがない。掲載される場合は、書き直しなどの連絡がくるらしいと聞いていた。ところが、何の連絡もなしに突然雑誌が送られてきた。

「やっぱり駄目だったか。世間はそう甘くないよなあ」と思ったのだが、やけに封筒が厚い。開くと中に三冊の「わいふ」誌が入っていた。きつねにつままれたような気分でページをめくると、なんと巻頭特集に、私の名前があるではないか。

「えー、きゃー、載っちゃった。載ってる」私は小躍りした。そして、ある日図書館に行くと「わいふ」があるではないか。自分の書いた文章が図書館にあるなんて、うれしくてうれしくて私は大躍りした。その後「いつか落ちるいつか落ちる」と自分に

言い聞かせているのだが、毎号連続で載せて頂いている。

何回か掲載が続いたある日、編集長直々にお電話を頂いた。「わいふ」に載せる書評を書いてほしいと言われた。ここまでくると、私も喜んでばかりもいられない。初めて怖さがきた。送られた本を繰り返し繰り返し返し読んで、何とか書評らしきものが書けた。FAXでそれを送るとき、「これが最初で最後になるかもしれない」ほんとうにそう思った。ところがこれもOKになり採用された。

有頂天になって次号の文章も送った。ところが正月も明けて六日、今度は副編集長からお電話を頂いた。「あー、だめだったんだ。今度は没にしましたってわざわざ掛けてくださったんだ」と電話口に出ると、思っても掛けない吉報だった。

「今度F誌である本を作るんだけど、それに書いてほしい」というのである。それもコラムとかではなく、かなりのページを割いたルポだという。夢かと思った。陳腐な表現だが、そうとしか形容ができない。誰もが知っている大出版社である。

翌日「わいふ」社へ行った。打ち合わせである。取材の仕方知らない私が方法を教わっていると、

「私はフリーのライターですが、F誌でこれこれの本を出しますので……」と言えがいい、と副編集長が何気なく言った。

その瞬間私は「フリーのライター」になった。子供のころから見続けてきた夢である。「WILL POWER」だ。意志の力である。絶対なれると思いつけていれば、必ず誰かが見ているのである。怖いくらいラッキーにいろんなことがあった。

だけど、夫が気違いざたと言ったとき、「でもどうしてもなりたいの」

と言った私の勝ちである。あのとき諦めていたら、元宝塚という過去の栄光だけにおぼれて生きていたに違いない。

三十過ぎたから、女だから、子持ちだからいろいろな夢諦めなくてもよいのである。これからもいろんなことがあるに違いない。地獄を見る日もあるに決まっている。だけど、子持ちだったり、女だったりする言い訳は絶対に使えない、と今の私はそう思っている。

## 保育所に入れない

滋賀県大津市・定永淳子

市役所から保育所に入所できない旨の通知が来た。昨年の十月に申し込み、四カ月もの間待たされたあげく来たのは一枚の紙切れだった。理由は定員を超過したので「優先順位の高い人が先であるため」のところに丸印がつけてあった。

優先順位が高い人というのは、母子家庭であったり正社員で労働時間の長い人のことである。私はパートで九時から四時まで働くつもりであったが、保育所に子供が入れなければ、一時間だって仕事に行くことはできない。

最初の子を妊娠した時、私は仕事をそのまま続けるつもりであった。妊娠も後期になり市役所に電話をすると、保育所は満員で入れないという。出産予定日は十月。四月の新年度入所ならまだ入れる可能性が高いというが、その間、半年どうすればいいのだ。育児休暇制なんてものはそのころな

かった。実家は頼れない。無認可の存在をおぼろげながら知ってはいたが、どういったところかさっぱり分からず、そんなところへ子供を入れるのは不安だった。結局、私は仕事を辞めた。

それから四年たち、二人の年子の女の子たちは四歳と二歳半になっていた。今度は新年度の申し込みなんだし、下の子も四月には三歳以上になっていて入りやすいはずと思い申し込んだのに、入所はできなかった。



年明けから就職活動を必死に行ない、こちらの条件をすべてのんでくれる会社も運よくみつかり、ホッとしたのもつかの間。私には仕事をする権利なんてないらしい。

情けない。ほんとうに情けない。女が子供を産んで情けない思いをする社会ってなんですか。どうして私たちは仕事をしたいというこの基本的なことさえがまんしなくてはならぬんですか。

## チーパバ奮戦記

東京都江東区・石川真澄

わが家から、お父さんがいなくなつては、や、十カ月になる。単身赴任なのだ。周囲には珍しいものなのか、特別視されたり反応は様々である。八歳、六歳、四歳の、受験期ではない幼児を抱えての家庭だからなおさらだろう。

「お父さんと一緒に〇〇に行く人」「行きたい人」みな、無言。

こんな場面が何度も繰り返された後、一緒に行く者ゼロとの結論が出た。私自身、これこそチャンスとばかりに末っ子を保育園へ入れ、父親不在の大出血覚悟で仕事に始めた。

このとき、男児三人を前にして宣言。

「今まで以上にお手伝いをしてお利口しないと、学校・幼稚園・保育園すぐやめさせて、〇〇へ行かすからね！」

これは、お父さんが出発するときの、母と子の約束であった。

今まで何度も約束を破られそうになると、その都度、叱り声の連続であった。

ここに来て、果然、長男の登場と相成った。「お兄、ちょっと手伝って……」

日に何度も登場する彼は、私のよき片腕である。

朝食の手伝い、布団あげ……。帰宅後は夕食後の皿洗い、風呂洗い、弟たちのお風呂入れ……。みんなでの洗濯物たたみ、布団敷きの手伝い……。家事はうまい。とても小学三年生には思えない。私の病気の時など、料理も作ってくれる。そのうえ、宿題もしっかりやって、勉強も頑張っている。ほんとう、私が産んだ子にしては最上の出来。両親以上の努力家である。

そんなあるとき、二男を連れて仕事から帰ってみると、玄関のかぎが開いていた。今まで一度もなかったのに……。私の胸には、長男が帰ってからの叱り方、問いつめ

方などが浮かんでは消えた。机の上には「五時まで△△に行く」のメモ一枚。時期は師走の物騒なある午後三時すぎ。

予定時間ごろ帰ってきた子に静かに問いつめる。「カギしていった？　して出かかなかった？」（沈黙）「誰か友達来たの？」

部屋の窓が開いて、カーテンもしてなかったわよ」「A君が来て、一緒に出かけた」

「今の時期カギしていないと泥棒に入られるわよ。こういう失敗するなら、友達と遊ぶのもダメ。友達、家へ呼ぶのも許さない」両ほおをピシャリとされた彼は、直後、お使いを命じられて飛び出していく。涙を流して泣いても、言われた用件を完全に実





行する彼はすごい。ものすごいしんの強さ、負けず嫌いである。私や夫の双方からの遺伝なのだが。

毎日ホッとするのは夜九時台。みなに「ママ、愛しているよ」と言わせ（内心、今日一日の母親のふまじめさをわびながら）、チュッとしたり、「おぼっちゃまくん」顔負けのペロペロで一日終了となる。

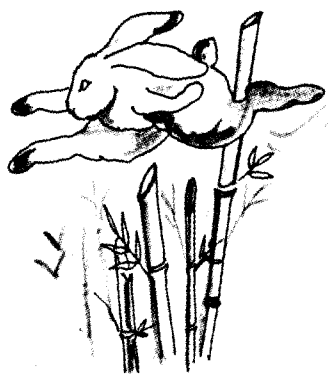
これから先も、よろしくね。いろいろにお手伝いしてくれて、ありがとうね。

## 働きたい、でも……

埼玉県・匿名（32歳）

私には、小学校三年生の息子と、幼稚園年中組の娘がいる。夫は三十五歳、会社員。私は、仕事を始めたい、と思っている。

先日、紹介して頂いた仕事がある。月前半の八日間、朝八時半に家を出て、帰宅は午後四時半。報酬は、往復三時間かかる通勤時間を考えると、まあ割には合わない。でもこのチャンス逃したくない、と思った。



夫は大反対。まだ子供が小さすぎる。早すぎるというのだ。何日か説得を試みたが、結局話し合いは決裂、私のほうが折れて、お断りすることになってしまった。

夫は基本的に、男は働いて家族を養う、女は家庭を守るのが役目だ、と思っている人だから、私が働きたい、というのにはわがままにしか感じられないのだろう、と思う。私はそんなにわがままだろうか。面接の段取りまでつけて頂いてから断わる、という非常識なことをしてしまった私は、悔しさで体が震えるほどだった。

経済的な必要があったり、夫の理解があったりしないと、女は働けないのだろうか。あの話以来、夫は私の行動が気になるらしく、細かいことにいちいち干渉してくる。

「早く寝ないと寝過ぐすぞ」とか「もう一枚着ないと風邪をひく」とか……、思わず、「私はあなたの子供じゃないわよ」と言いたくなる。

夫は帰宅も早いし、子ぼんのうだし、私に対しても右記のように優しく（／＼）、いい夫だとは思う。でも、私の人生をそこまで規制する権利が、夫にあるのだろうか。

このままでは、どうせ私は一生ちゃんとした仕事にはつけない、もう先は見えている、失意の人生だ、とヤケになリかかった。

でも、仕事を紹介してくださったNさんの叱咤（しった）激励で、とりあえずできる範囲でのアルバイトをしながら、勉強を続けていくことにした。——この先どうなるのだろう。Nさんは、女も経済力をつけていけば、必ず男の人も変わってくるから、と言ってくださったのだが……。

ぜひみなさんのご意見をおききたいと思う。女が外へ出るのは、今ややさしそうに見えて、私にとって壁は厚かった……。若葉がきらめき、心はずむ春、だが、私は一人ため息をついている。

（え・小島佳子）

# 乳房再建

小林 雪子

六年前のことだ。青草を蒸すような強い日差しが、小高い丘の向こうに沈む夕ぐれ時、古びた二階建ての部屋窓から、秋を思わせる風がさやさやと、汗ばんだ白い肌を通り過ぎていく。親子はとも年の離れた恋人がいる私は、そのとき、二人の愛の曲（シルクロード）に包まれ、スポーツで鍛えられた若くたくましい腕の中でまどろんでいた。

突然彼は、思いもよらない言葉をつぶやいた。

「ママ、左側にないものが、右側にあるよ」

「エッ？ ボク、今なんて言ったの!？」  
「しこり？」

半年後、言葉に表すことができない苦しみや悲しみの山積する中で、恋人にこよなく愛された形のよい乳房を私は一つ失った。

二つ並んでこそ美しいその乳房。癌とはいえ一つにされてしまった私の胸は、余りに切なくしぼんでしまった。

## 乳癌は乗り越えたが、

私には、大恋愛の末結婚した夫と二人の子供がいる。今では形ばかりの夫婦であるが、昔は少しのきずなもあった。夫は手術を拒む私に、「おれもタバコを止めるから生きてくれ」と言った。ドクターストップが出ている人なので、よい機

会？ だった。私は手術を受けたが、夫は五年後の今もタバコを手放せず、私を失望させている。放射線治療を受けた私の肺は、煙を吸うと息苦しい。一緒にくつろぐ時間が自然に少なくなり、気持ちもますますはなれていく。

手術のための入院中も、仕事のことで頭が一杯の夫は、付き添いを私の姉に任せ、苦しい最中の妻を見ていないため感じ方が軽いのだ。私は乳房を失って十五日目、一年前から引き受けてある社員の仲人をするためにむりをして仮退院、一人京都の病院から帰宅した。

私はその晩、布団にもぐって大声で泣いた。二人の息子は、夫婦のあり方を、

どんな思いで見えていたのであるう、そのときの私は、妻でも母でもなかった。無性に悲しく切なかった。夫はビールを飲みながら「泣かれてもどうしてもやれないよ」と言った。だまって強い力で抱いてくれさえしたらいい。夫にすまなかったと反省しかわいい妻にもどっていたのに（私はあなたのお母さんじゃないわ、妻なのよ、以前のように優しくして）

心の中では心配しているのに、素直に表現できない夫にいらだちまた涙があふれる。社会にあっては自信家の夫、家では横の物を縦にもしない代わりに文句も言わない。「女は黙っておれについてこい」と私の言葉をさえぎり豪語する。その日を境に私は、夫の前では涙を見せない女になった。

南国育ちの若い彼は、私の心と体の苦痛を熱い思いやりで見守り、胸の痛みを温かい心で吸い取ってくれた。

癌患者となって四年は瞬く間に過ぎた。今では再発の兆しもない。ただ、放射線治療を受けた胸が痛む。今年の夏は神経が回復した分ブラジャーの布が当たり日

常の生活がづらい。家の中ではスリッパ一枚にTシャツを着る。突然人が来たら大変だ。そのへんにある布を丸めて胸に押し込み玄関に立つ。絞めつける下着は苦しい。幾つになっても優雅な女でありたいと願う私は、鏡の中の自分に目を背けてしまう。



くじけたときは、ピアノに向かう。それでも立ち直れないときには、彼に思いっきり甘えた。ひざの中で子供のように戯れることが、生きる支えとなった。しかし、どうにもならないことがある。両手

で乳房に触る彼の優しさに、詰物のおっぱいは、こたえることができなかった。女性でありたい私は悩み続けるうち、今の医学では乳房を再建することができるということを知った。どうしてもしたいと思った。

この人も、近い将来かわいい女性に巡り会い、私から離れていく人だから、体力があるうちに愛に見守られて、つらい再建に挑戦し、乳癌であったことを一時的でも忘れたかった。

何度も彼に自分の気持ちを告げた。彼は、その都度反対する。「ネエマリン、子供にかえったと思えばいいでしょ、ぼくの心の中にはほらちゃんと二つあるんだよ」と唇を傷口へ当てる。癌患者であることを熱い心で忘れさせてくれようとする。そんな優しさがあればあるほどに悲しさが増す私。「なぜ泣くの、人間は外見じゃないでしょ、ぼくが好きなのは、ママの心だよ、ありのままの姿が好きなんだよ」と涙をふいてくれる。とはいえ私は老いる身で、この人に甘えてすごせる時間は長くない。

## 乳房再建へのアプローチ

私は悩んだ末、川崎の友人に会いに出席けた。二年前に再建を終わっている人だ。「温かいよ」と触らせてくれた。形も傷もきれい。「あなたも早く作ってもらえば」。

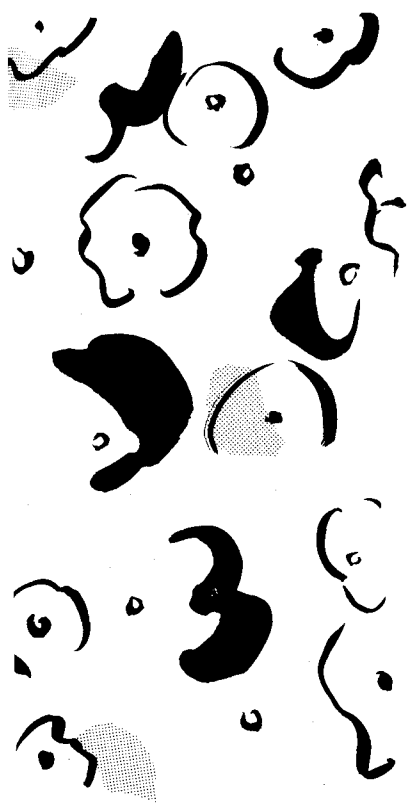
思い切って川崎にある大学病院のS先生に会った。おどろいたことに、検査に一週間必要とし、一カ月の入院で本体を作り、六カ月後、乳頭を作る。美容の部だから厚生省から認められず、一週間入院で七十万から人によっては、百万円必要だ、とこともなげに言われた。友人は全額保険が使えたという。乳頭作りで十五万円だったとか。手術に関していろいろ質問する私に「そんなこと医者にまかせておけばよい」と冷たい態度。しかも受付の女性が、「後でいろいろあるから止めときなさい」と言うのである。安心して任せる気になれず、入院には至らなかった。

再建へ生きる希望をつないだ私は、主治医に相談した。実家の信頼する諏訪日

赤病院の乳癌、甲状腺専門の医院長先生である（出身は信州大学医学部）。姉も心配し一緒に来てくれたが、「今更その年で何言ってるの、お嫁さんに行くでもないのに」とその場で反対する。手術により、傷つき弱る私を心配してのことだ。「あなたの問題じゃないよ、年でかたづくことではなく本人でしか分からないことだからなあ」と先生。姉はさらに「よく考えて」とやめさせたがった。私だつてメスを入れずにできることを望んでいる。しかし美容整形では、シリコンを入れるだけのこと、それは避けたかった。

「ちょうど今、信頼できるM先生がアメリカから帰っている。松本まで行ってごらん」と紹介状を書き、予約してくださった。エコーの検査を受けながらM先生のことを伺ってみた。「M先生の手術は大変きれいだし中堅では一番じゃないかな」と言われる。

「M先生にお会いして決めよう」私は、松本へ出向いた。電車の窓から諏訪湖が見える、私の実家のあるところ。「お母様、今日は寄らずにごめんなさい」八十七歳の母には、乳癌で親不孝している。この上心配かけることは許されない。（再建を内緒で私を許してね）



松本に來たのは二十五年ぶりだった。想像以上に豊かに發展し、新宿まで高速バスも出ている。夫の会社の営業所もある所だ。再建を打ち明けた私にあまりよい顔をしなかった夫も、今では「好きにしろ」と言っただけで陰では心配し、松本の社員にM先生について問い合わせている。「M先生は助教授、腕のよい立派な先生で、信大の形成外科は信頼できるそうだよ……」もともとこうだったのは、手術後のことであるが。

信州大学病院形成外科、廊下で待つ間にも彼とのことを思い悩む。大学時代、母親を亡くした彼は、私の健康を気遣い一週間ごとにワクチン注射を打ってくれた。愛の針は、痛いどころか幸せだった。彼のいない生活は考えられない……。間もなく診察室に呼ばれた。優しいような男の声、「はい」ドアを開けた。先生と看護婦さんぐらゐと予想したのに、白衣に身を包んだ若い先生三人、女医先生、優しいようなM先生がすでに腰掛け私を見ている。中堅と伺ったから四十三、四と想像してきたが、ハンサムで、三十八、九



歳かしら。「お願いします」とあいさつをし、今日までの病状を話した。M先生は、「拝見しようか」確かそう言われた。「今、ここで？」と口をついて出てしまっ

た。胸を開いて見られることくらい分かっ  
ていても、明るい部屋、しかも若い人の  
居並ぶ前で、この体を晒すのはつらい。  
五十を過ぎたおばさんだって恥ずかしい  
ではありませんか。気がつけば、若い先  
生方は席を外してくださった。

さすが信大の助教授M先生、人の心を  
分かってくださると私は安心した。川崎  
とは大違いだった。

女医先生が、私のうしろから黒い布を  
張った。上半身裸の私は注文通りにポー

ズを作る。慣れた手つきでカメラを握る  
M先生、泣きたいほどに恥ずかしい。M  
先生は私の胸を二百と言った。「おなか  
から二百は無理かなあ」とも。

日赤の先生に背中から移植してくださ  
ると聞き、希望を持って松本まできたの  
だが、M先生は「おなかのたるみがない  
上に、背中にもっとつまめない。シリコ  
ンを入れる方法はあまりおすすめられない。  
あなたの場合、おなかのほうが大きい物  
ができます、ぼくの開発した機械で安全  
で自然な形に作ってあげるから心配ない  
ですよ」と説明してくださる。

川崎の医師は、おなかを縦に切り開き  
腹筋を一本切らずに曲げて胸にもって

ということだった。この方法では術後筋肉が「こむら返り」を起こすことがあるとき、胸の下に曲げたところが小さい山にもなる。M先生の手術は、それらはまったくないという。おなかの傷は横に切る。やがてしわとなり目立たないとか。先生の医師も人柄も信頼できると思う。後は私の決意の問題となった。

決心はつかないまま、おなかに脂肪をつける悲しい努力を始めた。乳癌患者は太ってはいけないのに、太りなさいという。

彼はふいにおなかに触り意地悪なスキンシップ。そんなしぐさが私は好きだった。「無理しちゃだめだよ」と昼休みには、電話の向こうで心配している。反対を押して再建手術をし、働けない体になったらこの人に合わす顔がない。

## 「女」として生きたい

考えた末私は、不安材料を列記しM先生に送った。恥ずかしく、失礼な内容であった。

一、本物と同じように揺れ動きますか。



答

シリコンは、被膜ができ動かないが、おなかの肉は、縄跳びをすると揺れますね。

一、

愛を感じることが出来ますか。

答

そのうち、神経が伸びてくるから大丈夫。

一、

皮膚が放射線で弱っている。

答

大丈夫。

一、腹直筋を取り腰への影響は？

答(図をかき説明のうえ)人にもよる。

一、移植後、「壊死」になるのでは？

答 開発した機械で心配ない。

一、輸血はしないでほしい。

答 準備は一応するが、今までのケースは少ない。

一、入院日数、その他。

一、入院日数、その他。

答 術前一日検査、入院は手術の一日前

より後二週間。

二回ともころよく回答してくださった。おごることなく、患者の身になり、こちらの希望に近づいてくださる。医師への情熱と、思いやりのある先生に私は出会えた。百点満点の出来でなくても、受け入れることができると思った。

なによりも、M先生ご自身が、乳癌の苦しみを肌で感じておられたのだ。病んだ奥様に厳しい医学の目で見つつ、果てることのない愛を持って「再建」を施しておられることを知った。それで全てをゆだねる決意をしたのである。

思えば八月であった。体力的にこの機会を逃したら後がない、思いは高まり松本へ電話を入れた。「M先生、どうか手術をお願いします」。しかし、息子の結婚が迫っていた。今親として置かれていく状況を説明する。先生は理解してくださり、「結婚式が終わってからにしましょう。その前に一度検査に来て、十一月十二日入院、手術は十三日」と約束してくださった。

入院は信大ではなく近くの市立病院で行なうという。後日聞いたのだが、甲府市立病院でも、多くの人を助けている先生であった。術前の検査は通院一日ですむ、川崎とは大ちがいだ。忙しい私は、入院日数が少ないことがうれしかった。

またしても手術と結婚式が重なった。長男を手放す日。不安と希望の入り乱れる、ちょっぴり寂しい母心。再建入院は自分の胸の中に納め、結婚式の準備に全精力を注ぐ。その間、入院に必要な品々をまとめる。まるで家出の荷物を作っているようだった。

十一月、待ちに待った子供の晴れ姿に、二十六年間の思いが高まり涙があふれた。十一月十日、家族がそろったところから初めて入院を打ち明ける。夫には、前日許しをもらっていた。子供たちは、大人になった今、母親である前に女である母親を、あきれながらも理解してくれた。

結婚式から一週間後「今回は、内臓の手術じゃないからおれは立ち会わないよ」という夫を送り出し、朝七時、二つの荷物を自転車に乗せ駅に向かった。

市立病院へ十一時に入る。三人部屋の真ん中のベッドが私に与えられた。「とうとう来てしまった」看護婦さんにカウセリングを受ける。回りの患者に、「ばかなことを……」と言われた。そうかも知れない。私だって不安である。しかし再建をした人々はみな喜んでいたのである……。思い通りの出来上がりでなくても泣き言は言うまい。本物ではないが、自分の血と肉で作られる本物に近い、温かみと弾力のある乳房、時がたてば、神経も伸びて愛も感じる、おしゃれも気楽にできる。

彼との九年間を思い出し、涙が枕をぬらす。その夜は、期待と不安で眠れなかった。

十三日、九時、外来に呼ばれた。M先生の前に立つ。またしても、付き添ってくれる姉も一緒だった。M先生は笑顔で話しながら、おなかにマジックで手術のための下書きの線を書く。工作でもするように板状のスポンジを切り抜き私の胸に当てて説明してくださる。姉は「ゆきちゃん、子供がお嫁さんもらったんだか

らいつまでも娘のような気持ちでいないで、お姑さんおばあさんになんなくっちゃだめ」とまだ反対していた。私だって手術はこわい。部屋に戻っても、じっとしていられないくらいだった。

## いざ、手術

十二時三十分、ストレッチャーのお迎えが来た。もう逃げ出せない。覚悟を決め、看護婦さんに従う。こうこうと明るい手術室。M先生とH先生がおられた。妙なことを思い出す。この前のように術前の処置ていし（剃毛かみと洗腸せんちやう）も済んでいない、いいのかしら。そんな私の気持ちを調べて知らずか、M先生は「大丈夫だよ」と右手を握ってくださった。麻酔科の若い先生が背中注射針をブス!! 不快な痛み、突然、左側の足からおなかにかけて電流がビリ／＼と走る。「アアイタイ／＼」一瞬強いショックを受けた。針先を神経に触れさせたんだ。体は、動かせない。あつという間の出来事、のどの痛みを感じゲューとなる。何か三本抜かれる苦痛。メラメラとアルバムを一枚、また一

枚とめくるような感じ、一枚ごとに光が、声が、人が、部屋が見える。髪の毛が逆立つように怖い。乳癌のときは、麻酔から覚めるのが遅く静かに覚めている。麻酔が違うのか？ M先生が手を握ってくださった。安心したのか眠ったようだ。目が覚めたとき、見慣れない別室に移され姉もいる。温かい毛布の中だった。「先生、輸血は？」と私。「しなかったよ」と先生、約束通りだった。「七時間も帰ってこないから心配で部屋と手術室

を何度往復したか分からなかった」と姉。これほどまでに心配させ、お乳にこだわる私にやさしい姉は付き添ってくれるのだ。「私おばかさんよね」と姉に謝った。

広い範囲の大きい手術、お疲れであろうにM先生はじっと私を見守ってくださいている。H先生も真剣なまなざし。「もう大丈夫ですよ」の言葉を残し、お二人は部屋を出て行かれた。後姿は自信に満ちあふれてみえた。

つらく長い夜が始まった。おなかも胸も痛い／＼ 予想以上につらい／＼ 毛布の中でそっと触ってみる。左の指は新しいおっぱいとおなかにさわっているのに、触られても感じがらない、いや痛むんだから感じはあるのか？ 皮膚の下は空洞かはたまた血の海なのか。

作られた胸は、左の手より余って腋わきのほうまで大きい。本物は平らに近いのに、新顔のオっぱイは、でんと盛り上がって大きい。縫い目は痛い。でも乳房に違いない。作ってもらってうれいはずなのに、なぜか涙がとめどなく流れた。ゆる





みの少ないおなかを幅二十センチ、横三十センチほど切りぬいて胸に移植したのである。

二日目、おも湯、おかゆが出た。姉がスプーンで口に入れてくれるが思うように食べられない、涙ばかりがこぼれる。四日前に会ってきたというのに、彼がむしろに恋しい。今はベッドに釘づけの身で、電話までも行かれない。

四日目、H先生の回診。「体が動かせるようになったから着替えましょう」やっとのことで汗と血で汚れた着物にさよならだ。一日、ポータブルトイレのお世話になり、これまた切ない。日曜日、ようやく夫が来た。トイレに行くには股のところが開くガードルが必要だといわれたが、私の用意したのは普通のものばかり。「デパートで二、三枚買ってきて」。最初嫌だった夫も動けない妻を見て、タクシーをとばし買ってきたのが、ウェストより十センチも高くて長い高級品。使えない、きつすぎる。気のきくことに、糸と大きいスナップを買ってきた。もちろん針もだ。よかった。有り難かった。



夫は、その夜ホテルに泊まる。早速縫開始、ベッドに寝たまま新しいガードルを切って縫った。手を上げての作業は疲れたが二日ばかりで三枚作り、苦痛をしばし忘れた。我ながらやるではないか、さあ明日からトイレに行ける、電話もかけられる。

水曜日、M先生の回診である。「触っちゃだめだよ」「触っちゃいないわよ」とうそをつく。出血でガーゼが赤い。すぐ見破られる。「少しだけです」と私。

だってどんな形か知りたい、痛いから手もいく。先生は、夫と話しながら「さあこれから動き回るからテープをはるよ」幅四センチのテープを、何枚もピンピンにはっていく、はがすとき、痛からうにおかまいなしだ。

大変なことに気付いた。彼の好きな長い髪が抜けるのだ、思わずオンオン泣いてしまう。翌日、M先生が「毛が抜けたんだって、ストレスだよ。むしろ血行がよくなる薬を使っているから髪にはいいはずだが」とおっしゃる。

麻酔から覚めたときのストレスなのか、もう考えまい、でもよく抜け落ちる。さしてトイレに行く。なんと幸せなこと。おなかのびず三十度曲げてそろそろ歩く。便座から立ち上がるとおなか全体がメリメリ肉はなれするようだ。

姉も付き添いから開放され家に帰る。配膳もできる、ぼつぼつ洗い物ができた。エレベーターで屋上に干しに行く、強い風だ。松本平、美ヶ原が一望できる。雪が降り美しい山々「元氣になってよかったね」とささやいてくれているよう。冷

たい空気を胸に一杯吸い込んだ。その夜、求めてはいけないうちに、電話をかけてしまった。真夜中に。「助けて、私の体じゃないの触っても感じないわ、動くと氷がわれるようにメリメリ肉はなれをして痛い」。「ママ頑張るんだよ、日曜日に行くから」声を聞いたところでどうにもならないこの体、今はただ、先生の「大丈夫」という言葉を信じるしかなかった。入院して二週間がたった。今日はM先生が外来に来られる日である。

朝九時、私は外来に呼ばれた。M先生は、傷の具合を見ながら「今日、退院していいです」「え？」突然言われて言葉が出ない。傷口は赤く痛いし抜糸はまだのうえ、腰は曲がったままなのだ。「先生、こんな状態で見捨てないで」なにしろ突っ張って痛いのだ。「じゃあ二日ほど……」先生は笑っている。早く帰してやろうという先生のお気持ちなのに、私は心配で先生のそばにいたかった。しかし退院という言葉は、子供や仕事に気になっていた私を元気づけた。同室の婦人も「私も帰りたい、野沢菜を漬けなくちゃ」

と言う。ベッドの上で病める自分より家族を思いつつ無理をする主婦が、ここにもいた。

## 新しい乳房とともに

二日後に退院、帰りに実家へ立ち寄ったが、今度のことは内緒だけに前かがみの姿勢を気づかれぬよう、コタツに座ったままで動けず困った。一泊した朝、母たちに見送られ高速バスで帰る。

誰もいない我が家、おふろを沸かした。何をおいてもお風呂に入りたい。十八日間も入浴していない私は、気が狂いそうだった。

一枚一枚服を脱ぐ。初めて全身を等身大の鏡にうつす……。乳頭がない乳房？形のまわりはところどころ糸が残っている。おなかには横に太いテープがはつてある。傷がさばけないようにメリメリ静かにはがす、さばけることはないと思っても傷が痛くて恐ろしい。術後二週間しかたっていないので、怖くて湯舟に沈めることができず、シャワーを静かに当てる。おなかには神経がないというのに痛くて洗

えない。自分で触って、手が触っていると頭で思うから分るのであって、他人に触られたり、物が当たっても今は分らない。だが痛みはあるから変な感じである。こんな感覚は想像もできなかった。

真っ白いタオルで体をおさえるようにそっとふく。今日から傷の手当てを自分でしなくてはいけない、イソジンゲルを塗る。傷薬をつけソフラを当て、滅菌ガーゼを当て、テープではる。胸とおなかの仕上がるころには、体は冷え切ってしまった。夜布団に入ってもまだ横向きではねむれない。

二日後、私は外出した。駅の階段は苦しい。都会は人が多くもたもた歩くと迷惑になる。おなかと胸を守らねばならない。彼に、SOSと電話をかける。パッサリ切った髪、やつれた老人の私を、黒い車の主が心配顔で待っていてくれた。

あれほど反対をした彼だから泣きことは言うまいと思って来たのに、会ったとたん「大丈夫？」の一言で私は泣き出ししまった。「ねえ落ち着いて聞きなさい。つらいのは最初から分かっていたでしょ、



自分で望んで行ったんでしょ、今はまだ日が浅いんだものつらくて当たり前だよ。頑張るんだ、ねママ」「こんな感じになるなんて、経験ないもん分かんなかったのよ」と私は反発して取り乱した。彼は言葉を続ける。「もともとスマートなおなかを、ない胸に持ってきたんだから。でもね、今までなかったものができたんだよ。そのことをよかったって考えたら？今はまだ作りたてだからもっと時間がたてば案になるよ、さあ元氣出すの！」

落ち込んでいる私を励ます彼はやさしかった。

退院して一週間目、病院へ出掛けた。M先生は、相変わらずお優しいお顔、開口一番「髪を切ったの」とおっしゃった。「乳房の形、こはもう少したつとしぼんで垂れてくるよ。こは、希望通りにしたでしょ」「はい先生グーよ」とサインを出す私。「お臍の傷をオッバイの下のだうツにしたのね先生」先生はウインクして「その通り」と満足げなお顔。糸を切りながらの会話は楽しかった。

当面一週間に一度通院ときまる。廊下

で再建を済ませた二人の女性に出会った。かわいそうに二つの胸を失ったという。左右の背中の皮膚をふくらまし、二カ月がかりで再建したという。私より三倍はしんどかったろうにサマーセーターが着られると表情は明るい。

これで再建は終わったわけではなく、半年後にアクセサリー（乳頭）を作っていただく。それについても、注文を出す私に先生お二人は、「大丈夫、大丈夫、ぼくが一番よく知っているんだよ」とおっしゃってくださいる。

私は高度な医術と温かいお人柄の先生に出会えてよかった。術後四カ月の今、階段を一気に五十段も駆け上がれる。美容体操もできる。普通の生活ができるようになった。悲しく切ない女心を、人は、愚かと言い切れるだろうか！

傷跡は今いちだけれどスリッパ一枚でセーターを着て、人前に出られるのがうれしい。まだ神経は本物ではないが、人間の体になれたのである。

(え・カステラネンコ)

# ●サブビジュアル●

## 裸のイラストに 違和感

埼玉県春日部市

門馬ひろ子

二三四号「ワンポイント情報」の、「子供は障害物？」と「私が弱かったから」のイラストには、違和感をもった。どちらも、若い女性の裸で、文章の内容とかけ離れている。というより、まったく無関係。前者は、幼い子供と母親の話だし、後者は、中学生の息子をもった母親の体験談。女性の裸の話は、どこにも出てこない。

わいふ編集部に問い合わせると、「それは、文章を読んでもらって、イラストレーター（女性）にかいてもらっている。イラストレーターから返事をさせます」という。

私は、文章とイラストには密接な関係があって、イラストは筆者のメッセージを的確に伝える重要なもので、単に飾りものとは思いたくない。このヌードのイラストだ

け見ていると、まるで、性にまつわる悩み事（それも若い女性の）の告白かと思われる。

ほかの四人の女性のイラストも、いずれも若い女の子の子と思われる顔で、泣いているのと、笑っているのがある。ヌードのイラストほどではないが、意味がわからない。最後の「愚かな母親」のイラストは、四歳の女の子が明るくなった話だから、女の子の笑顔はマッチしているかもしれない。

イラストレーター自身にも、筆者に共感したのか、しなかったのかのメッセージがあつてよいはず。でも、今回全体を通じての投稿者たちは、みな子育てと格闘しながらも、たくましく生きている女性像、母親像との印象が強い。母だって泣くこともある。でもことさら涙が強調されているように、私には違和感があった。女性——裸、涙の構図は、できればやめてほしい。

私は、女性のヌードを安易に使ってほしくないのだ。とりわけ、この「本音で語り

合う」わいふ誌上では。

編集部の方に私の主旨を伝えると、「投稿してください」と言われたので、投稿することにした。

## やっぱり「愛」かなあ

大阪府枚方市

荻野菜穂子（29歳）

タイトルを見て、「何をまた歯が浮くようなことを言い出すやら」なんて、笑わないうでください。書いている本人だって、照れくさくて仕方ないのですから。でも、「わいふ」二三五号を読んで、こう思わずにはいられなかったのです。

ひとつ例をあげて、はじめに話をすすめます。どうか、最後までお付き合いください。

二三四号の「子育てはつらい」に共感を覚えた方が何人かいました。私もそうだし、おそらくたくさんの方が、



うなずきながら読んだのではないかと思  
います。

けれど、もう一歩踏み込んでみると、自  
らの体験から出された説得力ある結論の裏  
に、もうひとつ、見えてくるものがあるの  
です。

こんな叫び声が、聞こえてくるのです。  
「たとえ子供を愛せなかったとしても、あ  
なたの子供は、そんなあなたを無条件に愛  
している」と。

親というおとなは、ある程度条件が整わ  
なければ、子供を愛せなくなってしまうの  
でしょう。「女の子が欲しかったのに、男  
の子だった」「活発な子が好きなのに、こ  
の子はおとなしすぎる」等々、個人の願望  
や好みはあるのが当然で、打ち消そうとし

たって、無理な話です。

では子供、特に乳幼児はどうでしょうか。  
彼らにとって、環境は何一つ選ぶことはで  
きないのに、「ああ相性が悪い」「こんなお  
母さんいやだ。あっちのお母さんのほうが  
いいや」なんていうそぶりや態度はみせな  
いと思います。むしろ親がつき離せばつき  
離すほど、まとわりついてきて、しがみつ  
きます。これを愛ととらえるのは安易でしょ  
うか。

子供は親を無条件で愛してくれる——こ  
の一見当たり前の真実に出会うまで、私に  
はかなりの時間がかかりました。娘の後追  
いが激しかったころ、「どうしてもお母さ  
んと一緒にいたいよ」と言ってくださる  
方がありました。まるで私を怒らせたいたか  
のように、わざわざ目の前でいたずらをす  
るようになると、「そうまでして気を引き  
たいのよ。怒られてでもいいからお母さん  
にかまってほしいのよ」と言われました。  
「そうか」と納得しながらも、なにかしつ  
くりこないでおりましたが、ある日、核心  
をズンと突かれるかのように、気付かされ  
たのです。「これはこの子からの、痛いほ

どの愛情表現だ」と。

「愛情を持って接しなさい」「人を思いや  
る気持ちが大切です」とは、おとなになっ  
てから、いろいろな人から何度も言われまし  
た。しかし、「愛されていることを自覚し  
なさい」とは一度も言われたことがありま  
せん。でも愛されていることを感じとらず  
して、ひたすら「愛せ、愛せ」と言われて  
も、これはとても難しい。

人によって、愛情の表われ方は千差万別  
です。ストレートな人もいれば、控え目な  
人もいるでしょう。あるいは状況によって  
は、ゆがんだ形で出てくるかもしれません。  
受け手も注意しなければ、見過ごしてしま  
うこともあります。受けることに慣れすぎ  
ると、忘れてしまうことだってあります。

それほどに、繊細で強烈なものなのです。  
能動的に、この「愛されている」という  
感覚をキャッチできたら、たとえからだは  
日常生活でくたくたに疲れていても、心は  
感情的に波立つことがあっても、意識の奥  
底に生まれる安心感は、何物にも代え難い  
と思います。

逆に愛されていることに気付かなかった

ら、気付こうとしなかったら、人は糸の切れた麻アサのように、あてどなくさまよう、不安定なものになってしまふのではないでしょう。この安定のなさは時として、罪深い行動を生み出すこともあるでしょう。

もちろん、これはたくさん顔を持つ愛という概念の、ほんの一面にすぎません。愛への問いは、深く際限なく続きます。

人生経験の浅い者が、なんと生意気なことを……と思ったのですが、「わいふ」を読んでいて、そこかしこに見え隠れする愛を、どうしてもそのままほうっておくことができず、書かずにはいられなくなつて、ペンをとった次第です。

## いいなあ、 お母さんて…

東京都練馬区 上谷亜育

二三五号、かぶらずしを作ってくれるお母様のいる高松さんがうらやましい。なぜお母様は、「形にも残らず、お金にもならなかった」家事を生き生きとこなせたのでしょうか。

私が記憶をたどってみても、生き生きと家事をこなしていた母の姿をみいだすのはむずかしく、しかしこの母のしてきたことも、まぎれもなく私の命をはぐくんできたのです。

洋裁を学んだ私の母は、幼い私たちの服はよく作ってくれました。そのデザインは、子供心にしばしば斬新せんしんすぎるように思え、でもそうと言えない私でした。子供の手が放れ、英語を習い、そして勤め出し、夜遅く帰る日が続くようになった母は、ご飯の支度は自分に向いていないと宣言し、いため物と茶色になるまで掲げてしまった天ぶらはよく作ってくれました。一方、掃除魔のような人で、母の外出中に私がさせられた掃除に対してはいつも「誠意がない」と手厳しかったものです。

「子供が小さいときは、これが務めだと我慢して、あんたたちをみていた」とはつきり言う母、その母の若かりしときの可能性を摘んでしまった私たち子供らが二十歳に手がとどかうというころに、母は十年ほど続けた勤めを辞めました。

家に待つ母は、娘がコンパなどで遅く帰

る度に「うちは寝に帰るだけの下宿屋か／＼」「こんな思いをして待っている親の心配が分らないのか／＼」と怒り罵り、はては、「私が出ていきやいいんでしよう／＼」と泣き出すのでした。けんかの原因は全然違ふけれど、二三一号「愛の教育攻勢」の豊城さんのように「翌朝けろり」にはとてもなれない私たちでした。

母乳育児を願ったのに、母のミルクコールの影響大きく、つまりいた私の子育てです。今は「幼稚園より保育園」という私のやり方が、また母の心配の種。いまだに二三一号「今」と「昔」のみなさんのようには、私は母と話せません。

バックナンバーに私の母への思いに似ているのが……、あった！ 二二八号、花園さんの「父が好き？ 母が好き？」共感！

(元・梅村 夢)



# POINT ワンポイント 情報

●引っ越し上手・下手●

## 手抜き上手

東京都足立区

伊藤眞砂子(53歳)

現在の住居に落ち着いて十二年目を迎えた。

けれど、結婚生活三十三年、引っ越し経験十一回、つまり、二十二年の間に十一回の引っ越しをしたということだ。

引っ越しの最大のポイントは、荷を解くときのことを考えて荷造りする、ということ、ガムテープやひもの使用は最小限度

にとどめておくほうがよい。

丁寧すぎる荷造りは、荷解きに二日も要することになる。

私の場合、最初のころは何から何まで丁寧に丁寧に梱包した。

食器類は一つ一つ新聞紙でグルグル巻きにし、すき間なくダンボール箱に詰める。

衣類、本などすべての物を箱

詰めにし、ふたをガムテープでピッタリ留め、箱以外の品と言えば布団と家具のみで、タンスは空にするものだと思っていた。

三、四回目のころ、タンスの中身はそのままにし、大きなふろしきやシーツを引き出しの上にかぶせてみた。

運送屋さんは何も文句を言わない。

あ、これでいいんだ、とうれしくなった。

五、六回目のころ、夫の乱暴な思い付きで、洋ダンスにつつまれた洋服もそのままにしてみ

た。

クレームがついたら外ずせばいいや、と。

運送屋さんは驚きもせず運んでくれた。

なあんだ、こんなことでもいいんだ、と肩の力が抜けた思いで、それからではできる限り手を抜くことを考えた。

本は箱に入れず縛るだけ、アイロン、時計などの雑品は無造作にダンボール箱に放り込み、ガムテープで閉じない。

そして私の究極の手抜き？

といえば、食器類を包まずに運んでしまうこと。

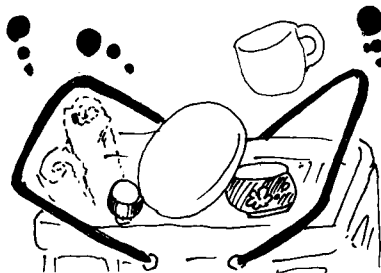
スーパーに不可欠のあの手付きかごや脱衣かごを利用、(幸い五、六個あった)皿はそれぞれ

の間に新聞紙やタオルを入れて重ね、茶わんも、小さく畳んだ新聞紙を挟んで重ねるだけ。すき間には買い置きのごみ袋やうどん粉や砂糖袋などを押し

込んで、かごの上には座布団を乗せておく。

この方法で割れたことがないから、近距離なら保証できる。

旅行カバンは、預金通帳や大切な書類入れに利用したり、花



瓶や置物をバスタオルでぐるんて入れると便利。

冷凍庫の中身は、スーパーか魚屋さんで発泡スチロールの箱をもらっておき、凍ったアイスノンなどと一緒に入れて運ぶ。

注意

①引つ越し先の隣近所へのあいさつは前もって済ませておく  
とよい。この際、ゴミ出しの場所と曜日を確認し、出前をしてくれる店の電話番号を聞いておく。

(・荷運び中に顔を合わせたときのぎこちなさを避けた  
い、  
・ゴミは早く処分したい、  
・当日の夕飯は多分出前に  
る)

②一番最初に必要なものはお茶  
道具一式、一まとめにしてす  
ぐ出せるように。ふきんと使  
いかけのティッシュボックス  
も一緒にしておくとうい。

③布団を荷造りする前に、鏡台  
を分解しておく。鏡、ガラス  
テーブル、食器棚のガラス戸  
などは布団の間に入れる。

④箱詰めした品は、マジックペ  
ンで中身を大書きするのは当  
然だが、ふたはできる限りガ

ムテープで閉じない。

⑤当日の履物はサンダルかブカ  
ブカ靴が便利。

⑥これはオマケ。空け渡す家に、  
ゴミ出しの場所、曜日と、近  
くの病院、区役所、出前で馴  
じみの店の電話番号をメモし、  
張り付けて出ると親切。

## 夕飯の差し入れと ベビーシッター

横浜市鶴見区

清水 宏子(36歳)

平成の秋、四階の二DKの公  
団から、数百メートル離れた中  
古の新居(二階建て)へ引つ越  
しました。

「①宅急便から手を伸ばし引つ  
越しをやり始めた急成長の会社  
は、有名でも中身(体制)が追  
いついていないため、手順や従  
業員の態度が悪い。②小さい会  
社は、大手に比べると高い。③  
全国的に大きい会社で昔から引

つ越しを手がけているところ  
が、安心で手際もよい」という  
友人の情報をもとに、電話帳で  
数社を選び見積りをしてもらい  
ました。

結婚年数、子供の数、部屋の  
広さなど細かく聞いてサッと見  
積もりを出し、パツと引き上げ  
てあっさりしていた大手の会社  
が一番安く、他社とは三〜五万  
の開きがありました。態度がし  
つこかったり、泣き落として決  
めてもらおうというようなところ  
が、逆に一番高い見積りでびっ  
くりしました。結局一番安いと  
ころにお願ひしました。当日は  
あらかじめ四色のテープを張っ  
たダンボールを二階と一階の四  
部屋に運搬をお願いしましたが、  
こちらの要望通り、三人であっ  
という間に二トン車で三回分の  
引つ越しを、八万六千四百円で  
やってくれました(日本通運、  
八九年十一月九日)。



オブションでエアコンの取り  
外しなどもしてくれますが、や  
はり電気屋さんに直接頼むほう  
が、きれいにきちんと取り付け  
てくれるので、大事な部分は近  
所のプロにお願ひすると安心です。  
余談ですが、今回の引つ越し  
で一番ありがたかった手伝いは、  
引つ越し日ははさんで前後二週  
間、友人たちの夕食の差し入れ  
とベビーシッター。分担で月曜  
は誰の家でカレー、火曜日は誰  
のところまでスパゲッティ……  
と重ならないようにスケジュー



ルを組んでくれ、親子どんぶりあり、焼肉あり、おでんにフルーツサラダetc、etc、各家庭のいろんな味が楽しめてホッと一息、引っ越しの疲れもふっ飛びます。

以来、我が家も友人が引っ越すと聞くと、当日の手伝いより、前後数日間の夕食の差し入れとベビーシッター、と決めています。台所関係の必需品をいち早く片付けて新居にセットできるので、スタートも速やかです。みなさまもお試しを。

プレゼントでは、紙皿・紙コップ・割ばし。どうしても来客が増えるのと、雑用に追い回されるので、省ける部分は割り切って省略するのがコツのようです（ふだんは資源を大切に、これらの使用はなるべく控えている我が家ですが）。

引っ越しの業者が、こんな食事に関するサービスもオプショ

ンで付けたら、けっこう当たるのでは?! と思います。

何はともあれどうせやるなら、上手・下手はともかく、自分らしいユニークな引っ越しを元気に楽しくやるのがコツなのかもしれません。

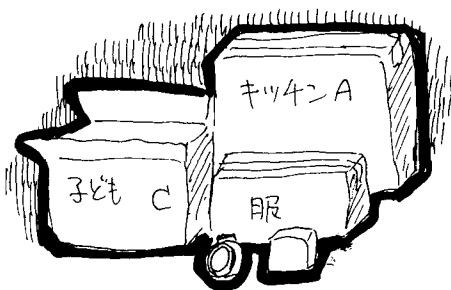
## 荷造りのコツ

川崎市宮前区

刀祢 啓子

一気かせいにものごとをやり返げるのが苦手な私は、引っ越しの準備も二カ月以上前から少しずつやりました。まず、家の中をぐるりと見回して、なくとも一向に困らないものから箱詰めを開始します。壁にかけてある絵、飾ってある人形、花瓶などです。次は、食器棚の中にあるけれどあんまり使わない食器。その次に、めったに使わない食器セットなどは箱に入れたま

ま片付けてありますが、取り出してひとつひとつ包んだり、すき間に紙を詰め込んだりします。毎日少しずつ目につれるものが減り、段ボール箱が増えていきます。ただし、段ボール箱はまだ粘着テープで閉じてはしません。どうしても必要になるものもあるし、同じ種類のものだから同じ箱に入りたいと思うものも出てくるからです。テ



ブは思ったよりたくさん必要で、私は当日の朝になって足りなくなり、慌てたことがあります。ふたのところにしか中身を書いていないと、積み重ねたとき分かりません。だから側面にも書くことをお勧めします。新居の各部屋をA、B、C……と決めて、Aに置くものはいっている箱にはA、Bに運んでもらいたい箱にはBと記入しておく、と、「えーと、これは二階の右側の和室へお願いします」などといちいち指示する必要があります。

隣の市への近距離の引っ越しのときは、小さな引き出しは中身を入れたままでもよかったのですが、遠距離の場合は（別の業者だったからかもしれませんが）中身はすべて出してほしいと言われ、こまごました文具や、ハンカチ、アクセサリ類も全部、箱に移しかえ、それを段ボール

箱に入れました。

箱がだんだん部屋を占拠してくると、夜はふとんを出して空いた押し入れに箱を入れ、翌朝また、箱を出してふとんを入れるということを繰り返しました。一週間前くらいになると、食器棚はガラガラ。普段から捨てるのが惜しくてとってあるインスタント食品の容器、たとえばグラタンのアルミ皿、茶碗蒸しのプラスチックのカップなどの出番です。わざわざ紙皿や紙コップなどを買う気にはなれません。おふる場の洗面器を片付けたあとは、大きめのクッキーの空き缶で代用しました。タオルや歯ブラシも古びてきたもので我慢し、当日の朝、使ったあと、最後の掃除に役立てて捨てます。

所の人がほんの何時間かでも預かってあげるといと思います。それが、お金や品物よりもずっとうれしいお餞<sup>おまけ</sup>別です。

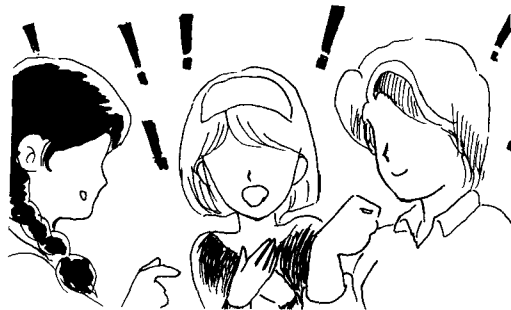
新居のほうで受けた親切でとうれしかったのは、知人がおにぎりとおポットに入れたお茶を届けてくれたことです。それから、前に住んでいらした方からのメモ。近くのスーパーへの地図、ごみの出し方、ごみ置き場の掃除当番のこと、ちょっとした電気工事をすぐやってくれる電気屋さんの電話番号など、ほんとうに助かりました。

## 友人関係が大切

東京都小金井市  
木場 恵子（44歳）

結婚以来、夫の転勤に伴い海外に二回出たのを含め、七回の引っ越しを経験している。それ以外にも、参加している各種グ

ループや社宅仲間、ご近所、妹たちなどの引っ越しの手伝いに行くことも少なくない。若いころの引っ越しは、夫は毎晩送別会続きで帰らず、まだ働き盛り



た。しかし、海外生活で身内がいけないときは、友人同士助け合わざるを得なくなり、送ったり送られたりしながら、引っ越しのときのポイントをつかめるようになってきたと思う。

先日は、これまで何かと頼りにして近くに暮らしていた末の妹が、連れ合いの故郷に永住のため一家で引っ越しして行った。引っ越しの手伝いをしながら、引っ越しの要点をまとめてみた。

引っ越しが決まったら、運送会社に見積もりに来てもらい、ダンボール箱へ、当面必要のない、本や衣類から詰め始める。屋は送別会出席、夜はダンボール詰めという日が続く。それと同時に、子供の転校手続き、公共料金の打ち切り手続き、役所へ転出届けなどの事務的な用事をすませていく。こちらでお世話になった方たちにあいさつして回り、転居先でお世話になる

B.A.カー／清水久美 訳  
**才女考**  
〈優秀〉という落とし穴 人生に  
意欲的な女性達に。 2575円＋310

江原由美子 編  
**フェミニズムの主張**  
性の商品化など4つのテーマを選  
び、議論を尽くす。 2781円＋320

ハルダッハ＝ピンク他 編  
木村育世 他 訳  
**ドイツ/子どもの社会史**  
自伝による証言 1700～1900年  
子ども時代の資料集。7725円＋310

ベック＝ゲルンスハイム／香川 訳  
**出生率はなぜ下ったか**  
ドイツの場合 男女平等の上に築  
く家族の未来を展望。3090円＋310

現代女性作家研究会 編  
**現代イギリス女性作家を読む**  
①フェイ・ウェルドン／②アニ  
タ・ブルックナー／③P. D. ジ  
ェンズ／④バーニス・ルーベ  
ンス／⑤アンジェラ・カーター  
46冊上製カバー装 ■内容見本呈  
全5巻完結———2369円＋320

国際女性学会 編  
**〈女と仕事〉の本 1・2・3**  
1945～1990年までに出版の本の目録  
全3巻完結①②各2060円③2472円

E.ショーター／池上・太田 訳  
**女の体の歴史**  
イヴ以来の重荷から解放されるま  
での女の体のドラマ。3296円＋310

\*定価は消費税込みです。



**勁草書房**

東京都文京区後楽 2-23-15  
☎3814-6861 (個)東京5-175253

方たちへのあいさつの品を用意  
しておく。お餞別も、あいさつ  
の品もどちらも心の負担になら  
ないように値の張らないものに  
したい。

一番忙しくなる引っ越し当日  
に、近所の友人たちが一人か二  
人手伝って下さるとほんとうに  
ありがたい。妹の引っ越しのと  
きは、私も手伝いに行ったが、  
地域活動の仲間の方たちがいろ  
いろ心遣いしてくださって助かっ  
た。周りの者ができる手伝いと  
いうと、小さい子供の世話、家  
族の昼の食事（お茶と簡単なお  
弁当）。運送屋さんは近所の店

に食事に行ってくれることが多  
いので、引っ越し主が、お昼代  
を出す。それから、荷物を出し  
た後の掃除。とくに掃除機は、  
荷物に入れて送り出してしまっ  
たので、借りられるとありがたい。  
私の所属している婦人グルー  
プでは、仲間の引っ越し当日、  
二人ぐらいが代表して手伝いに  
いく。人数的には、それ以上多  
いと逆に仕事がかどらないよ  
うな気がする。私自身、香港か  
ら帰って来るとき、友人たちが  
たくさん手伝いに来てくださっ  
たが、お茶を飲んでおしゃべり  
してしまう時間のほうが多くなっ

てしまった。

結局、夫と二人最後に大あわ  
てで片付けた。

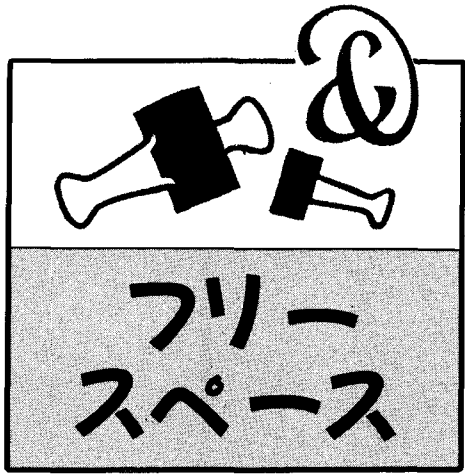
手伝う側のエチケットとして  
は、その家の様子をほかの人に  
もらさないこと。日ごろ、家の  
中をきれいにしている人でも、  
引っ越しの混乱でハチャメチャ  
になっているもの。香港にいた  
友人で、引っ越しの手伝いをし  
てくれた人に家の中が汚かった  
とうわさを広められ、ひどく傷  
ついて、他人を信じられなくなっ  
た人がいた。小さい日本人社会  
だからこれは困る。

妹の話に戻るが、彼女は地域

でリサイクル活動にかかわって  
いたので、立つ鳥跡をにごさず  
の名の通り、きれいに立って立っ  
ていった。毎日、ゴミの片付け  
を連れ合いと協力して真剣に考  
えたとのこと。荷物が出た後は、  
ゴミの山になるものだが、彼女  
の家にはちいさいゴミ袋一つし  
か残らなかった。

引っ越しのときに限らず、誰  
でも生活していくうえで、「必  
要以上の物を持たないこと」  
「心を開ける友人関係をもって  
いること」が大切ではないかと  
日々思っているこのごろである。

(え・田村幹代)



## 憂しとみし世ぞ

川崎市中原区●島 初美

昨年十二月、私の銀行口座に三万五千円という金額が、神奈川県老人課から、そして今年の三月には四万円が、今度は川崎市の高齢者福祉課から、それぞれ振り込まれていた。

在宅寝たきり老人には、お見舞い金とし

て、年一回県から、市からは毎月二万円が介護援助手当金として、年二回に分けて支給される。義母はとうとう、在宅寝たきり老人として役所の名簿に登録されてしまったのだ。

福祉事務所に出かけ、医師の診断書と住民票を添え、するように申請の手続きをしてきたのは私である。九月の終わりころだった。四万円というのは、その九月から十二月までの四カ月分である。

あの当時私はもう、我慢の限界だった。毎朝、義母の部屋をのぞくのがこわかった。

まだまだ手の力が強くて、オムツを無理やり引つ張り出すことができた。汚れたオムツが、ドサツとばかりに布団の上に投げ出されていて、その後始末に右往左往する日が続いた。

夫に病院に入れようと何度持ちかけても、彼は承知しない。夫とその弟は二人とも、義母に対して私のうかがい知ることのできない深い感謝と憐憫の情を持っているようだった。福祉事務所に相談すれば、何か話ののってくれるかもと、出かけて行ったのである。

ショートステイやデイステイのような一時預かりの方法も聞いた。

そのアンケート用紙に記入してみても、義母が最重度の要介護老人であることが分かり、係官の同情を買ったりした。

神奈川県や川崎市は、高齢者福祉対策が、全国でも上位にランクされていることを、新聞で知ったのは最近である。私は有り難い所に住んでいることになる。あのころは、どうせ世話するのなら、もらえるものは、もらっておこうという心境だった。

夫や義弟に低姿勢に出られると、逃げも隠れもできない専業主婦、締め切りに追われるような身でもなし、できるだけ協力するという彼らの言葉を頼りに、今日まで義母を介護してきた。そして私なりに、得るところもあった。

結婚当初から同居していて、人柄に慣れていた。やさしいよい人だった。新米の私に、さっさと主婦の座を譲り、決して争わなかった。むしろ私にすっかり寄りかかり頼みにしているような人だった。嫁と姑の熾烈なたたかいなど、経験したことがない。

物足りないと思っていたが、友人たちの苦勞話を聞いたりすると、私はのびのびと人生を歩んできたのだと分かる。私は夫たちが心から同意するまで病院に入れるのは待つつもりになっている。

それに義母は、最近では手がからなくなつた。一日中朝起こしてから夜寝るまで、いすにじっと腰かけている。しかし手をつなげばなんとか歩けるのがうれしい。徘徊や不潔行為は、そういうまでも続くものではなかったのだ。

そのかわり、箸を持って食べることがだめで、スプーンも長くは持てなくなった。一口、一口、口の中に入れてあげるようになった。

しかし老人病院に入院させて管だらけになつて生きるより、家族の中にいるのが幸福なのだ、夫は信じているようだ。二人も娘がいるので何かと手伝うし、外出もそれほど不自由なく、どちらかが留守番してくれる。

ながらえば またこのごろやしのばれむ  
憂しとみし世ぞ 今は恋しき  
百人一首のこの歌のような心境である。



「何書いてんのん、またおばあちゃんの悪口ばかり書くんじゃないのよん」

突然太い声がした。春休みも終わり、明日は下宿へ帰る大学生の長男の、のんびりした声である。

冗談ではない。悪口なんか書くものか。義母と同居していたおかげで、他人より早く、老後の寂しさ苦しさを知って、感動しているだけだ。

私は、あんたや嫁さんの世話にはならないよう元気に生きてみせるからね。

## 子供に聞かれて 困ったこと

東京都足立区●和田 緑

「ねえおかあさん、千代にーってどういう意味？」

もうすぐ、卒園式を迎える長女の質問である。どうやらその日のために、幼稚園で君が代の練習をしているらしい。

「千代にーっていうのは長い間ってことよ」

「じゃあ、八千代には？」

「もっともっと長い間ってこと」

「さざれ石のつていうのは？」

「それは小さな石が」

「いわおって何？」

「大きな岩」

「こけのむすまでって」

「小さな石が大きな岩になってこけがむすくらいずっーと続きますようにってこと」

「何が続くの？」

何がと聞かれてことばにつまった。

「天皇陛下の世の中が」そんなこと言えない。だって天皇陛下の治世がいつまでもいつまでも続いていきますように、なんて歌詞が、自分たちの国の歌なんてなんかおかしいもの。

アルヴェールヴィルのオリンピック開会式、リトアニアや幾つかの国々が、本来の自分たちの国旗のもとに入場してきた。そのとき、国旗っていいものだな、国歌とか国旗とかって、その国の独立の象徴なのだなとつくづく感じた。それでそのときは、日の丸も君が代もいいかって、なんとなく思ったのだが。

しかし、君が代の歌詞の意味を改めて意識したとき、やっぱり「おかしい」「なんか変だ」天皇陛下の時代がいつまでも続きますようにという歌が、私たちの国の歌だよと、我が娘に教えてやりたくない。

「天皇陛下って何？」って聞かれて、いったいなんと答えてやればいいのだろう。

「日本で一番偉い人」?! まさか、

「赤ちゃんはどこから生まれるの?」と聞かれて素直に答えた私も、「天皇陛下」には困惑するのである。

## 通信教育裏方です

川崎市多摩区●日下部直子

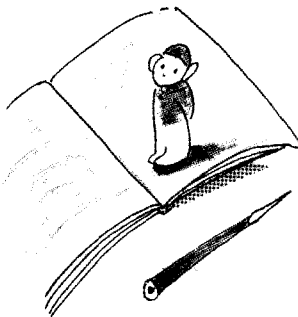
毎日、学生さんから送られるレポートが五十通から一千通。昨年度は四万通。七万七千単位分が私たちの手を通っていった。九十科目九十二種類。これを六十人の先生方に間違いないく届けなければならない。結構手間暇がかかる。そして頭もいる。学習進度チェック用個別カードに正確に記録するために。まちがった先生に送らないために。添削料を間違わないために。迅速かつ正確に返送するために。「ために」「ために」のそのためにいろいろなチェックポイントが置かれる。

郵便局から届いた冊数を五種類、十項目に分けてそれぞれ数えて総数を出す。次にレポートの中に綴じ込まれた伝票を切り、学生の個別カードに記入し、伝票枚数を数える。このとき、届いた数と伝票枚数が違えば「伝票切りもれ」「数とり違い」「入力ミス」で振り出しに戻る。

先生ごとにレポートをふり分けてから、先生ごとの伝票を作る。この伝票の総数と郵便局から届いた数が違うと、「コード違い」「本体ー伝票記載違い」「入力ミス」「点検ミス」で振り出しへ戻る。

先生から返されてきたときは、送付伝票と戻ってきた数を点検する。これが違うと回送帳簿と個別伝票の照合作業。

先生ごとに回送総数と返却総数が記録されている。回送総数と返却総数の差がただ



いま先生の「お手元」にある数になる「はず」ところが、なかなかこの数が合わない。合わないときまた各種伝票と帳簿にあたることになる。不思議というか当然という

か、この数の出方、差の数が一とか二の場合と百などという区切りのよい数の場合とかで大概どのあたりが臭いと判別がつく。

合わない、おかしいの連続で、お正月の双六のように「ここへ戻る」の毎日ではあるが、結構この知的作業がおもしろい。

大量のものを処理するには必ず二〜三％のミスが出るのだそう。ミスというより異分子というのか、要するに規格に合わないヤツ。そして、大量処理がスムーズにいかない原因を作る。ミスの原因になるヤツ。この二〜三％の異分子と、それが起こすミスの発見と訂正の作業。シャーロック・ホームズとまでは決して言えないけれど、近ごろ、中学生が読む藤本ひとみ先生の推理小説くらいの知的興奮を呼びさます。

下手をするともちがった本人（学生のと きもあり、私たち事務員のときもある）への個人攻撃になりかねないこともある。

誰もが共通して間違ふところは、懸案事項として次年度に改正し、特定のグループの学生に特有のミスは担当者に連絡し、事務員の側のミスの場合はこちらでケース・バイ・ケースで対応する。

事務員でも、経歴によってどうしてもミスの出方が違ってくるのがおもしろい。ある程度たつとその人特有のミスの出方というものも分かってくる。

結果として人のアラ探しになりがちではあるが、学生さんの信頼を失わないために、そしてよりよい教育サービスを提供するために……。ま、そういう大義名分のもとにソツなく（そしてセツなく）こなした六年間ではありました。

## 初期ガンは怖くない

東京都世田谷区●太田差恵子（31歳）

六十三歳の実父が生まれて初めて人間ドックに入ったのは今年一月末のこと。まだまだ現役でがんばっている父にまさか異常があらうとは、母も私も兄も、もちろん本人も考えていなかった。が、胃に腫瘍が発見された。

皆が良性的のものであることを祈っている

うちに、父は医者から、「十中八九、悪性です」

と、ガンの宣告をされた。今日、医学は大変な進歩を遂げ、ガンも完治する病気になっていることは知っている。だが、そうは分かっているにもかかわらず、ガンⅡ死という方程式が頭に浮かぶ。

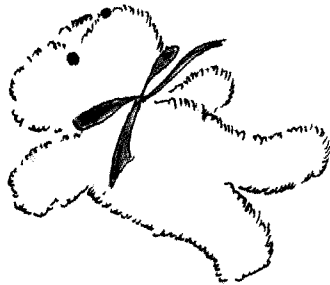
病院のベッド待ちの二週間は、そのことが常に頭から離れず、夜もよく眠れなかった。遠く離れた地に住んでいる私でさえ、これほどゆううつな毎日なのだ。父はどうしているだろう。母はどんなに心配だろう。想像するとよけい心は沈む。が、考えてみれば、自覚症状があるわけではないのだ。人間ドックでひっかかったのである。しかも、医者はすんなり本人に告知したのだ。病状は初期にちがいない。

やがてベッドが空き、父は入院した。三月十二日のことである。その後は驚くほど順調に時は流れた。手術は一週間後の十九日。私も子供が春休みに入ったので、前日の十八日に京都に行った。

手術前日の父を京大病院に見舞った。ガウン姿の父は元気なのだが、いつもより小

さく見える。その日は朝から、「いやだ、いやだ」と、ぶつぶつ言いながら、病室を熊のようにウロウロしていたらしい。

そしてとうとう手術の日。午後一時三十分からの予定だったが、急に早くなった。



私が病院に着くと、もう父の姿は手術室に消えていた。私には二歳と四歳の子供がいるので、病院に長居はできない。その日も友人に子供を預けていた。そのため手術が終わるまでいるわけにはいかず、母を残してその場を去った。

手術は三時間の予定だったが、二時間で終わった。父は昔から骨と皮にやせている

ので、手術は容易だった。太っていると脂肪が多いため切開に時間がかかるといふことだ。

父の胃は五分の四とられてしまった。私はこれまで胃の切除される大きさは、病気の進行によると考えていた。それは間違いで、腫瘍ができた場所による。もし胃の下部にできたのであれば下だけを切ればよい。しかし上部にできると上だけをとりというわけにはいかず、上から下までとる必要がある。下だけを残すということができないということだ。あいにく父のそれは胃の最も上部にできていた。

五分の一しか父の胃は残らなかったが、ガンの進行は幸い初期の段階で、転移はしていなかった。ガンができて、四、五カ月の状態での手術。医者は今回の例は、いかに定期検診が大切かということの実証だと言った。

翌日の午後、私は病院に行った。胃の手術は難しいものではないのでICUに入らなくてもよいということは聞いていた。それでも管だらけの父を想像していた。が、すでに点滴一本になっていた。そればかり

か、まだ術後二十四時間であるというのに、「歩きなさい」と、医者は言う。動かないと腸が動かないため、お腹にガスがたまり回復が遅れるというのである。父は痛がり動くことを渋った。

そして二日目、今度は「歩け!」と、動こうとしない父を医者は厳しくしかった。仕方なく父は必死の思いで起き上がり、どうにかトイレに行けるようになった。医者が心を鬼にしてどなりつけてくれたおかげだと感謝する。

三日目。父の顔は張りつつやを取りもどしていた。もう大丈夫。そう思った。朝から一時間に一度、起き上がる練習をして、随分スムーズに歩けるようになっていく。おちよこ一杯の水も飲んで構わない。この日はど医学の進歩のすばらしさ、人間の体の回復力に感激したことはない。

四日目。病室が個室から大部屋に移された。赤ちゃんの離乳食ほどではあるが、食事が始まる。この様子を見て、私は安心して東京に戻った。

その後の様子は母からの電話によるが、経過は良好で、食事の量も徐々に増え、点



滴も薬もなくなった。私が帰って一週間後にはお肉も食べられるようになり、おかゆも固くなってきた。あきれたことには、働きばちの父はこの日外出屈を出し、会社をのぞきに行ったらしい。

手術後、わずか十九日で退院予定である。そのときにはおかゆからご飯に変わっているはずだ。この後半年間くらいは、少量ずつを何度にも分けて食べなければならぬが、一年もすれば元の食生活に戻る。

今回、ガンはもはや怖い病気ではないということを目のあたりにした。そしてそれとともに定期検診の大切さを思い知った。ついつい受けずに済ませがちだが、死にたくなければ一年に一度必ず検診を受けるべきだ。夫や両親に長生きしてもらいたければ受診をすすめなければならぬ。

父はゴールデンウィークが終わるころには仕事に復帰。来年の正月には「まるで夢を見たみたいだ」と、みなで酒も飲めるようになっていこう。もし今回人間ドックに入っていないければ……。考えただけで背中が寒くなる。

## カウチンセーターとの出会い

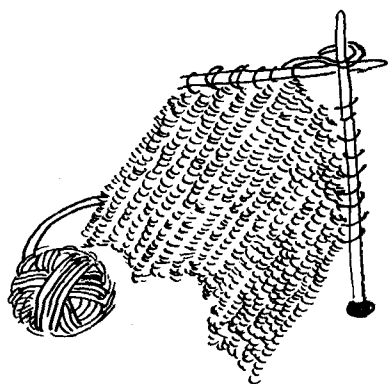
大阪府南河内郡●中野正美

人生何がきっかけで、熱中できるものにもめぐり会えるかわからないものである。ある日、夫が推理小説を買いたいというので、本屋について行った。自分は何も買うつもりはなかったのであるが、暇つぶしに本棚をながめていると、*「カナダ生まれのカウチンセーター」*という編み物の本が目についた。

頂上に雪の残った山々をバックにして、ワシの模様を編み込んだ一枚のセーターが、木の枝でつくったハンガーにかけられていた。手に取って開いて見ると、ワシだけでなく、雪やシカなどの柄のセーターがまわりの自然に溶けこんだ感じで、写されている。「家でゆっくり見たいなあ」そんな気持ちで、その本を買ってしまった。

カウチンセーターという名前は聞いたこ

とがあったが、詳しいことは知らなかった。カウチンとは、カナダのインディアン部族の名前で、そのカウチン族が編んでいたのがカウチンセーターであるということ。柄はかえで、ワシ、シカ、雪など、自然界にあるものをパターン化してあるというこ



と。カウチンの毛糸は脱脂していないので、編み上がったセーターは、防水性、防寒性にすぐれていること。など色々なことが分かった。

そして、どのことがらも、私にとっては魅力的に思えた。でも、私がこのセーターを編もうと決心したのは、説明の中に次のひとことがあったからだ。

「洗濯は本来しないので着るのがカウチンセーターなのですが、気になる方は……」

毎日お風呂に入ることがあたり前で、きかないもの、くさいものは絶対にいや、と嫌われる今の世の中に、こんなセーターがあったなんて……。私は感動してしまった。その毛糸をあつかっている店が私の勤め先のすぐ近くにあったことも幸いであった。さっそく次の日に毛糸を買いに行った。

このときになって気がついたのだが、よく注意してまわりを見まわすと、今年はカウチンセーターが大はやりで、着ている人がいるわいるわ。本のとおり模様で編んだら、きっと自分と同じものを着た人に出会うことだろう。模様は本とは少し変えてみることにした。やはり自分でつくるなら、

世界に一つしかないものを編みたい。型は前ボタンのジャケットにし、模様はワシにすることにした。方眼紙に図を書き、編み始めていく。

直径十ミリの太い針で編むことも初めてである。早く編めるのだが、知らない間に、かなり力がはいっているのか、そでを編み上げたところから、両手の手首が痛くなってきた。けれど、そんなことはかまっていられない。私は早くワシの模様がどのようになるのかを見たかった。今まで、編み込み模様を編んだことがなかったのだが、これほど楽しいとは思わなかった。一段一段編み進んでいって、模様ができ上がっていくのを見るのは、ほんとうにわくわくする。

編んでいる途中に二度、私はかなり編めたものをほどこしてしまった。一度は、でき上がったワシの柄が気に入らなかったからである。もう一度は、模様のところの編み方がきつくなりすぎたからだ。

「ほどこ」ということ。これは私にとってはずらしいことだ。私はめったにほどかない。少しぐらい編み方がおかしくても、今まで編んだ分がもったいないからそのま

ま仕上げて着てしまう。あるいは、変だなあと思ったその時点で、編む気持ちがあうせでしまい、そのままその作品は、未完成のまま押し入れの中に眠ってしまうのだ。そんな中途半端な作品が我が家の押し入れにはたくさん入っている。残念なことに私はそういういいかげんな、根気のない性格なのである。

ところが、今回はちょっと違う。とにかくいいものに仕上げたかった。そのため二度目に編む前に、模様の試し編みまでしたのである。

今は、四月のなかばである。カウチンセーターを着る季節はもう過ぎてしまったが、やっと私のジャケットはできそうである。完成したら、裏布もつけようと思っている。これは完全防水防風を誇る素朴なカウチンセーターに「よけいなことをしないで欲しいなあ」としかられそうではあるが、でも、どんな寒いときでも愛用できるようにという配慮だと思ってもらいたい。

私は流行の服装をするのが苦手である。今年はもう着れないし、まだ一二年は、カウチンの流行が続くそうなので、もうし

## 若い人

千葉県流山市●西村 治(68歳)

ばらくたんすの中に入れておいて、みんなが忘れたところにかっこよく着てみたいなあと思っている。そして、できれば洗濯をしないで着続けたい。

(一) 妹の娘(姪)は今年二十歳。高校卒業時美術系の上級学校進学希望だったが、親の経済事情を考慮して断念。その後諏訪市の大きなカメラメーカーに就職。遊ばず、使わずせせと貯金した。

二年経つと親に無断で退職し、東京のアニメーション制作会社に原画を送り入社テストを受けて運よく合格した。

両親に、退職金と貯金を使って上京したい、アパートを借りてアニメーション制作の仕事をしたい、許してと泣いて申し出た。普段はおとなしく従順だが、この要求だけは絶対に曲げようとしなない。親も仕方なく乏しい財政のなかから少し援助して娘を東京へ送り出した。



もう一年が過ぎた。娘は夢中でアニメの原画作りに精を出し、忙しいときは二晩つづきの徹夜もするという。若いのだろう、そんな過酷な労働にも堪えて生き生きしている。原宿も新宿も知らないという。頑張つてと、陰ながらひたむきな情熱に心から応援している。

(二) 姪の娘は長女で今年二十一歳。長野市の町外れの高校を卒業すると、こんな死んだような町で暮らすのはたまらないと、奨学金を貰って横浜の歯科技工士の学校(二年制)に進学した。両親は反対したが、

言うことをきかない。両親も乏しい財政のなかから仕送りを続けた。本人も寮の食費を節約するため、カップラーメンだけで何日も過ごすような厳しい生活をしたという。今は卒業して二年目。大きな歯科医院に高給で勤め、優雅な生活を送っている。

苦しさに耐えた根性には感心したが、両親がともに苦労したことについてはまったく無関心。両親がそれを口にする、「あんた方の育て方が悪かったから、こんな娘ができた」とうそぶく。

(三) 私の家の隣にクリスチャンの集会所(信者は教会といっているが、普通の民家である)がある。アメリカから来た独身の美しい牧師が住んでいたが、昨年五月帰米した。

留守番に二十一、二歳の若い女の子が独りで住んでいる。大学生で夜おそくまで窓に明かりがついている。多分勉強しているであろう。自治会の回覧板などを届けに来たときに話をする。

学校を出たら、どういう仕事をするの。神様のお喜びになるような仕事をしたい。悩める人、苦しんでいる人、他人の助けを

必要とする人、そんな人たちの支えとなる仕事をしたいと思います。結婚は……。まだ考えたことはありません。はっきりと言う。

この人を見ていると、人間って素晴らしいと思う。

(四) 私の家の養女。四歳のときから育てて現在二十二歳。短大を出て会社勤め。近くアパートを借りて別居する。

私たち夫婦が千葉県の海岸近くの児童養護施設でこの娘に会ったのは、十八年前。園長室のソファのなかにお人形のように座った可愛い少女は、小さな指を四本揃えて、自分が四歳になったことを教えてくれた。

娘の父は怠け者で行方不明。母は重病で入院中、母の兄弟姉妹は九人いたが、引き取り手がない。福祉事務所の隅の椅子に二歳のとき置き去りにされていた。

園長は私たちに里親になり、十八歳になったら帰園させたほうがよいと言う。ところが児童相談所の福祉司は、養子にしてこの子のため社会の荒波の防波堤になって欲しい。この子が成人したとき泣いて感謝するに違いないと言った。

そして私たちは養子にすることを選んだ。この娘の親になって、今までの不幸を二倍にも三倍にも幸せにしてやろう。子供のない私たち夫婦に神様がそうしろとお言いつけになっているのだ。

おしっこ、ウンチの世話から始まり、七五三のお祝い、成人式、学校と、夫婦の生活費を切りつめて尽くした。

しかし成人した娘は、年寄りの言うことは若者には通じない、と鼻先でせせら笑い、何を言っても、古くさいの一言で「<sup>いじり</sup>一蹴」。

私たち夫婦は、いま老人ホームを探している。

## 還暦の向こうは バラ色

神奈川県大和市●浅田節子(60歳)

さあ——何から始めようかと、六十代突入ホヤホヤの私は、心を躍らせている。

娘のころ、六十代の人は完全におばあちゃんだと思っていた。

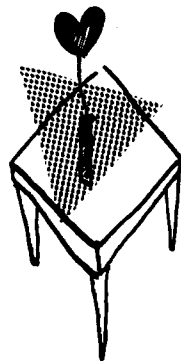
還暦という言葉からは、暗いイメージしかわいてこなかった。

それなのに、こうして実際に迎えてみるとウソのように華やかなもの思えて、それが不思議でならない。

六十代は、子育ても卒業し、やっと自由の身になれる最高の「時」であり、第二の人生のスタートでもあり、「一人の女性」に戻るチャンス。「場」でもあることに気が付き、つぎつぎと、夢はふくらむばかりである。

私たち昭和一ケタ生まれは、戦後の苦しさやイヤというほど味わい、灰色の青春でもあった。

だからこそ、還暦を境にして、残りの人生を思いっきり羽ばたいてみたいのかもしれない。



れない。

しかし、旧友の一人は「月のものがなくなり、女ではなくなつたみたいだし、六十代は人生の下り坂で、さびしいわね」と言った。

私の場合は、それが終わったとき、長年の肩の荷がおりましたようで、うれしくさわやかな気分になえたのに……。

人それぞれの性格により、こうも考え方が違うものかと、新しい発見をした。

これからの人生は、三人の子供からも解放されたことだし、夫の世話も手抜きさせてもらい、古希に向かって真っ赤なジュタンを敷いて、その上を自分のために生きてゆきたい。

## 桃の節句に

東京都調布市 ●手塚和美

三月を間近に控えた休日、思いたってひな人形を飾った。

天袋からうつすらとほこりをかぶったダンボール箱を取り出して、中のいくつもの

小箱をひとつひとつ開けていく。薄紙にくるまったぼんぼりや内裏びなを丁寧にとり出すと、思わずはおが緩んで、何とはなしに心が和んでくる。



いつもはタンスの上に飾っていたのだが、今年はダイニングテーブルに置いてみた。我が家のひな人形は何段飾りといった豪華なものではなく、木目込みの内裏びなだけのケース入りのものである。娘の初節句に、実家の母が狭い団地暮らしを考慮して買ってくれた。下ぶくれしたお内裏様の顔が当時六カ月だった娘の顔にそっくりで、私もすっかり気に入ってしまったものだ。以来

毎年欠かすことなく、その時期がくると出しては飾って楽しんでる。

下ぶくれのおひな様のようだった娘も今は十四歳。身長も体重もバストもヒップも私をとくに追い越して、すっかりたくましくなった。

それに文句ひとつ言おうものなら、「なによ／＼」と横目でにらみつけ、気に入らないことがあると、鼻息も荒く引き戸を「ビシャリ／＼」と閉めたりするむずかしいお年ごろ。理路整然と親の痛いところをついてきて、返す言葉が失ってしまうこともしばしば。「ヒメ、ヒメ」と呼ばれていた、しとやかで素直な娘はいったいどこへ行ってしまったんだろう、なんて人形を前にしてそんなことを思ってしまう。

その夜、一段高い所にすました顔で鎮座まします内裏びなをそばに、いつものように家族揃ってお茶を飲む。ケースの中を何度ものぞき込みながら「いいもんだねえ」と夫がしみじみと言う。話題はいつしか娘のことになった。

予定日より一カ月も早く未熟児で生まれ、生死の境を一晚さまよった娘。「どうか元

気に育ちますように、と思わず朝日に向かって手を合わせたよ」と言う夫。しゃべり始めのころタンポポの花をみつけると、タンポポンと言っては大いに笑わせてくれた。幼稚園での発表会では、松雪草やティンカーベル。なぜかよう精の役ばかり、「ヘビ年はヤダァ、ラーメン年がいい」とごねたっけ……。そんなとりとめもない私たち夫婦の会話を、娘はふくれ面したり、テレビたり、ニヤニヤしたり、「記憶にございません」などと、とぼけたりしながら聞いている。

「ほんとうにあのころは可愛かったねえ」と夫が言えば、「今はブスで悪かったわね」と娘。なんせお年ごろの娘である。なだめたりすかしたりするのも楽じゃない。

無思想、無宗教、これといった生活信条など何も持たない平凡な我が家だが、こうした四季折々の日本の代表的な年中行事は、大事にしたいと思っている。といっても伝統的行事を子や孫に伝えとか、とりたててごちそうを作るとか、ひとつひとつに格別な思い入れをしてやっているわけではない。ちょっとした日々のアクセント程度のことである。

節分には豆をまき、ひな祭りにはちらしずしにハマグリの吸い物。端午の節句にはかしわもちを食べ、ショウブ湯に入り、お彼岸にはおはぎを作り、十五夜にはススキを飾り、冬至にはカボチャを煮て、ユズ湯に入る……。ただそれだけのことである。子供のころ母親が当たり前のようにしてくれたことを、私もまたそうしているだけのことである。

しかし、行事のひとつひとつを見つめてみると、その土地の風土や習慣、あるいは先人たちの知恵や工夫、そして純朴な信仰心や祈りといったものが伝わってくる。それは大自然とともに育まれ培われ、人々の生活の中に溶けこんでいたものだ。

飽食の時代と言われ価値観も多様化し、生活様式も生活環境も自然も変わりつつある時代にあつては、これらのものは時代錯誤といえなくもない。

しかし、ショウブやススキやユズといったものを通して、季節を確認したり感じたり、ささやかな食を通して、家族との話題が広がったり、「いいもんだねえ」とちょっと優しい気持ちになれる、そんなひととき

を大事にしたい。また足元を見つめ直したり、原点を考える機会でもありたいと思っている。それは同時に、同じ土地に生まれ育ち、同じような生活体験を持つ我ら夫婦のノスタルジーでもあるのかもしれない。

## イベント大好き！

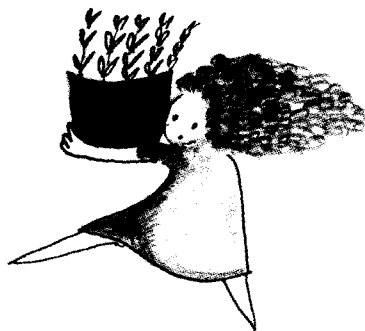
東京都足立区●福田幸子(45歳)

今年もあと二日でやってくる。三月三日のひな祭り。

我が家は現在、一戸建てとはいえ3DKの狭い深い造りである。その中に、彼の両親、子供三人、私たち夫婦の七人がひしめているのだ。そんな状態の家に七段飾りのおひな様を出すのである。

長女が生まれた十九年前に、彼の両親が「どうしても七段飾りを」と言って譲らず、2Kのアパート(当時同居していた)一室に納められる結果になった、問題のおひな様である。

私たちが寝室兼、居間兼、応接間兼、食堂と使っている二階の六畳間は、フトン一



枚しukのが、やっとなつてしまふ。若いころは、狭いフトンに二人で寄り添つて寝ていたけれど、このごろは子供たちが使用している三段ベッドに私は寝ることになる。タンスの前はひな段でふさがり、必要な

ものはあらかじめ出しておくが、忘れたものは、段の下に潜り、そつと少し動かし、手が入るぐらい引き出しを開け、手探りで出すのである。

三十センチほど開いている前を、体を横にして、カニ歩きで、部屋の中を通行するのだ。

こんな思いをしてまでどうして、毎年毎年おひな様を出すのだろうか？

友人いわく、

「本当にイベント好きなんだから」

そう、我が家（私だけかな）は一年中、イベントしている。

小四の息子、中二の娘も「おひな様出してあげないと、泣いているよ」と、可愛いこと言ってくれる。どうせお祭りするなら、道具立てもしなくちゃーいうわけで、三月二日に出して、四日にしまふあわただし、再会をはたすのである。

七夕は、一週間前から飾り制作を始め、ササを三郷のほうまで探しに行き、手ごろなササ林を見つけ、持ち主に譲ってもらつた。十五夜は、だんご粉を買い、ベタベタ手を汚しながら十五このおだんごを作る。

江戸川土手で取ってきた、ススキ、女郎花<sup>おんなはな</sup>を、お月様の見える所に供え、「お月様のうさぎさん、お腹一杯食べてね」と息子と二人で話しかけて悦にいる（息子は多分に、私に氣をつかっているのだろうか）。サンの存在を信じこませることに、私は情熱を傾けたものだ。プレゼントを二個用意し、寒い夜中、車の中に置いてあるサンタ用プレゼントを取りに行き、そつとまくら元に置いてだまし続けてきた。

さすが中二の娘は、今は信じていないが、信じている振りをして、プレゼントを二個ちゃっかり手に入れている。息子は半分半分の様子である。あと一年くらいのものでろうけれど。

その他もろもろのイベントも、大層なごちそうはしないけれど、シャンパンで乾杯してホクホクしている。どうしてこんなにイベントにこだわるのか、自分でもよく理解できないが、とにかく乾杯が好きなのだ。

おかげで（どうか？）息子は、五人揃つて、食事をしたり出かけたりののが、大好きである（下にいる両親は、お正月以外は仲間に入れない、私、いじわるだから）。

# 「爽式」考そつ

千葉県●塚本真理（41歳）

義父は趣味が広い。

書、墨絵、篆刻、表装、装丁、ワープロを打ち、エッセイなども書く。

義父の書は、同じ師についていた義母からは「へたくそ」とこき下ろされるが、

「絵なら母さんよりうまいぞ」と胸を張る。老夫婦二人の家の二階は、工房になっている。

義父は今、三つ目の額縁を制作中である。彫り上がっている二作目を見せながら、

「わしの写真を入れて、母さんかM（私の夫）が胸に抱えて葬式をやってくれや」と笑う。かたわらから義母が、「今、作ってるのは、あたし用なんですってさ」とおかしそうに言い添える。

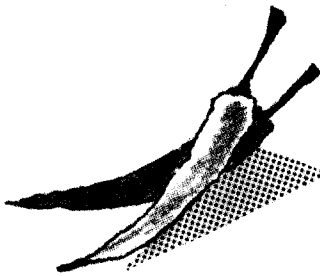
第一作目は食堂に立ててある。その樺色に塗られたぶどう模様の額縁には、義弟のモノクロ写真が飾られている。生きていれば私と同じ年という彼は、運動会の鉢巻き

を縮めた十二歳のまま、父の彫った額縁の中で屈託なくほほえむ。

いつしか話題は、自分の葬式をどうしたにかになった。

かつて、「精密検査を要す」の検診結果に震え上がった私は、自分の葬式には、ごたごたした大道具と坊さんはやめてと口走ったことがある。

お経自体は好きである。大勢で行なう読



経なら、男性合唱の荘厳な魅力もある。が、宗教者よりは葬式屋と呼べそうな僧侶の読経ソロは、あまりうれしくない。いっそク

ラシック音楽でも流すほうがいいかなあ、などとこっそり考えたものだ。

義父が、自分たちの葬式に花輪や坊さんは要らないと言いついた。無駄だというのがその理由である。義母は、冬の雨の葬儀で屋外に立ち、長い読経が終わるまでにカゼをひいてしまつて……とこぼす。実は、坊さん不要を表明したのは、彼女のほうが連れ合いよりも先である。

「うーん、どんなものでしょうねえ。セレモニーというのは、ある程度の型がないと困るのではないですか？」と首をひねる私に、ドボルザークの「新世界」をかけてはどうかと義父が提案し、義母のほうをちらりと見る。様子から察するに、選曲者は義母のようだ。

「あのう……そんな素っ気ない式で、ほんとうにいいんですか？」と、思わず疑わしげな口調になったが、「せひ、そうしてくれ」と二人ともにこにこしている。夫婦の意見交換はとうにすみ、了解に達しているらしい。

不合理、不明朗な戒名料に話が及ぶと、座はがぜん盛り上がった。金額によって使



える文字がランクづけされる寺の戒名より、白木の位牌に自ら考えて書き付けたほうがよほど爽やかであろう、というのがそのときの結論である。

横で聞いている夫は、なにも言わない。

日ごろの言動からして、葬儀は世間一般のようにやりたいらしい。人それぞれであるが、故人の意思が先か遺族の立場が先か、解決すべき問題ではある。

料金のあいまいさと「一生に一度（／）」のためか、一般に葬儀費用はかさむ傾向にあるという。

たつぷり金をかけるのをわるいというつもりはないが、世間体を気にしすぎて、つつい業者者に付け込まれ……というのは、正直いっていとわしい。支払いに頭を悩ますような葬儀は、つまるところ見栄である。大仰な「葬式」にするか、心に残る「爽式」にするか。

人生を締めくくるセレモニーだから、私ならすっきり洒脱にきめてみたい。

奇をてらうことなく心からの別れの式にするには、はて、どういう形をとったものか。目下、思案の最中である。

## ときめきの春

横浜市緑区●中田康子（42歳）

「幸福の選択」というテレビドラマの中年版のようなものが面白かった。離婚して三人の子供たちを育てながら人材派遣会社に勤める四十二歳の主婦。日曜日のバードウオッチングで知り合った年下の男に、何年振りかで胸のときめきを感じる。男は彼女に夢中になり結婚したいと言うが、彼女はこのときめきを大切にしたい、このままでもいい、と答える。

我が家では、夫が大阪に単身赴任して十カ月たつ。ほとんど週末に帰京するが、お互いに違う場所で違う生活をしていると、会ったとき新鮮という長所もあるが、感性とか感動とか興味が微妙にずれてくる。家庭の中の連続した話にも入りにくくなる。

また、夫婦で近所のテニスクラブに入って毎週末テニスを楽しんでいたが、長年のやり過ぎが原因で、私が膝を痛めてしまい、満足にできなくなった。二人の共通の場が

また減ったわけである。

もうひとつ、三年続けていた先輩の会社での編集の仕事をやめて、近くの理工系大学大学院研究室の秘書に転職して十一月。以前に比べ刺激の少ない仕事に、不満を感じていた。

夫と私は、お互いに顔を見ると嫌味を言い合い、私はつまらないキツカケから、「あなたにときめかなくなった」と言ってしまった。ますます夫婦関係は気まずくなってしまった。この半年はほんとうにどん底



まで落ち込んでいた。

しかし、ときめきは自分で見つけなくてはいけない、ということに私はやっと気付

き始めた。膝のリハビリのために水泳がよいというので、スイミングスクールに通い始めた。初めてクロールで水の中を進んだときの感動は、何十年振りのものであった。水の中に全身を伸ばしてリラックスし、体をまかせきったときの充実感は、ほんとうに体のしんからわき上がってきたものであった。新しいことに挑戦するときのときめき、を感じたのだった。

ちょうどそのころ、前の会社からの依頼でやっていた、テープおこしの仕事で、「ワープロ仕上げまでやれる人に頼むから（ワープロは打てるのだが、我が家にはワープロがない）もう結構です」となくなってしまう。もっとやりたかったのに悔しくて、あいた時間をビデオおたくになって埋めていた。映画も時間とお金の許す限り見て歩いた。こんな生活も学生時代以来なかったことで、徐々に自分の精神が解き放たれてくるのを感じていた。

この感動の波に乗って、以前「わいふ」で見え気になっていた「ルナ・カレッジ」に連絡を取った。主婦のための英語の勉強会である。主宰者青山静子氏の講演を聴き

に行き、英語を再学習している主婦の多いことと、その質の高さにも驚いた。そうだが、これにも挑戦してみよう。勉強は五月から始まる予定だ。ついていけるか、続けられるか不安はあるが、とにかくこのときめきを感じたときを逃がしてはならない。四十二歳ってそんな年齢なのかもしれない。いや何歳でもこのときめきは来るのではないだろうか。そのときがチャンス。

研究室には、この四月、ヨルダンから一人、台湾から一人、韓国から一人の留学生が入ってきた。日本語を半年くらい勉強しただけで、あとは英語がコミュニケーションの唯一の手段なのだ。練習のチャンスはいっぱいある。しかしそれにしても、外国人の日本語習得の速いこと。もたもたしている、彼らはすぐりゅうちような日本語を話し始めてしまい、こちらの不正確な話し言葉が恥ずかしく感じられるほどにまですまくなってしまう。

春、四月、スタートの季節。小さなときめきを胸に、人生の折り返し地点を回ろうと思っている。

（元・田沼千恵）

## お友達に△わいふ▽を おすすめください

新しい読者をご紹介下さった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

- 定期購読者をお一人ご紹介下さるごとに、誌代プラス送料とも一回延長。（六人ご紹介下されば、翌年の誌代・送料とも無料になります）

## △わいふ▽年間分をプレゼント にお使い下さい

- ご結婚、赤ちゃんご誕生のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。お申込みいただければ、まず新読者にきれいなプレゼント・カードをお送りしてお知らせし、以後毎回送本いたします。

- その場合も定期購読者のご紹介と同様に、お一人につき一冊分延長させていただきます。

平成  
おたけげ-ジョン

## ② AIDSで人類滅亡

— 生き残れるのは誰？

西田 淑子



# 読・ん・で・み・ま・し・た

## おかえりなさい、おかあさん

ワーキングマザーと子どもたちの30のお話

久田 恵 著

東京都国分寺市 たまき久美

その日は春休みの一日めで、私は子供たちを気かけながら仕事に出かけた。仕事に行く途中、この本を読み始めた。

——受話器を置いて窓の外を見ると、すっかり日が暮れていて、その暗い窓にぼつねんと一人アパートの部屋に座っている小さな女の子が浮かんだ。ふと、どのくらいの子供たちが、母親が仕事から帰って来るまでのこの時間を、今、一人で過ごしているのだろうかと思った——

こんな前書きがあるなんて、あんまりだ。私は涙をにじませる。私の涙腺がゆるいのは認める。でも、こんな不意打ち

はあんまりだ。

一仕事終えて移動中、続きを読んだ。もう止められなかった。本を読むのも、目がウルウルするのも。

この人はどうしてこんなに、働く母親の気持ちがかかるんだろう。どうしてこんなに、うちのムスコやムスメの代弁ができるんだろう。（そうだ、家に電話しなきゃ、おかあさん、六時半には帰れると思うわって、車を降りたらすぐに電話しなきゃ）

それなのに車を降りて最後の仕事にかかる、私は家へ電話することをすっか

り忘れてしまった。ようやく一日の仕事を終えたとき、それに気づいた。こんな母親を「仕事って、そういうコト、あるもんね」と、本の向こうから著者がにっこり笑って話しかけているような気がした。帰りの電車で、釣り革を持っていた本を開けた。前に座っている女性がこの本の表紙に一瞬目を止めた。「おかえりなさい、おかあさん」、サブタイトルは「ワーキングマザーと子どもたちの30のお話」。この人もまた、今、家にいる子供のことを思ったに違いない。

PHP研究所 一一五〇円



# 病院で死ぬということ

山崎章郎 著

茨城県つくば市

山田

永子(34歳)

「人は九〇%が病院で死ぬ。だが、今の病院は人間らしく死んでいくのにふさわしい場所ではないということを知ってもらいたい……」

本の帯に書かれた文章に思わず目が引き付けられた。それは、この本を書いた人が医療現場の第一線で活躍している医師だからだ。

私は十七歳で両親を相次いで癌で亡くしている。二人とも三年の間に手術、入院と繰り返して、精神的にも肉体的にも苦しみながら死んでいった。そのせいか、病院には色々な思いがある。

「一般病院の医療システムは多くの死にゆく患者のためではなく、治癒改善して社会復帰できる患者のために整えられて

いる。そのため、多くの末期癌患者は、多忙な医療システムの中でしばしばとりに残されることになる」

読み進むうちに、「まさにその通り」と、私は大きくうなずいていた。確実に死ぬと分かっている癌患者に医療者側は、いったい何ができるのか。そして、その人は何を望んでいるのか。

今でこそホスピスという言葉も一般に知られてきているが、まだまだ日本では本人に病名を告げるということはタブーとされている。そのため、家族はうそをつきながら患者を励まし、また患者も癌ではないかと疑いながら、お互いにそれには触れずに最後を迎えることになる。どちらも孤独でつらい。



「人は、自分は決して孤独ではなく、自分を愛し、信頼し共感してくれる人たちがいれば生きていけるし、死をのりこえ死を受け入れていくことも可能だ」という著者は、今後終末期医療を発展させたいと願い、深くかかわろうとしている。病名の告知というまだまだ難しい問題があるが、最後まで人間らしく生きられるホスピスは、これからもっともっと社会の需要が高まるはずだと思う。

国は、膨大な防衛費を削って、こういう終末期の医療にもっと予算をつぎこんで欲しい。現代の医療、またホスピスに興味のある方は是非、読まれることを勧める。

主婦の友社 一三〇〇円

農文協人間選書

## 地域の未来と子どもたちの未来

離島教育の実践の中から

服部晃夫 著

東京都八王子市

和田 好子



“やる気のない子”はいまたくさんいる。勉強はもちろん、遊ぶことにも熱意がない。積極的に何かを求める、目標に向かって行動する、苦勞して成果を得るというような、生き生きした意欲がなくて、ただラクなほうへと流される。若さを失ったような子供たちが多くなった。

交通事故が心配、高層マンションに住んで遊び場が少ない、など都会の環境からはさもあると思うれるが、なんと、離島の子供も同じだというのである。

本書は愛知県幡豆郡一色町、三河湾のほぼ中央に浮かぶ人口五百四十人の佐久島の子供たちについて、中学校と小学校を歴任した校長先生が書いたものだ。

赴任した服部先生が驚いたのは、子供

たちが泳ぎがへた、泳げない子さえいることだった。漁業を営む家庭ばかりなのに、家業は手伝ったこともなく、色が白く太っている。都会同様テレビゲームなどで一人遊びをし、よくいえばおとなしく、悪くいえば消極的なのだ。

親は島の人口が漸減していくことを心配しながらも、漁業の将来に見切りをつけていて、子供には勉強して島から出て行ってほしいと思っている。だから手伝いもさせず、普通高校へ進学させたがるのだ。

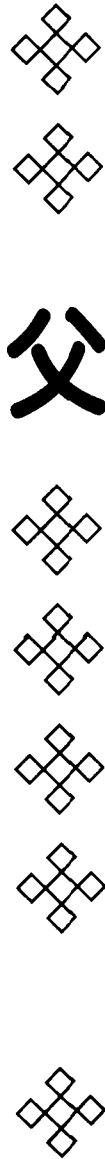
服部先生は考えた。こんなことでは、島外の競争社会にもまれて、生き抜くことは難しい。島に残って、斜陽の漁業を建て直すことはさらに難しい。現実を知

り、それに切り込む学習と、将来への具体的展望を持たせる進路指導が必要だ。

熱意に満ちた教育実践によって、泳ぎがへたなため県の水泳大会にも出られなかった島の子供たちが、しだいに故郷の歴史や未来に興味を示しはじめ、愛島運動を実践し、将来の職業を定めて勉強にはげむようになっていく。

子供の意欲を引き出すには、現実に触れさせること、働かせること、行動させることなのだ。机上のテスト勉強ではない。親たちにその方法をさし示してくれる本である。

農山漁村文化協会 二六〇〇円



## 父帰る

岐阜県可児市

鶴留 百合(40歳)

### 父をたずねて

師走に入ってまもない日、姉・私・妹の三姉妹は病院の案内窓口にあった。

「Hという人が入院しているはずですが」「胃がんなのですが、手術前か手術後かは聞いておりません」「外科・内科どちらかは分かりません」問答を繰り返したが、「該当者は見当たりません」

初めて訪れた隣県の某大病院。その規模の大きさに圧倒されながらも、決心して来たのだから、なんとか捜し出そう

と、二階から四階まで、本館・別棟各病室の名札を手分けして見回った。

三十数年前、両親と妻、幼い四人の子供を残して家を出た父が、この病院のどこかに入院しているのだ。

父が家を出た当時、私は四歳、兄八歳、姉六歳、妹二歳。母は三時間に及ぶ手術の直後で入院中の状況下。後年、そのことを知ったときは絶望のふちへ落とされたが、周囲の目が届かないその時がチャンスだったのだろう。それほど、家を出なかったらしい。

父が戦争で出征中に、祖父母は嫁を迎えた。多少の財産があり、世間知らずの嫁ならと当時では当然のように一方的に決めた。インテリの父が終戦後帰還して、どう対応したかは知る由もないが、二年後から二年ごとに四人の子を成したとこ





ろを見ると、最初は普通の夫婦だったと想像するのは身勝手であろうか。

跡継ぎの重要な地位を占める父が、肉親を裏切り全ての財産を放棄した理由は、言わずと知れた女性関係である。それまでも何度か家出を繰り返していたが、その都度捜し出され、連れ戻されている。それが最後の家出となったのは、居所を確認できなかったのか、それともあき

めたのか、以後、籍はあっても父親不在の家庭となった。

大勢の家族に囲まれて、寂しさを感じた記憶はあまりない。農繁期には家族総出で田に働き、朝の掃除と夕食の準備は姉と私の役目。野菜の煮物とお吸い物はかなりの食卓だった。広い屋敷回りを草一本残さないように取るのは大仕事だった。が、今もその習慣からきれいい好きになっ

たのは、祖母が厳しかったおかげだと感謝している。

兄は小学五年から耕運機を扱い、一人前の働き手となった。それでも秋の取り入れ時には、数件先へ養子に行っている叔父の助けを借りねばならず、このことで母は随分肩身の狭い思いをした。私はまったく記憶がないが、姉は母が夜、庭続きにある畑で肩を震わせている後姿を何度も見たという。夫のいない家で舅姑に仕え、世間の好奇の目にさらされるのは、お嬢様育ちの母にとってどれほどつらかっただろう、と気の毒になる。母の父親が「帰って来なさい」と迎えに来たが、祖母の「子供たちを全員、置いていけ」の言葉に耐える決心をした、という。三十数年間、まったく会わなかったわけではない。小学生のとき、墓参に来た日、そして祖母の葬式のときの二回、父と顔を合わせている。この数年、兄は時々連絡を取り合っていたらしい。実際、父の病状が悪化したのを知らせたのは、共に家を捨て今も一緒に住んでいる女性からだ。



「五歳から離れて暮らしている私は、父親というものがどういう存在なのか分からない。会いたいと思わないし、むしろ世間に対して肩身の狭い思いを強いられ憎悪していた。二歳年下の妹は違っていた。父に対してあこがれと、恋しさとを抱いている。自分には思い出が何も残っていないくて悲しい、と。姉は父親から随分かわいがられ、いつ会いに行ってもすぐ受け入れてもらえると単純に信じていた。姉と妹は、私が病院へ同行するのを心配したという。父娘だから会いたいのではない、私に人間として生を与えた人の最期をこの目で確かめたい、そう思うて同意したのである。」

## 戸籍上は夫婦

病室という病室を手分けして捜したが、「H」は見つからなかった。三人で協議した。叔父も兄も来ているのだから、この病院に間違いはない。案内でたずねれば簡単に分かると思って詳しく聞いて来なかったのは手落ちだった。それにしてもこれだけ捜してもないのはなぜ？

人が突然叫んだ。「S姓じゃないの？」家を出て以来偽名を通しているが、入院し、正規の書類には戸籍上の名が必要なのは。別居後四半世紀をゆうに過ぎてなお、父と母は夫婦なのだ。

広い病院内を再び見て回った。

「あつた／＼」私たちの旧姓が。父の本名が。頭をハンマーで叩かれたほどの衝撃だった。現実には目の前へ現れると動悸が高まった。そっと入ろうとして、看護婦さんに「処置中です」と止められた。しばらくは待合室で待ったが、昼食をとっていないのに気づいた。一階の食堂で歩いていないおなかに食物を詰め込み、誰からともなくため息をついた。

気負っていた気分をそがれた格好で、重い腰を上げて病室へと向かった。幸い（というべきだろう）、付き添いの人は不在だった。元来小柄な体が一層小さくなり、ベッドにうずまりそうにしてその人は眠っていた。が人の気配を感じてか、目を覚ました。まくら元に立っている見知らぬ三人の女性をげげんそうにながめている。祖母の葬儀で会ったとはいえ、

慌ただしい中でどのような会話を交わしたか、記憶が定かでない。事実上、三十三数年ぶりの再会である。

「夕紀枝です」「百合です」「三子です。」一瞬、大きく見開かれた目が長いため息とともに閉じ、動かなくなった。そのまま息を引き取ってしまったのでは？と危惧する静寂が訪れた。

やがて目をあげ、ポツリポツリと話始めた。孫のことを聞きたがり、男、女それぞれ二人ずついる子供の様子を話すと、記憶に刻み込むかのように聞き入っている。家を出た時七歳だった長女が、高校生の子供を持つ親となっている。過去に何度も後悔したことがあるだろうが、おそろく、このときが最も強く後悔したに違いない。

老女性が入ってきた。私たちを見てハツとしたが、すぐに察したのだらう、いすをすすめてくれた。母より年上だが若々しく、そう明と判断した。疲れて眠りに入った病人の傍らで語り始めた。二人で何度も家を飛び出したが、その都度捜し出され連れ戻されたこと、生木を裂くよ

うに引き離されたときのつらかった気持ち、「女が我が子を捨ててまで一緒にいたかった男」「両家があきらめたのか、連れ戻しに来なくなったときから苦悩が始まった」「何度、二人で死のうとしたか」「残して来たお互いの子供のために、二人の間には絶対子供を作らない」「憎んでも憎み切れないこの私の話を聞いてくれるなんて」「こないない娘さんに育ってくれた……」と床に頭をついて上げようとしなない。三人とも一緒に泣いてしまった。後で考えると、なんてお人よしだったかと自嘲したが。

## 不快感に襲われた葬式

数日後、一人で病院へ行った。今、聞いているおかげで、との思いに駆られて足が向いたのだが、薬の作用で眠っており、女性と少し話した。インテリだったこと、病弱で心配させられたことなどを聞いたが得るものはなく、姉、妹に抜け駆けした後ろめたさのみが残った。

二月の底冷えのする日曜夕方、息を引き取ったと兄から連絡が入った。「行

く必要ない」とも。その日は兄、母のほかに叔父、伯母（父の姉弟）が見舞いに出向き、全員の顔を見届けるとわびるようにして永遠の眠りに入ったという。帰宅した夫にその旨伝え、「何言ってる！ 親じゃないか。すぐに出かける」既に外は闇。初めての道路は勝手がわからないうえ、あちこちが工事のため、通行止めとなっている。訪ねようにも人通りがない。地図を広げながらようやくたどり着いたら三時間以上たっていた。（前回は公共の交通機関を利用していた）。病室は片づけられガラーンとしている。

ナースステーションで問うと遺体は地下の霊安室に、入室は不許可。遺族は自宅へ帰ったとの由。最初に病室を訪れたとき、女性から聞かされたのだが、父と女性には死後献体の登録をしている。親族に迷惑をかけた最後の償いとして「不老玄」という団体に属し、地下で眠る父は医学生の実験台になる日を待っているのだ。「もう帰る」と言う私を制して夫は遺族の連絡先を聞き、電話を入れた。女性が、是非来てほしいという。二人がどんな家

想像して下さい！  
30年後の日本を！

団塊の世代が高齢者になる頃  
年金は？ 国保は？ 人手は？？？

今、うてる手はうっておきたい——**独立介護費用保険**です。

火災・自動車・海外旅行など 損害保険のことは

■ くわしくは「わいふ」まで  
電話で資料請求して下さい

東京海上火災保険株式会社

杉本保険事務所 杉本侑子 ☎03-3260-4771

でどのように暮らしていたかを知りたい気持ちも手伝って行ってみた。小さめの家がぎっしりと並ぶ一角に「S」と「O」、二つの表札が掲げてある。近所にも大まかな事情は話してあるらしい。何年前かに女性の夫は他界し、以後兄妹や子供との交流を再開している。その親族が一同に会して雑談していた。私より少し年上ぐらいだろうか、一人の女性が「おじさんは、おじさんは」としきりに話している。その「おじさん」が誰をさすのか察すると、形容し難い不快感に陥った。葬儀の日取りが決まったら知らせってもらう旨、依頼して辞した。

翌日の夜、葬儀の日程を連絡して来た。兄に電話をすると、行かないと言う。遺骨を引き取れなどと言われたら困るからかわりたくない、お前たちも行くな、と。夫は行くべきだと主張した。姉は迷った末、兄の意見に従い、妹は連れて行って、と訴えた。

時折小雪の舞う中、三人を乗せた車は目的地へと向かった。先夜の雰囲気がよくみえり、足取りは重かった。近くのお寺で形だけの葬儀を予定しており、家の周辺はひっそりと静まり返っている。家人に迎えられて入るとまるで団らんのかやかさだ。またしても不快感に襲われた。

十数名が車に分乗してお寺へと向かった。寒いお堂でしばらく待たされると、病院関係者が小さな箱に納まった遺髪を抱いて現われ、読経が始まった。これまでに十数回、参列したどの葬儀より簡素であっけなかった。少しだけしんみりとしたが、涙せんの緩い私でさえ涙はわかないままに終わった。

病院関係者から、「質問は？」と問われたが、女性側からは何も発言はない。説明を聞き尽くしているのか、また談笑が始まった。

## 相続放棄をせまられる

一人が立ち上がったのをしおに、全員が帰る準備を始めた。駐車場で挨拶をする、「お茶でも飲んで休んでください」「いえ、ここで失礼します」「実は大事な話があるので是非入ってください」それでも帰ろうとすると半ば力ずくで室内へ入れられた。

まずは女性から今日のお礼を言われ（そんな筋合いはないのだが）、二人が住居を構えるまでの経緯を長々と話し始め



た。その時には、「大事な用件」がなんであるか察しがつき、座を立とうとした。しかし話は続いていった。自分も「不老長」に登録しており、故人と同じ道を歩むこと、近い将来、家を処分して老人ホームに入る、そのための費用が必要であること、死亡届を提出後、故人の定期預金を解約しようとしたら受け付けてもらえなかったこと、これらは二人で築き上げたものだから、そちらは財産放棄をしてほしい。お涙ちようだいの箇所あり、格幅のよい初老の男性の後押しありで力説は終わった。

「ここへ来た者の一存で返答はできない」と答えると、「それではお兄さんに渡してほしい」「そんな書類を持ち帰るとしかられるから」と再三断わったが、多勢に無勢押しつけられてしまった。

予想通り、兄は「だから行くなと言ったのに」と不機嫌だった。騒ぎに巻き込まれたくないからすぐ手続きを取る、皆も従うように、と。兄の心境は理解できる。でも納得できないからしばらく時間をほしい。少し調べてみる。

小じんまりした家といっても、都心に近く、土地つき家屋である。子供のいない二人が働き続ければほかに財産もあるだろう。老人ホームへ入居する資産としては高額すぎる。女性の死後、それらは子供名義になるに相違ない。彼女たちはかなり以前から交流をもっているのに反して、私たちは何も無い。卒業時、結婚、出産の際「おめでとう」のひと言もない。あまりに不公平ではないか。

最も犠牲を強いられたのは母である。親類から「お前の責任だ」とばかりに針のムシロに座らされ、味方となる人が誰もいない婚家で仕えてきた。同居の事実がないが故に、夫の死後遺族年金も支給されない。それなのに臨終後、「長い間お世話になりました」と女性に頭を下げたというのだ。やり場の無い怒りで、打つ手はないものかと弁護士に相談したり調べたりした。その間、兄のもとへは書類を早く送るよう何度も催促の電話が入っている。「会社を休んで役所へ行くのなら日当は払う」などと異次元の、小バカにした言葉さえ発している。



私がゴネていると近所に住む叔父（父の弟）の知るところとなり、母を介して即座に手続きを終わるよう、伝えてきた。私自身、精神的に疲れて投げやりになっていた。そこへ、脳しゅようで入院していた夫の母が、一カ月経ずして急性心不全で、さらに夫の兄も相次いで亡くなり郷里の九州へ往復する慌ただしさとなっ

た。姉や妹も、つき破れない、世間の壁に負けた格好で不本意ながら押印した。

女性から、「お手数をかけました」と、いかにも弾んだ声で電話が入ったが、耳を覆って早々に受話器を置いた。

内縁関係といっても父には正妻があり、子供も健在である。遺留分がどう扱われたか、法律に暗い私は時として頭をよぎる。しかし、人間関係のむごさをいやというほど見せつけられて、全てを闇に葬り去りたくなった。

世間並みの結婚をし、まずは平穏な家庭生活を営んでいる子供たちに、死して父は背負い切れない重荷を残した。

## 人はすべて死す

埼玉県久喜市

藤田 和子

父の死は、結婚以来初めて私を襲った、最大の不幸であった。

郷土を愛し、家族を愛し、いつも前向きに生きていた父。そのような父に、もう一度この世に戻ってきてほしいと願う

のは、三十女のことではないと、世間の人は笑うだろうか。

## 昭和五十三年九月

なにげなく電話した徳之島の実家に、父はいなかった。不審に思っただけで尋ねる私に、母は口ごもりながら、「目の調子が悪いので、鹿児島に精密検査を受けに行っている」と答えた。子供たちに心配をかけてはいけないということで、父に口止めされていたらしい。

後に、母を苦しみのどん底に落とし入れ、父を死へ追いやった病の、そもそも徴候はほんの小さなことだった。

父の書いた封筒のあて名の文字が、一列にキチンと書かれていないということ。一文字、一文字がバラバラの位置に書かれ、しかも、父の目には、それが正常に映っていたらしく、「どこかおかしく見える？」と、逆に母の目を疑ったらしい。異常を感じた母が、せきたてるようにして父を鹿児島島の病院にやったということだった。

「でも、病院でも、ストレスによるもの

だろうと言っているようだから心配することはないよ。このことは、父ちゃんには内緒だよ」

しかし、その後の父は、母のその言葉通りにはならなかった。まるで、坂を転がるマリのように、父の症状は悪化していった。電話をした一週間後には、ニメートル先も見づらいいというほどの視力低下だった。

その後の長い恐ろしい病院生活に比べれば、目が見えなくなることなど、ほんの小さなことだった。しかし、そのときの私たちにとっては、父の目が見えなくなることとは、大変なショックだった。

## 昭和五十三年十月十日

幼稚園を休むのを嫌がる息子を説得して、母子三人で鹿児島へ行った。

久しぶりに合う父は、いくらか白髪が増えたものの、以前からのこやかさは失っていなかった。父は、子供たちを抱き寄せると、同室の患者さんに、「この子は十一月三日生まれで、明治天皇と同じ日に、こっちの子は四月二十九日の天



皇誕生日に生まれたんですよ」と、誇らしげに話した。

思えば、この笑顔が、父の最後の笑顔であった。父の視力は、日に日に衰えていった。それなのに原因がまったく分からない。

「ストレスでしょう。目にはまったく異

常ありませんよ」

「血圧によるものではないのか？」

「肝臓からも目にくることがありますよ」

そんなことを言われ、検査であちこち回されているうちに、父の目はまったく見えなくなってしまう。昨日までは見えていた物が、今朝目覚めたら見えなくなっていた。そのときの父の心境はいかばかりであつたらうか。

職場の大きな行事を控え、早く治らなければとあせる心。その一方、目がどんな見えなくなってしまう事実とその不安。父の心も次第に乱れていったようだ。あの穏やかな父が、ときには母に当たりちらすこともあつたらしい。

大学病院で、眼科、内科、脳外科と回され、父の落ち着いた病棟は、「第三内科」という最も重症患者の病棟だった。「分からナイ・治らナイ・それでも諦めナイ」三つのナイ、それが第三内科の別名だった。ここに移ってから、父と病魔、母と看病の闘いが始まった。

しかし、私は今振り返って、父の闘病期間中を苦しみの期間とは書きたくない。

いうなら、父と母の愛の期間、家族のきずなの再認識の期間だったと思いたい。事実、父の闘病期間中、私は、三人の弟たちをほんとうに立派な大人になったと思うことが何度もあった。今までは、父の息子でしかなかった弟たちが、それぞれ一人の男として成長していく姿には、目を見張るものがあった。母を支えて冷静に父を見つめる点など、女にはない頼もしさだった。母の献身的な看病は誠に筆舌に尽くし難い。

この期間、父は我が身に病苦を引き受けてまでも、私たちに「愛」というもの、「家族のきずな」というものを教えてくれたのだと思いたい。

鹿児島大学付属病院第三内科に移って間もないころ、自分の病気がただならぬものであることを予感した父は、母に、「僕の体を医療のために役立てて欲しい」と話していた。

そして、大阪に住む弟と私のもとは、遺言めいた電話をかけてきた。

「子供たちをガミガミしかつたりせず、ノビノビと立派に育てるんだぞ」

「何を馬鹿なことを言ってるのよ、父ちゃん。死ぬわけでもあるまいし……」

私も弟も、わざととりあわなかった。

病気のことで、ましてや父が死ぬことなど考えたくない娘。それをいやが応でも認めざるを得ない、病人である父。よほど考えた末の言葉であつたろう。お互いを思い合えばこそその言葉であつたが、私の冷たいあしらいに、父は「子供は、僕の心など分かってくれない」と泣いたらしい。そして、そのときの、その言葉が、私の聞いた最後の声となった。

人間とはなんともろいものだろう。五十八年間生きてきた大の男が、病の前では三カ月にして廃人同様になってしまうのである。病魔の前には、社会的価値、

老若男女、貧富の差などまったくなく、一個の肉体でしかない。

昭和五十三年十月三十日

再び訪れた鹿大病院のベッドに、父は自分の意志のまったくない人間となつて横たわっていた。傍らに立つ妻や娘さえ認識できない状態だつた。医師の話では、脳しゅうもなく、血栓、かいようななどもなく、原因がつかめないということだつた。過去の記録に、七人ほど同じ症状の人がいるが、いずれも原因がつかめないまま六カ月くらいで死亡しているということだった。手の病氣なら手を、胃の病氣なら胃だけを治療すればよい。しかし、脳となると、全体を支配している器官だ

けに、病めば正常な各器官までも異常にしてみよう。脳の命令によつて動く器官は、すべてストップしてしまつた。

私たち家族は、まさに幸福の絶頂から谷底に突き落とされたという心境だつた。怒り・絶望感・悔しさ・叫び・情けなさを……。どの言葉をもつてしても、そのときの私たち家族の心を表わすことはできない。

昭和五十三年十二月

父の病氣は悪くなる一方だつた。街にはジングルベルが流れ、クリスマス、お正月と忙しい時期にきていた。子供たちのために頑張らなければならない。それなのに、私は何をする気にもなれず、

## 自然食通信 52

隔月刊／定価五七〇円（本体五五〇円）  
四月上旬発売

### 始めませんか「自然食・エコロジカルスペース」

自然や人と共感しあえる暮らしを求める気運が強まるにつれ、より自然な素材を扱う八百屋、レストラン、リサイクルショップなどなど、地域に根づいたお店への期待が高まっている。単にモノの流れるパイプを大きくするというのでなく、人—自然—人のコミュニケーションの場として生き生きとした機能が發揮できるスペース性をも高めていくためにどんな工夫が必要か。各地から重分けな人たちの知恵を集めて特集。

映画を見た方も、まだ見てない方も、

お待ちせしました。

写真集 堀原日出夫

せんせい

はー

宙に舞った

宮澤賢治の教え子たち

四月下旬  
発売

定価2266円  
（本体2200円）

自然食通信社

東京都文京区本郷2-20-8 ☎03-3816-3857 振替・東京5-78026

寒々とした部屋でジーンとしていた日が続いた。私の体重は、三キロ以上も減ってしまった。

母は今ごろどうしているだろう。病人の父はともかく、付きっきりで看病している母の体が気になってならない。まともな食事はしているだろうか。父の状態によつては、一日中何も食べないで過ごすこともあるらしい。カップメンや菓子パンだけで一日を過ごすこともあるらしい。

一年半の闘病期間中、私は七回鹿児島を訪れた。そのたびに母が一番喜んだのは、私の持参したキューリの一夜漬けや、ホウレン草のおひたしなどだった。

「病院にいと、新鮮な緑の物が食べたくてねえ」、そんな母を思い、父の哀れさと思うと、すぐに飛んで行って代わってあげたい。だが、私には二歳の娘と五歳の息子がいる。この子たちを連れて看病に行くことはできない。だからといって、主人に仕事を休んでもらって子供をみてもらうことも、そう長いことはできない。



私は、このときほど、遠くに嫁いだ自分を悔やんだことはない。同じ徳之島に嫁いでいたのなら、どのような手段をとっても、父に付き添っていられただろう。たまには母をタタミの上でゆっくり休ませてあげることもできたであろう。それなのに、こんな遠くに嫁いだばかりに、父や母の苦しみを見ながら悶々とするばかり。何の助けもできない自分を、とてもうらめしく思った。食事を作っている、私ばかりこんなおいしい物を食べていいのだろうか。母が生命をかけて父に付き添っているというのに……

私は主人と子供に囲まれてヌクヌクと暮らしている……」

と罪悪感さえ覚えた。ある日は、母と同じように食事を極力とらずにすごしたこともあった。せめてもの償いのつもりで……。

ある人は、「これは神様のちよっとしたイタズラですよ」と言った。

父や母や私たち兄弟がこんなに苦しむようなイタズラを、神様という方はなさるのだろうか。

### 「神」を求めて

宗教を持たない私たちにとっては、神とはすなわちご先祖様である。つまり、神とは亡くなった祖父や祖母、その人である。あんなに父や私たちをかわいがってくれた祖父や祖母が、このようなイタズラで私たちを苦しめるはずがない。子や孫が苦しむのを見ると、我が身を犠牲にしても、それを防いでくれるのが親心ではないだろうか。事実、じいちゃんもばあちゃんもそのような愛深い人だった。でも、現実には、父は原因の分からない



い、手の施しようのない病気で苦しんでいる。何もかも分からないづくめで病氣になつてしまった。それなら、人間の力の及ばない何らかの力で父の病が治るということはないものだろうか。

何人もの超能力者といわれる人を訪れ、言われるままにおはらいを受け、祈願した。そして、おぼれる者の心境で、ある宗教の勉強会に参加した。そこでは「肉体はない。あるのは永遠に生き続ける生命です」と聞かされた。でも、私は、そのような絵空事など聞きたくなかった。なんであれ、とにかく父の病氣が治る方法を教えてほしかった。

「『この世は全て善だ』と言われましたね。それなら、なぜ善なる人が苦しまなければならぬのですか」

■ 父  
「笑う練習をするのですか？ バカバカしい。いい加減にしてください。両親のことを考えただけでも涙が出てくるというときに、どうして私が笑えるのですか？」  
「早く。父の病氣を治す方法を早く教えてください。私には、ゆっくり話を聞いている時間などないのです」

勉強会の中で、私はそのような憤りを感じた。

どうにかして父の病氣を治したいと焦る私の心には、宗教も病氣治療の一つの手段でしかなかった。宗教の真髄を学びとるよりも、父を治す方法を知ることのほうが大切だった。この本を読みなさいと言われれば、家事をほうってでも読みつけた。それを読みみると父が治るよ



うな気がしたから……。お経をあげなさいと言われれば、あつと言う間に千巻を讀じゅした。その裏には、母に遊んでもらえず寂しい思いをしている娘がいることに気が付かず……。とにかく、これをすれば父は治る。父の病氣を治すため

にこれをしよう。

愚かにも、私は形のうえだけのとらえ方しかできなかった。千巻のお経をあげても、御利益だけを目的としたものなら、それはただのウワゴトにすぎない。たった一卷のお経でも、よく理解し、自分の生活を正していくなら、何にもまさる心の指針となるだろう。残念ながら、そのようなことが分かるようになったのは、父を失って心の落ち着きを取り戻したころのことだった。

同じころ、母もまた、私と同じ方向に心の支えを求めていた。それまでは、私と同様に、「あそこの観音様が御利益がある」と聞けば、出かけて行って願をかけ、「この祈禱師がエライ」と聞けば、おはらいをお願いしたりしていた。事実、ある教会には、毎月多額のお金を送ってお経をあげてもらっていた。しかし、ここに至っては、もう他人任せにはしていられないというのが母の心境だった。月に一回の勉強会には、必ず参加するようになった。そして、暇を見付けては、聞くはずのない父に、有り難い本を読み



聞かせていた。

形ばかりの私と違って、母は宗教から確実に大きなものを得て、心の安らぎを取り戻していった。病気にむしばまれ、日ごとに自分を失っていく父を見てきた母には、居直りの強さがあった。どん底の苦しみの後には、ただはい上がるしかなかった。宗教を得てからは特に、何に對しても感謝の心ばかりで、自分の不幸を嘆くことは決してなかった。

「若い先生や看護婦さんが神様のように見える」、といつも手を合わせる母に、医者や看護婦もまた、「お母さん、お母

さん」と、親切に接してくださった。

「お母さん、今日は顔色が悪いね、むこうで休んでいて……」

「お母さん、だんなさんのためにも頑張ろうね」

看護婦さんのそのような励ましは、遠くに住む娘など、とうていかなわぬものであった。

父を失って七年経た今でも、鹿児島大学付属病院第三内科の、当時の医師や看護婦さんたちには、感謝の念で一杯である。

すでに自分を捨て、夫の身のみを思う

母、その母の姿は、やつれはて哀れでありながらも、内からの神々しさを放っているようだった。いつも父の立場にたって物を考えている母の心は、いろいろな日用品のアイディアをも生み出した。

「お父さんに意識があったのなら、自分のオシッコを他人様に見せるなんて、とても耐えられないことでしょう」

母は、父の尿袋にレースのカーテンを掛け、赤いかわいいうりボンを飾った。

「清拭や検温のたびに、お父さんが窮屈そうに顔をしかめるから……」

寝間着のそでや身八ツ口には、マジックテープの工夫がこらされた。これはど母が真心を尽くしているというのに、父は治れないのだろうか。

少しでもよいしらせを待っているというのに、私に届くしらせは、心のふさがるものばかりだった。

どうしよう。どうしよう。

電話で父の様子を聞くたびに心は暗く沈んでいった。

昭和五十五年二月

もう耐えられない。あれを考えたり、これにすがったり、自分の心を失わないよう一生懸命律してきたつもりだけど、両親の苦しみをこれ以上見ていることはできない。この苦しみから両親や弟たちを救うには、私の生命を捧げて、父を元に戻してもらわなければならない。

私の精神状態は極限に達していた。もちろんそれまでも、「もし、私が死んで父が助かるなら、私なんかいつ死んでもいい」と考えないわけではなかった。でもそれは、あくまでも現実には起こりうるのではないことだ、という意識があればこそのもので、その直後には、いつも「なんて馬鹿なことを言ってるんだらう。私には大事な子供たちがいるというのに……」と打ち消していた。

しかし、その晩ばかりは違っていた。「神様、どうか私を死なせてください。この瞬間、私の生命を召し上げて、それを父に与えてください。神様、どうぞお願いします」

私は真剣に祈った。父と母が元の幸福な生活に戻るのなら、私は死ぬことな

ど少しも怖くないと、断じて言えた。この先ずっと、両親の苦しみを見ていることのほうが怖かった。眠っている子供を代わるがわる抱き上げ、  
「お母さんが死んでも、おじいちゃんとおばあちゃんが育ててくれるから。泣かないでね」

「よい子に育ってね。お母さんは、おじいちゃんと入れ替わりに喜んで死ぬのよ、いつもお前たちを見守っているから安心



してね」

これまでの私の人生で、死ぬことは怖くないと思ったのは、このときだけだ。おそらくこれから先も、このように真剣に思うことはないだろう。

手を合わせると父の顔が浮かんだ。二人の子供と楽しそうに遊ぶ父の姿が見えた。あの父を生かして欲しい。そのためなら、私は今ここで死んでもかまいません。神様、どうぞ私を死なせてください。

それでも神様は、私の生命を召し上げてはくたさらなかった。そして両親を苦しみから解放することもなさらず、私たちの試練は続いた。

鹿児島に住む一番下の弟は、父の看病のため、今年もまた、大学を留年することとなった。大阪に住む弟は、今年も家族と離れ、鹿児島の病院で正月を迎えることとなった。

昭和五十五年三月八日

子供たちを主人に頼んで、一人鹿児島へたつ。これで六回目である。

鹿児島大学付属病院第三内科九二七号

室。病室に母はいなかった。父がウツロな目を開けてこっちを見ている。目は確かに私を見ているようだが、自分の娘だと認識できない父が哀れでならない。

洗濯物の取り込みにでも行っているのかと思った母が、いつまでも帰って来ない。不審に思っ看護婦さんにたずねると、「体の具合が悪くて、家族控室で休んでいる」とのこと。長い長い、暗い廊下。ときおり流れる消毒液のにおい。

家族控室は、エレベーターの角を曲がった所にあった。何の飾り気もない、寒々とした八畳ほどの部屋。そこに私は恐ろしい光景を見た。体中がガタガタ崩れていくようだった。私の体は、動くことすらできなくなってしまった。

母は、座布団二枚を敷いて寝ていた。熱があるらしく、額にぬれタオルを置いてある。暖かい布団も、看病してくれる人もなく、一人寂しく横たわる母。疲れた体にムチ打ちながら、自分でタオルを絞り、額を冷していたのだろうか。

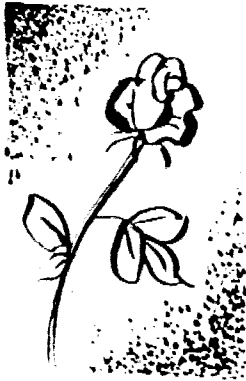
入り口に娘が立っても気付かないほど疲れきっている母を見ているうち、止め

どもない涙が私のホホをぬらした。

自分の体をここまで追いつめて、愚痴一つこぼさず父につくしている母。すでに、自分の体など捨て切っている気丈な母。普通の病人への付き添いさえ大変なことなのに、母は意識のまったくない父に付き添って一年半にもなる。その母の限界もこれまでだ。これ以上この状態が続いたら、それこそ、私たち姉弟は母をも失ってしまう。

言いようのない戦りつが私を襲った。体の震えは止まらない。

私は再び父の病室へ駆け戻った。



父は相変わらず空を見つめたまま。一年半前までは、人生の晴れ舞台にいた父。何より哀れなのは、この父なのだ。何としてでも治って欲しい。そのために

は、私の生命さえ惜しくはないと真剣に思った夜もある。だが、私の口をついて出た言葉は、それとは裏腹なものだった。「父ちゃんご苦労様でしたね。何の苦しみもなく、今日まで母ちゃんの手厚い看病を受けられてよかったね。父ちゃんも十分満足したでしょう。これからは、ご先祖様と楽しく暮してね」

「父ちゃん、お願いだから、私たちから母ちゃんを取り上げないでね。母ちゃんを連れて行かないでね」

もう、父の生命を惜しいとは思わなかった。母や弟たちが、それぞれの立ち場で精一杯頑張ってここまで持ちこたえてきた。

医者に、「この状態で一年以上も生きられるなんてほんとうに奇跡ですよ」と言われるほど、父は床ズレひとつなかった。母の献身的看病のたまものだ。しかし、それもこれももうここまでだ。このうちは、父の魂が天国に行きたがっているのなら無理に引き止めるのはよそう。「ご苦労様でした」と快く見送ってあげよう。父の生きた五十九年という年月は

他人より短いかもしれない。しかし、中身はほかの人の八十年にも匹敵すると思う。

「お父さん、さようなら。あとは心配なく……」

恐ろしいことかもしれない。最大の親不孝娘かもしれない。私は、昨日までとは違った祈りを、目の前の、まだ呼吸をしている父に捧げた。

父の顔は穏やかだった。聞くはずもないのに、母が一生懸命に有り難い本を読んで聞かせていた父の魂は、それらを全て吸収しているかのようにだった。

「このようなむごい姿になって、何とも哀れな……」と思うのは、もしかしたら私たちの間違いで、父は生きながらにして、すでに天国にいるのかも知れない。

## 昭和五十五年四月二十四日

この日父はあの世へ旅立った。

人は死ぬ。自分の意志を持たないかのように見える、野の草花や虫たちでさえ、季節がすぎれば土に戻る。父は一体どこに戻るのだろうか。絶えることのない生

命が欲しいと思う。生きて、生きて、生き抜いて、全てに心広く受け入れられるようになったとき、私は、「有り難う」と言って、合掌しながら死にたい。

父の死後、母は「母子世帯相談員」という職を授かり、県の福祉事務所に勤めることとなった。これまでの編み物教師とはまったく違う世界なのだが、母は、「これもお父さんのご導き」、と仕事に打ち込んでいる。あれほどの苦勞を耐えてきた母だ。娘の私などが案ずる段ではない。母は人生を精一杯歩んでいる。

父の死を冷静に見詰められるようになった今、母は言う。

「お父さんがあんなに恐ろしい病氣になったとき、私は、自分のことを世の中で一番不幸な氣の毒な女だと思ったよ。だけど、未だに、テレビもない、貧しい生活をしている人たちがいるのよ。私はお父さんのお陰で、子供たちもそれなりの教育を受けさせ、それぞれの配偶者や孫にも恵まれ、なに一つ心配なく暮らしている。

だけど、ご主人を失い、小さい子供を

抱えて頑張っているお母さんもいるのよ。重度の身障者を抱えて頑張っている家庭もあるのよ。そんな人に比べると私は、本当に幸福だったよ。今まで気が付かなかったけれど……。有り難いよ、本当に。お父さんにも子供たちにも恵まれていたからね。

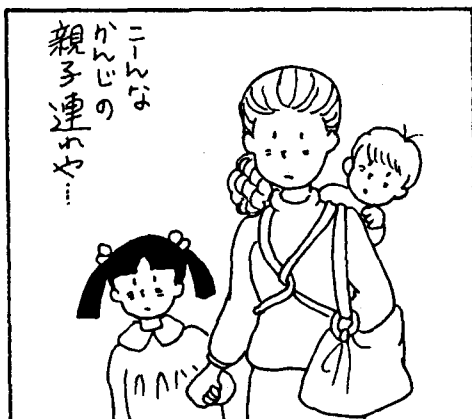
だけど、人間の幸福なんて分からないものだね。幸福の絶頂にいた人が、たった一つの出来事で不幸のどん底におとされたかと思うと、不幸に負けず頑張りながら、じいっと時のすぎるのを待っていれば、そのあとには必ずよいことがあるし……。いつまでも同じ状態は続かないからね。順番だよ。よいこともあれば、悪いこともあるわよ。幸福なんてものものだからね。うらやましがるとはいいものではないような気がするよ。家族が仲よく、元気に暮らしているというだけでも十分に幸福なんだよ。きつと……」

父の身をもって教えてくれた、ほんとうの幸福、真の家族、心のきずな、それらを大切に生きることこそ、父への最大の供養だと思う。

(元・山田京子)

# 痛快! 一解人

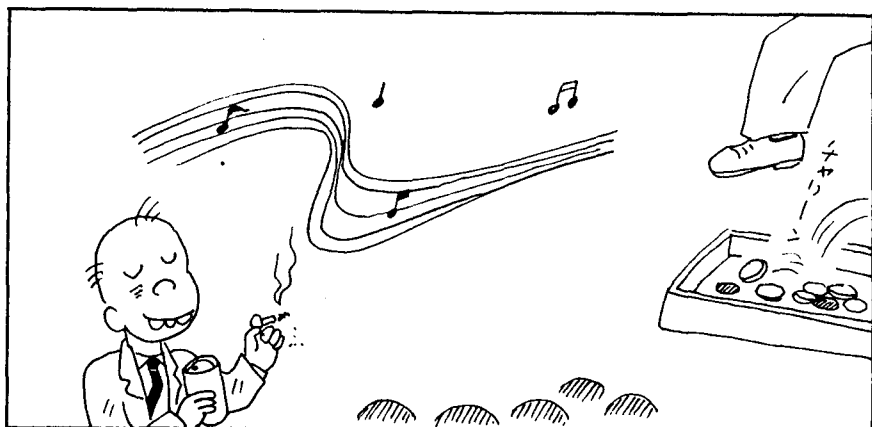
栗田 <sup>み</sup> <sup>しん</sup> 矢











# 私の愛する外国人

## メイド・イン・ジャパンの私

「二十歳を過ぎたらあとは坂道を転がるようなもの」、目じりにうっすらとしわを浮かべた先輩が語るのを、半分あざけるがごとく不真面目に聞いた私は遠く過ぎ去り、来週の木曜日が三十歳の誕生日とあいなつた。年末年始、三年ぶりに帰国した東京で友人たちと語り合いつつ、ふと気がつけば、物心ついてこのかた日本人のボーイフレンドのいたためない。

大学四年のとき中国へ二年留学、そこで知りあったカナダ人と日本で結婚式をあげ、トロントに来てから、すでに四年がたった。その間、本人たちを含めた誰からも永続を期待されなかった結婚生活は三年半で終わりをづけ、ほぼ五年ぶりに「シングル・シール」に振り返りたいきさつもある。

そもそも「外人好き」だったわけでもない私が、どうしてカナダ人と結婚するようになめになったのか。まずは、そのあたりからご説明したい。

## 新井 ひふみ

子供時代の苦い肥満児体験をひとまずおくとすれば、成人に達したころの私は、外見적으로는ほぼ十人並みの娘だった。早稲田の政経学部でのクラスメートは全員が男性だったから、人並みに見かけに気を配り、資生堂チェーンで当時大枚二万円をはたいて手に入れた化粧品セットをドレッサーに並べて、「使用後」の姿のみを世間にさらしていた時期もある。

回りに男はたくさんいた。高校や大学の友人、毎週三回夜に通った中国語学校の同級生、しばしば酔っ払ってくだを巻いた神



田神保町の飲み屋の常連。そのうちキャンパス雑誌を始めてからは、いつもしわのよった背広を着ているマスコミ男の知り合いも増え、バイト先で出会ったサラリーマンか

ら夕飯の誘いを受けることもしょっちゅうあった。けれども、そうした男たちの中で、私と「真面目におつき合い」したがる人間は皆無だった。

大学の同級生は、東女や本女の子とテニスサークルで知り合い、日曜日にお弁当を作ってもらうようなデートをしていたし、ちよつと年上の先輩は「恋人にするならいいかもしれないけど、結婚相手には考えられない」と、そのころの私には結構ショックに響く言葉を吐いた。

人生の先達者の振りをしたがるサラリーマンは「君が男だったら、いろんなことができたのに」と、いろんなことができなかった自分の人生を棚にあげ、酒と仕事でよれよれになった新聞記者は「昔の彼女と同じ髪型なんだね」と、私を酒の肴にするのだった。

簡単にいうとそのころの私は、「面白いけど、そら恐ろしい」寺山修司の映画のような存在だったのかもしれない。自分でもそんなイメージを楽しんでいなかったといえはうそだが、心の底に暗い谷間をのぞくがごとき気分も確かにあった。フェミニストであり、当時の言葉を使えば「キャリア志向」であり、周囲の女子学生からは「私はあなたのように強くない」と羨望ともさげすみともつかない言葉を浴びせられなが

らも、根源的などころで私の価値観は、メ  
イド・イン・ジャパンだったのだと思う。

自分の人生を自分なりに生きようとする  
ことで、否応なく「女らしくない」という  
レッテルを張られてしまう文化のありよう  
に、頭は反感を抱きつつ理論武装を進め、  
一方で私の心は不気味な憂うつに満たされ  
ていた。

「結婚こそが女の幸せ」だと思ったことは  
一度もない。しかし、「結婚できなかった  
ら女ではない」式の恐怖感から逃れること  
もできなかった。

セクシュアリティが大切な人格の一部  
であることがわかる二十九歳十一月の私  
から見れば、そのころの悩みは当然のこと  
として映る。女性であることは、私が私で  
あることにとって不可欠だったにも関わら  
ず、当時目に映った世の中は、「女である  
こと」か「人間であること」かのどちらか  
を選択すべく私に迫ってきたのである。自  
然のままの私は、世間の基準に従えば女ら  
しくなかった。しかし、無理に女らしくし  
ようとすれば、私が私でなくなってしまう  
そうだ。

## 私を「解放」した 中国

中国と私の出会いは偶然とも運命とも呼  
べるものだ。直接的には大学の第二外国語  
で中国語を選んだことに端を発する。しか  
し、振り返って考えると、私にエキゾチックな恍惚感をもたらす外国は、子供のころからヨーロッパでもアメリカでもアフリカでもなく、いつも中国だった。

横浜の中華街で見た不思議な食べ物や小  
物、テレビに映った途方もない天安門広場。  
高校時代に級友が英語に力を注ぎ、ロサン  
ゼルスやサンフランシスコに出かけるころ、  
私はといえば李白の詩にボーッとしていた  
のである。八二年に初めて行った北京は、  
これぞ外国と思わせるだけのインパクトを  
もって迫ってきた。成田から三時間強、こ  
れだけ近いところにこれだけ異なった生活  
があることに、私は衝撃を受け、恐怖感す  
ら感じた。

しかし、「怖いもの見たさ」こそが私の  
性格の柱である。美しくかつ恐ろしいもの  
以上に魅力的なことが存在するだろうか。

次第次第に私は中国に引き込まれていった。  
けれども、悠久の歴史をもつこの国を語  
ることが本文の目的ではない。ここでは、  
いかに中国語とそれが構成する文化が、まっ  
たく新しい男女関係のあり方を私に示した  
かに焦点をあわせよう。

中国語学習の一番の楽しみは、異なる声  
調を持った一つ一つの言葉を発音する、な  
いしは歌うことから来る身体的快感だと思  
う。言い換えれば、中国語は話すこと自体  
がセクシーなのである。

その段階を越えると、今度は男と女が、  
目上と目下が対等に「あなた」と呼びかけ  
ることのできる自由な人間関係を基礎とす  
る文化が見えてくる。「言うてはいけない  
こと」の掟でがんじがらめにされた日本語  
から解放されたとき、私を呪縛していた  
「女らしさ」のわなからも逃げることで  
きたのだ。

生まれて初めて、私は言いたいことをい  
いつつ、ルール違反の判定を受けずにすん  
だ。もちろん、これは外国人が掟破りを許  
されることからくるごく一般的な解放感で  
あった側面を否定しないし、中国には中国



トロントのショッピングセンター「イートン・センター」

の男女差別や甚だしい不自由さも存在する。いずれにせよ、八三年の暮れからの約二年間、私はほぼ中国人の男たちとだけつき合って過ごした。それは私の二十代の入り口であったと同時に、セクシュアリティが人格の大きな一部となる大人の世界への導入部でもあった。より直接的な言い方をすれば、十九の私が毎晩一緒に飲み歩いた日本の男たちが、私を女性としての精神分裂に陥れたのに対し、大陸の彼らは引き裂かれた私の人格を縫い合わせる作業をしてくれたのである。

当時関った四、五人の男たちは、学生もジャーナリストも絵描きも皿洗いも、誰一人として私が「女らしくない」などとは言わなかった。知的な人間が議論するのは健康的で当たり前のことだったし、感情の発露も自然に受け止められた。しなをつくらずとも、ハイヒールをはかなくても、女性が存在すること自体が女性らしいのだと教えられたのだ。

隠微さで知られる日本文化にも、それなりの魅力があることは間違いない。しかし、日常レベルの美意識が中国人よりずっ

とゆがんだかたちをとる日本の男たちは、女性にゆがんだ美を押しつけるか、もしくは女性であることを放棄するかのどちらかを迫るように、私には思えたのだ。大声で男性を怒鳴りつけられる中国の女、さっと台所にはいるとプロカと見まがうような料理を作り上げられる教養ある男たち。限られた経験から見限る限り、性への態度もずつと大らかだったようだ。

今でも私は一般的に言って、「いい男」の人口比が一番高いのは中国ではないかという意見を持っている。離れ小島に誰か一人だけ道連れを選べるなら、迷うことなく中国の男を選ぼう。しかし、歴史的に入り組んだ日中の関係、今日の両国間に横たわる圧倒的な経済格差を認識するとき、私と中国の関係は単に無邪気なものではあり得なかった。

相対的に「金持ち」の外国人である私とつき合うことは、しばしば彼らにとって経済的なもしくは他の利点を隠し持っていた。こちらにとっては他愛もない贈り物が、向こうにとっては非常に高価で希少なプレゼントであり、「いつか一緒に日本に行くこ

## 「終わらない何か」 を求めて

ね」などと言えば、それは単なる旅行ではなしに、「国外脱出」の可能性を、パスポート取得すらままならない彼らに示唆する結果となった。「打算じゃない。本気だ」と感情の度合いが深ければそれだけ、格差が存在し、「金がものをいう」世の中に生きている自分たちに嫌悪感がつのった。

誇り高い中国の男とつき合ったときには、かつて侵略し凌辱した側とされた側が、その歴史を乗り越えることは可能であったとしても、忘れることや許すことは不可能だという覆すことのできない事実がいつも頭の片隅にあった。

二年間の中国留学を終えたとき、私はよくもわるくも中国の「毒」にすっかりあたってしまっていた。天国と地獄とサーカスと処刑場を掛け合わせたようなこの国から立ち去るときがやってきたのは明らかだったが、生まれ育った日本に帰ることもまた、心浮き立つただけは表現できないものがあつた。

そんなときに、目の前に現れたのが、一年半の後、私が結婚することになるカナダ人だったのである。

金髪に青い目をしたその男は、当時二十七歳、トロントで大学を終え、中国に国費留学していた。

男と女の関係は常に当事者にとってすらミステリーだから、詳細を語ることは恐らくあまり意味がないだろう。しかし、なぜ私が彼と結婚しようと思ったかは、これまでに書いた様々な事情と大きく関係している。

まず第一に、彼は私と結婚してもいいと考えていた。その一点だけでも、私の知っている日本人の男性より魅力的だった。第二に私は恋愛に疲れていた。何度か恋に落ちることを繰り返し、それが常に終わりのあるものだということが明らかに。胸を焦がしては一時の陶酔を楽しみ、痛みと苦さに打ちのめされる恋愛の連続に終止符を打ち、終わらない何かを手に入れたという欲求が私の中にうず巻いていた。

第三に、新たな外国人である彼との関係は、私の好奇心を大いに刺激した。その時

点では日本に住むのか、カナダに行くのか具体的な展望や計画はなかった。しかし、何もかもが前もって決められているかのような日本での生活と比べたとき、見通しの悪さはかえって魅力的に映ったのである。第四に、外国人と結婚することからくる気楽さがあった。「結婚しなければ」もしくは「結婚できることを証明しなければ」という強迫観念と同時に、いわゆる「結婚」というものの醜い出ず不自由なイメージに絶対からめとられたくない思いが強かった。

例えば、言葉の通じない外国人を連れて行くことで、両親や周囲と私のプライバシーとの間に一定の遮断幕が張られること。またより具体的には、相手が外国人であれば、「夫婦別姓」が自動的に成立する利点もあった。

もちろん、後者を可能にした日本の国籍法は、歴史的に女性、特に外国人と結婚した女性に対する差別の方便として機能してきたことは、私も承知していた。いずれにしても、島国の掟を適度に破りつつ、村八分にされない方策として、外国人、しかもカナダという「無難な国」の人間が格好の

解決策として私の目に映ったことは告白しなければならぬ。

とはいえ、人はなぜ結婚するのかという大問題が解決したわけではなかった。婚約というステッは、彼が日本に私を訪れた際、かすかに不満な顔を見せた父親を納得させる手段という言い訳を借りて取られた。

そして、とうとう仙台で新聞記者をしていた私のところにスーツケースを下げた金髪の間人がやって来たとき、私は夢うつで結婚届に判を押したのではなく、両親や朝日の支局長に文句を言わせないために、また彼との間では「労働許可証付きのビザ」を取るためという理由で、結婚したのである。

かつて「結婚」という言葉としばしば結びつけられた「打算」という表現で、私の動機を語ることはできない。それによって生じうる問題のほうに、利点より圧倒的に多かったのである。加えて、私はいわゆる「外人好き」ではなかった。愛がなかったとは言わないが、情熱よりも一つの意志として結婚した部分が大きかった。だから、後に多くの友人が尋ねた「どうして同棲に

しなかったのか」という質問は私の中に成し得なかった。

一言でいうなら、生まれてこのかた体内にたまっていた「内なる世間」と「自我の反逆」の折り合いをつけるために私なりに捜した方法が、カナダ人との国際結婚だったのである。

いざ結婚が成立すると同時に分かったことは、「結婚しさえすれば何もかもがうまくいく」という幻想はもちろん幻想に過ぎないという自明の理だった。

英会話学校で主婦やサラリーマン、高校生相手に教え始めた彼と、毎日最低十五時間は働くサツ回り記者とのすれ違いの日々が始まった。日本語を話さず、友人もいない外国人が一人待つ家庭に私が戻れるのは、早くても深夜を過ぎてから。同じ日本人にはおろか、自分自身にも説明のつかない労働条件に対する嫌悪感は、ホームシックに侵される彼への罪悪感と重なってつづいた。小さなアパートにうず巻く数々の問題のうち、どれだけが二人の関係性そのものに発しており、どれほどが外的要因によるの

か、まったく区別がつかなかった。新聞社の仕事と結婚生活を同時に続けることは不可能に見えたが、「男かキャリアか」の選択を迫られ、どちらを選ぶことも私は嫌だった。

私自身の精神的な落ち込みにしても、私生活と仕事のどちらによるのか分からなかった。他人に相談しようにも、掟破りの「国際結婚」で何が正常で何が異常かを知っている人など見当たらなかった。

さらに、外国人と結婚している女性に対するひそかな差別やべっ視も、杜の都の空気の中に漂っていないわけではなかった。金髪男と暮らす日本の女について、同胞の女性には好奇心と羨望と侮蔑をないまぜにした視線を向け、男性はできるだけ話題にしないように努めるふしが見られる。

問題を複雑にした事情として、私が英語圏の人間と暮らしながら、中国語を話しているということがあった。そのころの私は英語が話せなかったため、仕方のないことだったのだが、周囲にしてみれば、英語なら少しなりとも会話に加われるかもしれないのに、中国語などという訳のわからない

ものを話されることで、まったく埒外<sup>らふがい</sup>に置かれるという不満を感じたようだ。「英語でしゃべってくれない？」と何度言われたことだろう。言われたって私はしゃべれないのである。

## カナダへの 旅立ち

仙台での結婚生活が五カ月を過ぎたとき、私たちはトロントに移る決意をした。カナダに関する知識は皆無だったし、青春を中国にささげた私は、アメリカにもヨーロッパにも、とにかく白人が西洋の言葉で暮らす場所など、足を踏み入れたこともなかった。だから、例によって夢いっぱいの出発というにはほど遠く、むしろ高校生時代から何度もしたように、なぜ行かなくてはならないのかも分からず、それでも泣きながら旅に出た部分が大きかったのだ。

ビザの手続きで行った青山のカナダ大使館で、私は自分が「移民ビザ」の申請をするのだと初めて知った。期間は知れずとも長期に渡って滞在し、そこで勉強や仕事をしようというのだから、それが「移民」な

のだと言われれば、その通りだった。しかし、その言葉には、何と否定的な響きがあったことだろう。まるで食い詰めた人間が決して叶え<sup>かな</sup>られることのない夢を託すかのよ



トロント

うな響き。

日本人と結婚した外国人が「配偶者ビザ」という正体不明の紙切れを書き換えつつ、屈辱的な指紋押捺<sup>おうちゅう</sup>を経てやっと日本で暮せ

るということを考えれば、カナダの対応は公明正大というしかなかった。にもかかわらず、私は家族にも、友人にも、自分が「移民」するのだということを話しはしなかった。実際自分自身にも、それが何を意味するのかなど分かってはいなかったのだ。

一九八七年の十二月、私たちは東京の神社で慌ただしい結婚式を挙げ、カナディアン航空のジェット機に乗った。その何週間か前、書店でカナダ関係の本を搜したが、旅行ガイドと日系移民史以外には、これといったものがみつからなかった。人に尋ねても、モントリオールのオリンピックやミック・ジャガーの愛人だった元首相夫人の噂話以上のことは誰も知らなかった。

ただ漠然と「よさそうな国じゃない」というイメージをもたれているだけの国カナダ。そこで私にどんな生活が待ち受けているのか見当もつかなかったが、同時に「これも運命」という開き直りが内心にあり、(何とかなるさ)とノンシヤランとした表情を見せて、私は成田を後にしたのだった。

— つづく —

(写真提供・筆者)





## ルナ・カレッジ横浜 へのお誘い

青山静子編著『主婦たちの英語奮戦記』のメンバーによって設立された、主婦による主婦のための英語クラス「ルナ・カレッジ」は、多くの熱意あふれる主婦の方々とともに歩み四年目をむかえました。

名古屋で発足し、東京にもその熱意は広がり、五月には横浜にクラスを開設することになりました。本気で語学力を身につ

けたい人、また、英語から遠ざかっていてもう一度始めたい初歩の方も一緒に勉強しましょう。

▼場所・横浜市緑区荏田北三三三十二 江田駅前広田ビル  
コミュニティホール アクト

開校日・五月十二日(火)

初級・金曜十時～十一時半

中級・水曜十三時～十四時半

上級・火曜十時～十一時半

各クラス、十回のうち一回青山

静子先生の授業があります。

連絡先・水曜十時～十六時は

〇三三七二七七八〇一三加藤

それ以外ルナ・カレッジ名古屋

〇五二一七六二一六〇三三

〇五二一七六二一六七四九

### 東京ヒューマニクス

#### 研究所の

#### ゲシュタルト療法を

#### 体験しませんか

「何かやりたい」と思いながら一歩踏み出せないでいる方、自

分の新しい能力を探索している方、ゲシュタルト・ワークショップ(体験学習)を通して、自分の可能性をみつけませんか。

人間関係、子供の問題などで悩んでおられる方も、問題解決のためにぜひご参加ください。

▼日時 毎週水曜日午後七時から九時(随時受講可)

▼申し込み・お問い合わせは、

東京ヒューマニクス研究所

〒141品川区西五反田二二二一

十一一九〇四 ☎〇三三三四九

二二二八三八

青木やよひさんを

囲んで

### フェミニズム・宗教・平和の

会では青木やよひさんを囲んで

講演「転換期の女性」と参加者

のフリートークで構成する「ド

ク&トーク」を行います。文

明の未来、エコロジー、精神性、

コスモロジーなど、身近な問題

から宇宙の深遠まで、フェミニズムの立場から話し合ってみませんか。

▼日時 六月十四日(日)

午後一時半～四時半

▼場所 東京都女性情報センター

(飯田橋セントラルブ

ラザ十五階)

▼参加費 八百円

▼問い合わせ ☎〇四三二二五二一

一六七(奥田)

☎〇三三三四八四一

三五七〇(山田)

### 人工呼吸器をつけた

### 子とともに

平本歩ちゃんはミトコンドリア

ア筋症という筋力の弱まる難病

で、生後六カ月で人工呼吸器を

つけ、ずっと病院生活でした。

四歳のときはほかの子と同じ生活

を送らせたいという親の願いで

退院、在宅にふみきり同時に保

育園に入園しました。この文集

は彼女の二年間の保育園生活の跡をつづっています。彼女がどんなふうに関係を作ったか。医療ケアを必要とする重度の障害児もほかの子と同じように一緒に生きたい、また生きていけるんだということを、この記録を読んで知ってもらえらと思います。

▼送料込みで一冊一〇〇〇円  
▼申し込み先 尼崎市善法寺町八十一 善法寺保育園

## お母さんが編集した 子連れ情報誌が 出ました

大阪で乳幼児をかかえるお母さん三十人が集まって、子連れ情報誌「大阪子連れバワーアップ情報」を作りました。

「私たちが、ほんとに欲しい情報ってコレなんだよね」とワイワイカヤガヤ井戸端会議をして、

まさに子連れで飛び出して集めた情報がいっぱいです。

▼主な内容 親子でグルメ・ショッピング・街へ野山へ出かけよう・今だからこそ勉強・かしこく利用、あれこれ相談・そして何かをはじめよう・お父さんの本音箱など。A5版一二八ページ  
▼お申し込みは郵便振替で口座番号 大阪三三三二五九一七 加入者 M<sup>s</sup>プランニング

一冊一四〇円（送料とも）

▼お問い合わせ先 M<sup>s</sup>プラン

ニング 代表 松浦一枝

〒541 大阪市中央区島之内二一

四一二二 2F8

☎〇六二二一五三七二

## 求・ワープロの仕事

あー一円でも多くお金が欲しい。私は、金の亡者ではないし、夫の会社が倒産したわけでもない。明日のお米に困っているわけでもないが、やっぱり少しで

も多くお金を手にしたいのです。

現在、ワープロにて、在宅でお仕事をしていらっしゃる方、一から始める私にノウハウを教えてください。どんなことでも結構です。

▼連絡先 横浜市緑区荏田町四四九一三七 鈴木荘 坂上実知子  
☎〇四五九二一六五〇七

## ただの母親が 母乳育児とアトピー のこと 本に書きました

母乳育児と子供のアトピー治しについて、試行錯誤した自分の体験を書きまとめています。混合からミルクになった一人目の子と混合から母乳だけになった二人目の子のこと、アトピー治しのために首を突っ込んだ玄米食や除去食の生活、新興宗教や健康食品のこと、子供だけでなく大人のほうにも大きな変

化が起こったことなどです。これらに自分の思いを書き加え、近いうちに「わいふ」から自費出版の予定です。

母乳育児が成功か否か、また子供がアレルギー体質か否かは、「わいふ」でたびたび「つらい」「たいへん」と書かれている

「子育て」に当然、大きくかわる問題に思えます。そして母親だけに「もっとしつかり」と言うのはおかしい、母乳育児の危機にしてもアトピーっ子の増加にしても、むしろお医者さんがなり負担してのことではないかと考えざるをえません。「おばあちゃんの知恵」もこのごろは体験に裏づけされたものではなく、テレビでしゃべるお医者からのうけうりが多いのではないのでしょうか。

最近の「わいふ」にも、母乳育児についていろいろと載りましたし、お子さんがアトピーと

いう方もチラホラ……。

私のささやかな本、お読みくだされ、また別の体験、考えなど教えていただければ幸いです。読んでみたい方は「わいふ」までお申し込みください。送料のみ負担してください。

▽東京都練馬区 上谷亜育

## 友の会を作りたい

兵庫県内の会員の方とお付き合いを希望します。

ぜひお便りをください。できれば、たくさんの方と「兵庫の会」をつくりたいと思います。

希望者の居住地によっては、集まりの場を持つということもむずかしいかも分かりません。文章による交流をしたいと思えます。今月末までにご連絡を。

▼連絡先 藤原美和子（43歳）

〒677 西脇市下戸田四五二一十

☎〇七九五―三二四二八（夜）

## 私のPR

### こんな高校には いりた

偏差値や進学実績ではなく、教育の中心で高校を選んでほしいとの願いをこめて、一人の母親が歩いて、見て、書いた高校案内。書店に並んで一カ月経つが、さまざまな反響を通していくつかの発見があった。

毎日中学生新聞に一年間連載のレポートをベースに、学校現場を再取材してまとめた本だが、どの高校でも教師と生徒の声をふんだんに取り入れた。首都圏と北海道の計三十校を紹介しており、中退や登校拒否受け入れの北星学園余市高校、単位制の都立新宿山吹高校、校則なくユニークな校舎の東野高校、自由主義教育の自由の森学園、専修学校の文化学院など。

東京から遠く情報の少ない地域の中学や登校拒否の子どもとその父母たちからの問い合わせが多いのもこの本の特徴。

父母たちの声のほとんどは、全体を通して高校を見る視点を学んだというもの。一方、教師たちの多くはこれを「高校教育実践集」と受けとめ、立場によって読後感の異なっているのが面白い。

よい点を掘り起こしつつ、どの高校にも問題提起、批判、疑問を投げかけたが、母親にそれを読みとった人が多い。高橋雅子

二期出版刊 一七〇〇円

☎〇三―三九八六―九七六一

☎〇三―三三六七―六八八五（高橋）



### ●情報コーナー

#### もっとご利用を！

情報コーナーは皆さんのコミュニケーションのためのページです。もっともつとご利用下さい。

お友達を求める、ゆずりますあげます、本探し、求職、求人、臨時のお手伝いを頼む、など、いろいろなことで、読者相互の助けあいをしましょう。趣味でお作りになった作品なども、PRして販売なさってけっこうです。

但し継続的に、しごととしてのPRをなさる場合には、広告料をいただくことがあります。金額はご事情をうかがい、ご相談の上とりきめです。

親子でみたいビデオ150選

日本映画篇



監修

相川充弘・石子順・四方繁利

想像もつかなかったことが、現実になっていくのが現代なのでしょうか——本書のまえがきの冒頭である。

大好きな映画が好きな所で見られる。それが今や便利さを通り越して、ビデオ化された映画

の洪水の中で、ビデオを使いこなす方向を見失っているのが現実ではないだろうか。

本書は、子供たちに何を選んでもよいか、親子で楽しめる映画はどれかという観点からのビデオ活用のためのガイドブックで

民衆社 一五〇〇円(K)

愛と哀しみの少年たち

教護院・ある夫婦寮の記録



小林英義 著

教護院というのは昔の感化院である。児童福祉施設の一つで、不良行為をしたり、またはする恐れのある児童を入寮させて、学習、生活指導をし、社会に復帰させる施設である。

この本は教護院寮舎に夫婦で「寮長」「寮母」として自分の

子供たち共々住み込み、少年たちと暮らすなかでの指導記録であり、付き合い記録である。ここにくる少年たちはいっばしのワルであるが、共通しているのは心の弱さである。自分を律しきれず、つらいことからすぐ逃げようとする。少年たちの日記

や作文がそれを物語る。

「普通の生活を経験していれば分かることも、知らない子が多い」とあるように、少年たちの背後にある壊れた家庭や複雑な家族構成に、少年たちの哀しみをも垣間見る思いがする一冊。

教育史料出版会 一五四五円(O)

ある。手元において役に立つ一冊だ。

二十三名の選者たちによるそれぞれの映画紹介は、それだけで読むものを銀幕の世界にグイグイ引きずりこんでいく。

豊かな福祉社会への助走

PART 2



浅野史郎 著

「日本は経済大国にふさわしい真の豊かさに達したか」と問い続けている著者は、厚生省児童家庭局障害福祉課長として、日本の福祉行政の第一線で活躍した人。およそ役人らしくない語り口で「福祉ってナニ」と問

いかける。

福祉の分野での豊かさ、その国の女性の社会進出の度合いは正比例する？

福祉の先進国では女性の社会進出が顕著である。

「女は家にいろ、障害者は施設

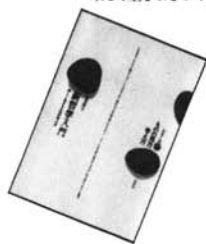
にいろ、おれが君たちの生活までちゃんとめんどろ見てるから」という健全者の男の論理は差別的論理と明言する著者。

真の福祉とは何か、考えさせられる本だ。

ぶどう社 一五〇〇円(N)

新 哲 学 入 門

楽しく生きるための考え方



板倉聖宣 著

いわゆる「哲学者入門」とはまったく異なる一冊。著者も言うように、自分の体験的思索からつかみ取った「ものの考え方」を提示している作品なのである。「ものごとを根底から考えなおすと、これまで見えなかったい

ろいろなことに気づくようになる」という著者は、さまざまな問題にその姿勢でアプローチしていく。  
科学と哲学の相違はどこにあるのか、科学的に考える、とはどういうことか。実験とは何か、

それは科学にだけ必要なことか、弁証法的に考えるとはどういうことか、などなど、ユニークな論理に従って展開されていく思考の軌跡が刺激的。一読をお薦めしたい。

仮説社 一八〇〇円（Ｔ）

おかえり 春子



丘 修三・作 武田知万・絵

障害児を抱えたら、家族が責任を負うのが当然のような日本人の社会通念が、教育でも社会においても、隔離して保護するという行政を黙認してきたのだが、知らないということが、触れ合わないということが、どれほど偏見を生んできたか、そし

て家族や教師たちに任せたまま見すごしてきた、わたしたちの過ちをこの物語の中の少女たちは気付かせてくれる。  
話は五話からなるが、いずれもきれいで済まない障害児とのかかわりの中で、傷つき、苦しみ、やがて兄弟への、無心

なものたちへの愛に目ざめて成長していくさまは、作者が長年障害児たちと歩んできた人だけに説得力がある。それはどんな福祉の理論よりも、素直に心に沁みる。子供向けとしているが家族とともに読みたい本である。  
子ども書房 一三五〇円（Ｓ）

女性学への招待

変わる/変わらない、女の一生



井上輝子 著

女性学という言葉初めて聞く人も多いだろう。だって、私たちの学生時代には、こんな科目はなかったのだから。  
この本は、女性学とは何かを知りたい人にお薦めの入門書である。女性が生まれてから死

ぬまでの間に、それぞれの段階で経験する様々の出来事を、女性学の研究成果をもとに、綴ったものである。家庭や学校や職場で出会う性差別、結婚の意味、母性をめぐる諸問題、主婦とはどういう存在かなどが、分かり

やすく解説されている。  
日ごろ感じている憤懣や疑問を大事にし、自己の経験を問いただす姿勢をもつ女性ならば、あなたは、すでに女性学に招待されているのである。

有斐閣選書 一五四五円（Ｉ）

## アメリカン・チャイルドフッド



アニー・デイルード 著  
柳沢由実子 訳

私たちは、アメリカ人もアメリカ文化も、単純で底が浅く、よく知っている、と思いついて。でも、「アメリカの知性」と評される作家アニー・デイルードがここに描く、ひとりのアメリカの少女の意識の目覚め、そ

の心に映った風景は、私たちが知っているステレオタイプのアメリカではない。そしてその感受性のこまやかさ、生命力の強さといったら、生きることはドキドキするほどおもしろいことを思い出させ

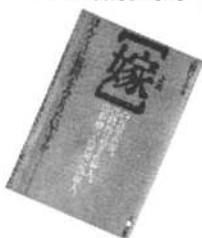
てくれる本。

雪玉を車にぶつけられて本気でどこまでも追いかけてくる男の話など、エピソードがいっぱい。ゆっくり読みたい、子供にも薦めたい本である。

バビルス 二八〇〇円(Y)

## 〔嫁〕

ほんとうに義親をみたいですか……



上野いづ子 著

最近女性も職場で責任ある仕事につくことが多くなった。社会人として当然の話だが、そんなとき家庭内に何か事故がおきた場合、妻であり母でありまた嫁でもある女性にかかる負担はにわかに重くなる。

この筆者もある共同事業の代

表者として活動中、義母が難病に倒れ介護が必要となった。「嫁なんだから仕事をやめて世話をするのが当然」という周囲の目に彼女は悩み苦悶がはじまるのだが、最後まで仕事は捨てなかった。

世の男性の多くは、年老いて

動けなくなっても家族の誰かが面倒をみてくれるから自分は大丈夫、と女性の手をあてにしているようだが、ここに日本の福祉が前進しない大きな原因があることへの、告発をこめて書かれた本である。

ユック舎 一五四五円(M)

## 母性の社会学



松橋恵子・堤マサエ 著

母性の名のもとに子供のことしか語らない本や、ぬきさしならぬ親子関係を現に生きている私たちにとって、参考にならない単なる母性批判の書が多い中で、まさしく待望の一冊。

現代社会から押しつけられる

「母性イデオロギー」を批判的に分析すると同時に、主体的・選択的に「母性」を生きる道を希求、子育ての喜びと苦勞を当事者の側の言葉で語る。

松橋氏は「母性」概念を再検討、フランスでの生活と研究を

ふまえて「産育コスト」「産育保育」の考え方を提唱。堤氏は「家」から「現代家族」への歴史的变化を描き、個人が「親になる過程」を分析する。社会学の研究書だが、平明で読みやすい。サイエンス社 一七五一円(F)

# わいふ文章講座(9)

編集長 田中喜美子

死角からの報告——斎藤茂男 Ⅱ 編著

本書の内容は少年達<sup>たち</sup>のそれぞれの犯罪ごと  
にわかれて詳述されているが、私は特にその  
中で、千葉県立流山中央高校の校長服毒自殺  
事件に強く興味をひかれた。  
事件は一九八二年、今から十年前のこと  
ある。在校生による学校放火、窓ガラス三十

この文章は「読んでみました」に投稿されたのですが、厳密な意味でいうと、「書評」ではないかも知れません。しかし今回は、このご投稿をきっかけに、書評の書き方についてお話したいと思います。

「書評」にせよ、「読書感想文」にせよ、まず、そこに取り上げた本に何が書かれているかを一応書いてほしい。双方とも、その本を読んだことのない人が読む場合が多いのですから、まず内容について、一応は読者に納得のいく伝達をしてください。

これは意外に難しいことなのです。残念なことに、この文章からは、この





校は教師と生徒が「おめえ」「てめえ」と呼ぶ関係だったのである。管理のワクをはずれた者は体罰で制圧、それに反抗すれば切つて捨てる。こうして校内暴力の芽はつまった。  
 (いつか誰か、意味不明) 十年を経て、教える側に一時期いた私は、  
 学校中がコトリとも音のしない静寂の中にあることに非常な異和感をおぼえずにはいられた。その事を友達と話し合った時、その静けさは小学校低学年の通う塾でもそうであった。ただひたすらサラサラ、サラサラと鉛筆を動かす音のみ聞こえるだけなのだそうである。  
 今、統制され、号令され、整然と管理されるのを望みつつある父母と子供たちが増えつつある状態をとっても危険だと思う日々である。こまめに読んでも、校長服を毎日脱ぎ、関係がよくなる。い。その後の脈絡をもうかりつけて書いてください。

ついでには筋がとおり、評者が何に感動し、何に感服したのか、それが伝わってくる必要があります。その「感動」の内容が、読者を納得させるものであれば理想的ではないでしょうか。なぜなら書評というのは、一冊の本にかこつけて自分を語るものであってもかまわないと思うからです。完全に「客観的」な評論などというものは、この世にありえないのですから。

その意味で、最後に「コトリとも音のしない静寂の中にあることに非常な違和感をおぼえずにはいらなかった」とありますが、こうした書き方は決して悪いものではありません。しかしここでもまた、なぜ、筆者がそう思うのか、説明不十分のために意味が伝わっていないのが残念です。

文章の主語をはっきりさせること、前後の脈絡をしっかりとつけること、まずそのことを心がけてください。また書き上げた文を一週間ほど寝かせておいてから読み直してみると、言い足りない部分に気がつくと思います。

## 契約結婚

山影 冬彦

12

「実は、俺も家事・育児の手間が減って浮くことになる時間を当て込んでいたんだが」  
ようやく道也は自己の側の事情を語り始めた。

「あら、そうだったの。でも、ミチは特別要求はないって、さっき言ったじゃないの」

「そんなことは、特に要求するまでもなく、俺が家事・育児の大半を負担しているのだから、その減った分の恩恵には俺が与れると思うのが、道理じゃないか」

「あら、そんな道理ってあるかしら。とにかく、今日は約束の契約更新の日なのだから、こういう時にこそそういう当て込みは要求としてきちんと出してもらわないと、話の進め様がなくて困るじゃないの」

「じゃあ、改めて要求として出させてもらうよ」

「つまり、わたしの要求とぶつかるわけね」

「まあ、そういう形になるか」

「では、その浮いた時間を何のために使いたいのか、それを言ってちょうだい」

「何のため？ えーと、いきなりそんなこと訊かれたって、すぐには出てこない」

道也は愕然として答えた。

「あら、ずいぶんいい加減じゃないの。何に使うかその当てもないのに、浮いた時間の要求を出すなんて、どうかしていいない？ 強欲だよ。そんなだと、時間を持て余すことになって、また精神的におかしくなってるよ。とにかく、わたしの要求に対抗して対等に交渉する資格なんか、ないというべきだよ」





怜子は夫の弱みを瞬時に見抜く伶俐な能力を備えている点において、世間一般の妻に劣らなかった。

「そんなこと言っても、要求として出すつもりではなかったんだから、きちんとした理由づけがこの場で出来なくても、仕方ないじゃないか」

道也も簡単には引き下がれなかった。

「じゃ、そのきちんとした理由づけを考えてよ」

「今、この場でか？」

「無理？」

「ああ、無理だ」

「じゃあ、いいわ。二三日の猶予をあげる。少しはありがたいと思ってよ。この場で話を決めてしまっても、ミチは文句を言えないはずなんだから。お情けで契約更新交渉はそれまで延期ね」

怜子は交渉作戦上からも、恩着せがましい文句を忘れなかった。

こうして交渉の第一回目は、交渉の緒に入りかけたところで、終わった。

# 13

道也は真剣に考えなければならなかった。子供の成長で家事・育児にかかる時間が浮いた分の恩恵に与るには、向学心を掲げる怜子との対抗上、ただ単に楽になりたいからというのでは話にならなかった。もし道也が熱心な教師だったならば、浮いた時間は教師としての本業に回したいというところだが、道也は熱心な教師では全然なく、むしろ熱心な教師は却って生徒を駄目にするといった逆説的教育観念の持主でさえあった。道也は本好きだったから、読書という時間使用方法がすぐ頭に浮かんだが、ただ漫然と読書と言っただけでは、怜子の大学院での勉強という明確かつ強烈な目的と対等に渡り合える道理がなく、



それでは交渉における道也の敗北は開始する前に決定したようなものだった。

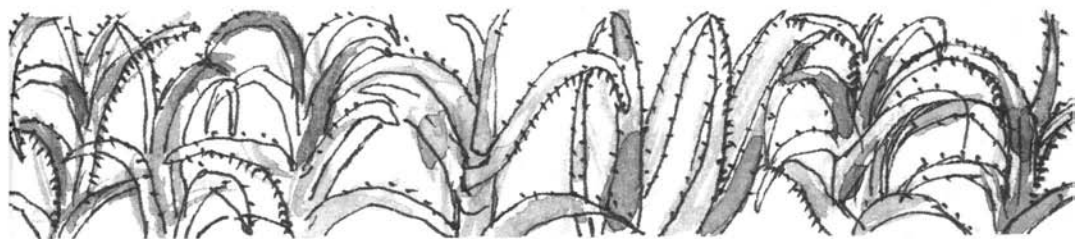
怜子の要求は、共稼ぎの妻が共稼ぎを続けながら大学院で勉強したいというもので、言ってみれば、人生の歩み方の根幹にかかわるものと言ってよかった。従って、それに論理の上で対抗しうるためには、道也の掲げる要求も自己の人生の歩み方の根幹にかかわるものでなければならなかった。道也は妻と対抗するのに論理以外のものに頼るような男ではなかった。また、妻の怜子も夫が論理以外のもので自分に対抗することを認めるような女ではなかった。確かに係争の直接的な対象は、子供の成長で家事・育児にかかる時間が浮いた分の帰属という小事でしかなかったとしても、怜子との対抗上、どうしても道也は自己の生き方を考えねばならなかった。といっても、そうしたものは、日頃の生活の中で大事にあたためているのでなければ、思いつけといわれても、そうすぐ簡単に思いつくことが出来るはずのものではなかった。けれども、また、そうしたものは、雑事に追われる日頃の生活の中では大事にあたためているわけにはいかないものだけに、思いつけといわれる機会が与えられたならば、是非にも思いつきたい事柄でもあった。他の人間は知らず、少なくとも道也はそう考える男だった。

「俺は一体、この世に生まれて何をしたいというのか。俺の人生は何なのか」突然、こう自問する声が内部に湧き起こって、道也は若き青年時代に後戻りしたような気分になった。かつての青年時代、この問いは道也の胸裏に去来して離れることがなかった。道也といえども、まともに悩める青年時代を送ったことがあったのだ。その時抱いた意志とも希望とも抱負ともつかぬあるものも、確かにあった。だが、それも、怜子と出会い、結婚して家庭を築き、二児の親となり、生活に追われる日常をどうにか凌いで行くうちに、いつの間にかどこかに失せた。十五年の教員生活・家庭生活はささやかな日常的幸福を与えてくれた代償に、道也から青年の志というべきものを奪った。こうして道也は四十男の中年に年老いた。



「俺は一体、この世に生まれて何をしたいというのか。俺の人生は何なのか」四十男の今頃になって突然復活させたこの疑問に、道也は当惑した。今更そんな青臭い思いを抱いたところで何になるという思いもあるにはあった。より以上に、この疑問の復活がかつての青年の志というべきものの復活に繋がるに違いないという懸念もあった。事実、道也はその青年の志というべきものの復活を素直に喜べなかった。その復活は、今まで築いてきたささやかな日常的幸福に何らかの波瀾をもたらすかもしれないからだった。

道也が青年時代に抱いた志というべきものは、しかし、それ自体としてはそれほど大それたものではなく、そうしたものにありがちな危険も伴いはしなかった。それは、二十世紀に生を受けた人間としてこの世紀を刻印する形で自分自身の人生に正面から向き合った作品を小説の形で書き著してみたいというものだった。道也はその意味で文学青年だった。その文学青年の文学観は、反面至って禁欲的で、「文学とは無償の行為でなければならぬ」というものだった。これを、道也は彼の高校時代の恩師から戒めとして叩き込まれた。この「文学とは無償の行為でなければならぬ」という文学観によれば、創作において目指すべきは作品それ自体の価値であって、それに伴って生ずるかもしれない名声・地位・金銭等の雑物は決して自ら求めてはならぬということになった。従って、何々賞を目指すとか、職業作家を志望するとかいった、とかく文学青年にありがちな世俗的雑念は、悉く否定された。「このわしが、一介の教師として渡世しているというのに、君らが賞に釣られて職業作家を夢見ようなどとは、太過ぎるで。それは道を誤るもので、仁義に反する。我々凡人が文学に関って悪くはないが、否、凡人こそ大いに文学に関るべきだが、その凡人の文学への関り方は、他の別個不動の正業に就いて関るべきである。そうでないと、ろくな作品も書けぬし、また、ろくな生活もできはせぬ。これが道理である。この道理を思い誤る



と、文学は身を滅ぼす元となる。夢夢忘ることなかれ」この託宣のうちに凡庸な道也にとつて特に応えたのは、「ろくな生活もできはせぬ」というお告げだった。

恩師の忠告に従い、恩師を真似て、道也は職として高校教師を選んだ。高校教師ならば、比較的時間の融通がきき、志す創作にも取り組むことが可能だろうと当て込んだからだ。だが、この当て込みは、見事に外れた。

## 15

現実の高校には、道也の時代と違って、勉強をしたくない者も通うようになっていた。殊に道也が勤務した高校はそうだった。頭の良し悪しはとにかく、勉強意欲のない生徒に勉強を強いることは、それが教師の仕事だと割り切ったところで、しんどいことに変わりなかった。勉強意欲のない生徒が勉強を強いられれば、とかく悶着を起こしやすかった。日々の授業でも、また、悶着処理にも、教師の労働はきつかった。それは、精神労働とも肉体労働とも片付かぬ、訳の判らぬ雑役だった。道也は高校生相手に保育園の保父になったかのような錯覚を覚えた。とても時間を融通して、志す創作に打ち込むことなど叶わぬ状況だった。道也は雑役夫の高校教師になって創作への意志を半ば諦めざるをえなかった。忌らしい思いのうちに、道也は当ての外れた教師稼業を続ける外なかった。

道也は中途半端が嫌いな性格だった。怜子と結婚し、すぐ子供も生まれて家庭の事情にも煩わされる身となると、外の職場においてと同様、家庭内においても、妻子との関係上、「無償の行為」としての文学に現を抜かす贅沢はままならなくなった。それなら、いっそのこと、創作などはこの際きっぱりと諦め、家庭人として突っ走ってしまおうと道也は割り切った。道也が妻の怜子以上に家事・育児を分担する姿勢を自発的に示したについては、住宅長期債務返済の重圧に苦しむ経済的理由の外に、こうした半ば自棄気味の割り切り方があった。



こう割り切って、道也は十五年間家庭人として突っ走って来た。その結果、ささやかな家庭の平和を手に入れることもできた。子供も手がからなくなり、その浮いた時間を夫婦間で分捕り合う余裕が生じるまでになった。その分捕り合いの論拠として、かつて諦めていた創作活動を持ち出すことは、それ自体としては筋の通らぬ話ではなかった。けれども、道也はそれを持ち出すことを躊躇した。道也にも、自己の性格として、どっちつかずの中途半端を嫌い、こうと思ひ込んだら最後、脇目も振らずにその思ひ込んだ方向に突っ走ってしまう傾向があるということが自覚されていたからだ。

## 16

子供の成長で家事・育児にかかる時間が浮いた分の恩恵に与るためにかつては諦めていた創作活動を持ち出すことは、確かに妻の怜子の出した要求に対する対抗策としても優れていた。これ以外にはこれといって思いつけないというのが、道也の実情でもあった。けれども、一旦創作活動に走り出してしまえば、子供の成長で家事・育児にかかる時間が浮いた分の恩恵に与る程度では事が収まりきれなくなるということが目に見えていた。

道也は、子供の成長で家事・育児にかかる時間が浮いた分に限定する小回りを利かす形で創作活動に関ることができるという自信があれば、妻の怜子に対してうまく要求を出すことが出来ていいのと思った。だが、道也の創作活動は、あいにくそういうふうには小器用には出来ていなかった。外で雑役教師として働き、家庭で家事・育児をこなした上で、辛うじて浮くようになった時間で創作活動に勤しむというような器用な真似は、道也には望み難かった。もし、この際どうしても創作活動を行いたいのであれば、教師を止めるか、家事・育児をまるまる返上するか、そのどちらかだと思われた。

子供の成長で家事・育児にかかる時間が浮いた分の恩恵に与るための論拠を思い考えていたというのに、いつの間にか家事・育児そのものを返上するとか、職まで止めてしまう





とかいった極端な事を思い浮かべだした自分に気づいて、道也は苦笑いした。けれども、苦笑いしても、着想そのものはやまなかった。一旦走りだすと容易に制止しがたくなるという道也の一本気が、ここでも弱点として現れていた。

道也は思考を続けた。まずどう考えても、家事・育児をまるまる返上するというのは、無謀だった。これでは、怜子の勉学意欲を否定するばかりか、いままですぐに築いてきた怜子との家庭生活そのものの否定に行き着くことは、明白だった。家庭崩壊をも顧みず創作活動に打ち込むといった話は文士の逸話として珍しくはないが、そもそもそうした家族迷惑な姿勢を否定したところに今日の家庭人としての道也が存在したのだった。

## 17

すると、残るのは、教師をやめるという選択だった。確かに教師になりたての頃、当てが外れて毎日のように教師をやめたいと妻の怜子にこぼしたことが、道也にもあった。だが、小さな割には多額にのぼる長期債務の元になった家を購入し、二人の子供の父親になつてみると、そんな愚痴はこぼせなくなった。それどころか、経済的必要性から妻をせき立てて定職につかせるまでした。その経済的必要性という観点から見れば、教師をやめるという選択は、家事・育児そのものを返上するということと同様に、無謀ではないか。

だが、どの程度無謀なのかを、道也は実際に家計の数字を弾いて確かめたくなった。そう思い込むと、道也は矢も楯もたまらずに、自分の収入がなくなった場合の家計の状況を試算し始めた。その種の計算は、概して家事に疎い一般の男と違って、家庭状況全般に明るいのみならず実際に家計を預かってもある道也には困難ではなかった。

まず自分の選択にとって最大の障害となるのが住宅購入時に借りた多額の長期債務に違いないと睨んで、道也はその残高を確認した。その残高は予想外に少なくなっていた。

— つづき —

(え・鳥居禎子)



# 母と子

6月号

定価三五〇円・千四六円

今月の  
視点

## 学校に期待すべきこと

- 期待される教師の覚悟 野辺悦志
  - 高校づくりは学級PTAから 青木 一
  - 「高校大量中退」がつきつけること 田代三良
  - 生徒・父母の学校参加 柳沢良明
- ドイツでの法的保障を手がかりに

## 子どもの本っておもしろい

「母と子」'92・2月臨増・定価一〇三〇円・千五六円

中 売 発 評 好

□ 一口に子どもの本といっても

□ やっぱり本好きになつてほしい・本にこだわらない

□ 子どもの本の選び方 □ 子どもの本の十二か月

□ 今問われていること □ Q&A □ エッセイ □ 資料

## 父母からの問いかけ

学校・教師と共に考えたい疑問や悩み

## 子どもと読む

## 子どもの権利条約

## PTAって何？

千203 東久留米市中央町五・四・八  
電話 〇四二四(七四)九一二五

「母と子」'90・7月臨増  
定価一〇三〇円・千五六円

「母と子」'91・9月臨増  
定価一〇三〇円・千五六円

「母と子」'91・1月臨増  
定価一〇三〇円・千五六円

「母と子」'90・7月臨増  
定価一〇三〇円・千五六円

女たちの情報紙

# ふえみん

f e m i n

婦 人 民 主 新 聞

**WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL**

ご希望があれば見本紙を送ります。

申し込み先 婦人民主クラブ 週刊1ヵ月 650円(送料込)。

東京都渋谷区神宮前3-31-18 電話03(3402)3244, 3238

大阪市北区中崎西3-1-5 電話06(371)2429

ふえみん・おんな・はたらく・がっこう  
アジア・たべもの・せつけん・げんぱつ

# わいわい がやがや

## 家を飾る

栃木県鹿沼市・神山寿子

インテリア雑誌を読むのが好きだ。

ため息がでるような豪邸や、目をむくような最先端アート風の邸宅はともかくとして、私の興味を引くのは、普通の人の、普通の家の、普通でないインテ

リアである。

下町の狭い借家で育った私は、家を飾る趣味を持たないまま今に至っているが、雑誌に登場する奥様方は、いやもう飾る、飾る。

ベルサイユ宮殿もかくやと思われる、ワインレッドのビロードのカーテンが、金色の房飾りとともに窓辺に揺れている。猫足のサイドテーブルの上にアンティーク鏡が置かれ、キャンドルスタンドが輝いている。

はたまた、和風喫茶か、炬燵焼き屋か、縄のれんに緋の座ぶとん、火鉢を利用したテーブルの脇にひょうたんがぶらさがっている。

これが両方とも公団住宅の一室だというから、びっくりしてしまうのである。

けなしているのではない。そのけなげさに感心しているのである。

どう転んでもウサギ小屋くらの住居しか持てない私たちである。ささやかな楽しみに家を飾って何が悪い。なーんて思っているかどうか知らないが、その執念は大したものである。

一昔前なら、レース編みや、刺しゅうといった装飾が、PATCHワークのタペストリー(季節ごとに変えるという)やら、トルペインティング、ステンドグラス、ステンシル、藤細工など、さまざまな手工芸品で家を飾れるようになってきている。

家具も王朝風あり、民芸風あり、ハイテク風あり、よりどりみどりである。

一所懸命に飾った部屋のグラビアを何冊も見ていると、その苦心と労力に脱帽するが、この情熱は、どうも方向が違うんじゃないのとも思えてくる。ルイ十六世の錠前作りみたいじゃない、なんて言ったらみな怒るでしょ

うね。

私の家はどうかといえば、飾る前に大掃除が必要という、お話にならない状態である。

## 不名誉な話

東京都・匿名

去年の十一月、近所の〇〇スーパーへ行ったときのことである。

洋品売り場で息子たちのポロシャツを買い求め、一階へ下りた。食品売り場は混んでいるなと横目で見ながら、レジの前の通路を進みそのまま外へ出た。

さて帰ろうかと自転車の鍵をはずしていると、「お店の者ですけど」とストールを羽織った上品な感じの女の人が近づいてくる。店員さんのようでもなし、何の用だろうと不審に思う。

彼女いわく、「あなた、今、レジを通りませんでしたね」ガー

ン。なんと、私は万引きにまちがえられてしまったのだ。カーッと頭に血が上ってしまった私、「し、しつれいね。ちゃ、ちゃんとお金払ったわよ」と叫ぶ。相手は疑わしい目つきでまだ何か言っている。そして、しきりに私が提げている袋をのぞこうとする。

間が悪いことに、それは、別の店のビニール袋だった。〇〇スーパーでは、リサイクル運動もしている。その日は、たまったトレーや牛乳パックを詰め込んで持って行き、回収箱にあげた後買い物をしたものだから、シールだけでいいと申し出て、買ったシャツは空になった袋に入れたのだった。

(あ、そうだ、シールがあった)と気付く、ふるえる手で取り出して見せた。相手もやっと納得し、「あら、ごめんなさい」と私の肩をポンとたたいた。「まっ

たくもう、あんまりじゃない」などとぶつくさ文句を言ってさっさと帰った。早くその場を立ち去りたかったのだ。

ペダルをこぎながらみじめだったこと。(誰かに見られていなかったかな。私ってそんなに物欲しげな顔をしたのかな。それとも、すり切れたジーンパンなんかをはいていったのがまずかったのかしら)取りとめもなく考える。

そのうち、しだいに腹が立ってきた。(なんで私が怪しまれなくっちゃいけないのよ。だいたい、あの人、人をどろぼう呼ばわりしておきながら頭も下げなかったじゃない)家に帰り着いたころ、怒りは最高潮に達していた。まっすぐ電話へ。スーパー側では「すぐ調べて対処します」と言ってくれた。少しずつとする。

折り返し、店長さんなりが謝っ

てくるのかなと待っていた。ところが、一時間たっても二時間たってもこない。また不安になる。

夕方の五時半になって、やっとベルが鳴った。「もしもし、こちら渋谷の××××です。私は、教育係の△△と申します。昼間はうちの隊員が失礼致しました」あの人は、〇〇スーパー



の人ではなくあそこに派遣されている人らしい。「それで、いかが致しましょう。明日にでもおわびに伺いましょうか」と続く。菓子折り一つ持って来られたって気がおさまるわけじゃない、「わかっていただければ、

それでいいです」と私。

「まあ、なんて心の広い方でしょう」とかなんとかお世じを言っている。(冗談じゃない。万引きといえ、れっきとした非社会的行為。それを疑われて心を

広くなんて持てるもんですか)と、またむかむかしてくる。「いいんです、もう。ただ、お

たくもプロでしょ。一階で買い物したかどうかぐらい、しっかりと見てほしいものです」とびしやりと返した。

教育係さんはくどくど謝っていたが、「〇〇スーパーさんは、お客様をとて大事にするお店です。これに懲りず、どうぞ利用してやって下さいね」と何度も繰り返し電話を切った。

それを聞いて初めて、言いつけたのはまずかったかなと少し後悔する。あの女の人は、お店からはいやな顔をされ、教育係さんにも注意され、おまけに社

長さんにもしかられるだろう。フエアじゃないやり方だったと彼女に対して、ちょっとうしろめたい気持ちになった。

けれども、万引きにまちがえられるなどやっぱり名譽な話ではなくおもしろくない。半年近くたった今でもあのスーバーへは一人で行く気がしない。休みの日を待って夫と一緒に行くか「買ってあげるから」とお菓子で釣って子供を連れて行く。

## 寂しい正月

東京都中央区・堀場美代子

正月は寂しい。夫(五十二歳)と二人の息子たち。夫はゴルフの練習、映画に出掛け、家にいる間はソファーに寝転んでテレビ観戦。私はお正月らしい気分が味わいたく、近所の神社、不動尊へ。子供たちを一応誘った

が断わられた。彼らはもう四、五年前から私と出歩くことをしない。

二日は、三日に合気道のクラブの何人かでジョギングをするというので、その練習を近くの公園でした。三日に「さあ、今日はみなとおしゃべりできる」と出掛けたが、行き違いでみなに会えなかった。臨海公園を一人で散歩したが、家族連れやカッブルの中の一人歩きが三日目ともなると、わびしさも極まりという感じだった。

ふだんは、仕事、趣味、友達との対話などでおおい隠されているものが、正月には明らかにたってしまう。夫が家庭で全然話さないというのではない。時々「愛してるよ」とも言う。が、心に響かない。

老後……私は夫ではなく気の合う女友達と暮らしたい。今のところ、親しい友達は各々

の夫と過ごすつもりらしいので当てはない。夢のようなことを思い描くより、現実にはそばにいる夫との距離を縮めるようにしたほうがいいことはわかっている。今まではできなかった。失望、絶望、あきらめ。

私は心の通い合いを他に求めてあがいている……。

## 七変化

横浜市保土ヶ谷区・井上治子

平成四年一月二十日は、去年の暮れに弟子入りした歌謡舞踊のけいこ日である。

その朝、師である友より、「私の着物をきせて、写真を写すから、カメラを持ってきてね」と、電話があった。家の中で写すわけなので、ストロボ付きのカメラを持って出掛けた。

ブザーを押すと、笑顔の友が



ドアをあけ、「待ってましたよ!」

と言う。部屋にはいると、着物、帯、踊りの小道具が並べられている。友は、

「まず、お茶を一杯」

と支度し始めたが、私はことわった。

「それでは、始めましょう」と友は私に、空色の襟のついた下着をきせ、ピンク色の上着をきせた。

上着の袖そでと裾すそは黒に染め分けてあり、その上部には、赤と白の桜の花が染められてある。帯は濃いオレンジ色の半幅を、後ろでたらししてしめた。

頭にはかつらをかぶせ、顔にはドーラン化粧をしてくれた。「できた、できた。若くなったわ!」

友は、手をたたいて喜んでいゝる。そして、姿見を持ってきた。鏡をみると、派手な衣装の私が映る。

それから、七変化が始まった。友は、私に扇をもたせて一枚、傘のポーズで二枚、桜の花の枝をかざし、白と黒のしま模様の手ぬぐいをかぶり、元禄花見踊りのスタイルで一枚写す。

つぎは、濃い空色の手ぬぐいをかぶり一枚。続けて、その手ぬぐいを両手でひろげ、友禅流しの形で一枚。

後ろをむいて一枚、最後に、花嫁の着る袴はかまを着せられたが、フィルムがなくなった。帰りに写真店により、現像してもらった。家で、写真をみておどろいた。まだ三回めとは思えない、別人

にみえた。「馬子にも衣装」とは、まさにそのとおりである。やらせ上手な友の、ポーズの指導のおかげであつた。

今年は一月から、面白いことになった。暦の星は「九紫火星」で真っ白である。

## 着るものに

### 無頓着

新潟県中蒲原郡・小林智枝 50歳

旅行とか出張とか、デパートまで買い物に行くなどというとき、夫はきまって言う。

「何着ればいいのー」

「ほんとどうにもう。何て世話がやけるのよ。自分のことは自分で考えてよ」

と言いたい言葉をぐっと飲み込んで、

「好きなのにしたら」と明るく言う。

すると夫はたいして持っても

いない服から、四苦八苦して選んで着てくる。自分の持っている服を覚えていないし、何を着ていいか分からないようだ。

「服なんか頭に使っていられない。もっといろいろな頭を使うことがあるから」と逃げる。

「あなたが変な格好していると、私の恥になるんだから、少しは気をつけてね」

そんな言葉は馬耳東風。気に入ったセーターで、着たきりすずめのように会議にまで着てい

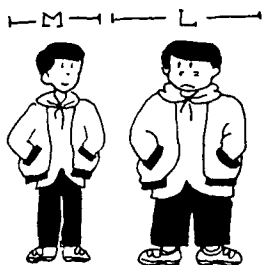
く。一、二本の同じズボンばかりはいている。ホームウェアでどこまでも行く。

世のご主人の中には、自分の着るものは自分で買ってくるし、アイロンも自分でかけるといふ人もいゝる。考えてみれば当たり前のことだ。自分のことを自分でするだけなんだから。その当たり前のことをさせないで、かいたいしく世話をやいていた結果がこれなんだから、要するに私が悪かったのだ。

若いころは甘やかし、実年になつてつき放そうとする私も身勝手だ。

ところが最近異変が起きた。

夫は単身赴任してから身の回りをきちんとするようになった。だらしない生活にならないように気をつけているとのこと、脱いだ服をハンガーにかけたり、きちんとたたむようになった(当たり前のことなだけれど)。



それと反対に私は残業が続いて疲れたりして、ふだん着をたまたずに無造作に重ねたりするようになった。

「だらしがなくなっただね。ボクと反対になったねえ」

まったくその通りでギャフンときた。

さらに面白いことに、次男が若々しい洋服を買ってくると、夫は、

「いいなあ、おれも着られるな、たまに貸せよな」

ときた。小柄な次男のMサイズの服を、Lサイズで太った夫が着られるはずがないのに着ようとする。

「伸びるよ。やめてくれえ」

次男は大慌てだ。

「オレも若くなりたいたいもん」

冗談なのか本気なのか、そばで見ていた私と母は大笑いした。

## ぼく、美容師になりたい

東京都武蔵野市・福田由利子(74歳)

そと孫のT夫が、去年の春高三になったとき、

「いよいよ、来年は大学受験ね。Tちゃんは理工系、文科系、もちろん決めるんでしょ」

と私は尋ねた。すると彼は、

「そのどっちでもないよ、ぼく、美容師になりたいんだ」

と言った。意外な返事に、

「ええっ」と思ったが、そのときはそのまま聞き流した。正月遊びに来たTに私はまた尋ねた。

「二月になったらそろそろ、大学の試験が始まるのね。みんな四つも、五つも受けるらしいのね。Tちゃんも幾つか受験校決めたの？」

「まあね。親父がどうしてもって言うから、一応受けることに

はしたけど、ぼくはやっぱ美容師になりたいんだよな」

「美容師になる大学ってあるの？」

「大学はないよ、専門学校だよ」

「そう、それでTちゃんはいつごろから美容師になりたいと思ったの」

「だいが小さいころからだよ」

そういえば幼い彼を商店街へ連



れて行くと、美容院のガラス戸に顔をくっつけて、中を見ていた。

「小さいころからずっとなの、

それでそのことお父さんや、お母さんは知ってるの？」

「知ってるよ、高校になってからはいつも言ってたから、だけど本気にしないんだ。とくに親父は絶対反対なんだから」

と投げやりに言う。

「おばあちゃん、ぼく、頭悪いし、勉強嫌いだろう。三流大学にやっとなって、やっとなって、三流サラリーマンになるのなんかいやだよ」

ひいき目で祖母の私が見ても、彼の成績はかんばしくない。Tが自分の希望する道に進み、いわゆる手に職を付けることのほうがよいのではないかと私にも思えてきた。

しかし、音大の音楽の教師である彼の父が、一人息子の美容師志願に、うんと言わないのもわかる。が、孫の言い分ももっともと思う。そして夫と息子とはざまで、心を痛めているで

あろう娘が哀れであった。

父親の希望で願書を出した大学の試験場は、埼玉のTの家からより私の家からのほうが近いので、彼は前日から我が家に来た。

翌日試験を終えて帰宅したTに、

「どうだった？ できた？」

と尋ねると、彼は少し笑いを含んだ声で、

「それがねおばあちゃん、僕が今まで見たこともないような問題が出てるんだよ」

と言って、すぐテレビのスイッチを入れ、お笑い番組を見ている。「見たこともないような問題」などと、本当だろうか、はたして彼は、まじめに試験に取り組んできたのであろうか。

四校を受ける予定は、二校でやめた。彼の言うその理由は滑り止めの二校がダメだったのだから、あとの分受けに行くのは、

交通費の無駄だ……と。

父は息子のねばりにかぶとを脱いだ。

「おばあちゃん、ぼく学校決まったよ」

三月の終わり、声を弾ませてTは電話をしてきた。

「新宿のM美容専門学校なんだ。

親父の友達に、美容学校にくわしい人がいて、色々調べてくれてね、Mがいいってことになったんだ。四月十六日の入学式がすんだら、報告に行くよ。

おばあちゃん、色々ありがとう」

「そう、よかったわね、がんばるのよ、入学祝いはずむからね。待ってるわ」

「入学祝いなんていいよ、誰でも入れるんだから」

「うん、はずむはずむ、Tちゃんはおばあちゃんのたった一人の、男孫なんだから」

親も子も、さぞ大変だったことであろう。

受話器を置くと、ひとりてに涙が流れた。

## あなたへ

### ●匿名

昨日、病院で「妊娠してもいいですか？」と、何度めかの質問をしました。その答えはやはり、「どうしても欲しいと言うのなら、一人だけ。しかし、絶対大丈夫とは言えません」でした。

結婚したら、子供ができるのはあたりまえ。それ以上、何も考えたことのなかった私が、あなたと結婚して、もう三年すぎました。どうしても、どうしてもあなたと結婚したかった私は、あなたと知り合う前にかかった腎臓じんぞうの病気で、こんなに苦しむとは、思いもよりませんでした。病気のこともなんてすっかり忘

れていた私が、結婚式当日、ひどい血尿を出してダウンしてしまったとき、もう終わりだと思いました。でも、あなたと結婚式ができたから、もう思い残すことはないと思ったのです。なのにあなたは、全然、そんな大事じじと思わずに療養先に迎えに来てくれて、私たちの結婚生活は始まりました。

今のところ、日常生活に支障はないものの、出産、育児という一大事業に耐えられるかどうかは、自信がありません。出産で、自分の体が悪化してしまっただとき、私には、子供を愛せないと思うのです。そして何よりもあの入院生活中の絶望感や、虚無感、肉体的な痛みと苦しみを、もう味わいたくないのです。案ずるより産むがやすしなのかもしれない。無事に子供が生まれ、子供好きなあなたと三人、幸せになれるかもしれない。で

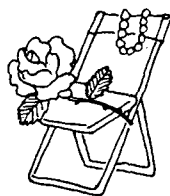
も、私には思いきれないのです。いつか、決心がつくかもしれない、と思いつつ三年。最近はず子供のできない体だといいいのに、とさえ思うようになりました。「頭では理解できても、気持ちの整理がつかない」と言っていた。申し訳ないと思っています。それでもなお、私には決心がつかないのです。

## 節子に似た女性

埼玉県草加市・佐藤玲子

その日はG大学の入学式に出席していた。次女が入学したG大学はこのところ一躍人気のでた名門校である。ダメ元で受けた挑戦校に思いがけなく合格したことで、私は急きょ入学式に出席したのだった。

入学式は三十分ほどで終わり、新入学生父母保証人会が続け



開かれた。

緊張感が少しほぐれてきた私は周囲をゆったりとした気分で見回した。入学式に参列している母親たちはそれぞれに和服やスーツなどで正装していた。夫婦そろって出席している姿もちらほら見られて、いささか過保護ぶりが気になった。

さすがにどこことなく洗練された装いだと思つて眺めていた私は、一人の女性に注意を引きつけられていった。その女性は私の斜め前の席に腰をかけ、形よく組んだ足を通路側にだしている。通路を挟んで反対側にいる

私からは彼女がよく見えた。

ショートカットが似合う薄化粧の横顔。ワインレッドに少し黒を織り込んだ、タイシルクらしいシンプルなデザインのスーツ。黒のパンプス、おそろいの真珠のネックレスとイヤリング、ダイヤの指輪……。一見して恵まれた家庭の女性であることがわかる。

頭のとっぺんから足の先までいったいくらかかっているのだろうと考えてみたが、見当もつかない。

とりわけ私の目を引いたのは大粒のダイヤの指輪をはめたその手であった。ほっそりとしてほんのり艶があるなめらかな白い手だ。

何という美しい手だろう……。ふと私は先日読んだばかりの三島由紀夫の『美徳のよろめき』を思い出した。あの小説のヒロインである育ちのよい優雅な節

子に、この美しい手の女性はよく似ていてではないか。深窓の令嬢がそのまま母親になったような、一種不思議な雰囲気漂わせていた。

壇上では学生部部長の、アルバイトをしすぎて留年などないよう充分注意してください、という内容の話が続いていた。せっかくのG大学入学の喜びに水をさされたようで、私は内心軽い落胆を覚えていた。

つまらない話なら聞きたくないな、と思いつながらふとあの女性を見ると、彼女の様子がおかしいことに気がついた。うつむいたままの頭がぐっと前のめりになって、今にも前の座席の背もたれにぶつからんばかりだ。どこか具合でも悪いのだろうか、私は心配になった。

どうかしましたか？と声をかけようとしてなおも注意していると、彼女ははっとしたように



姿勢を立て直した。つんのめってぶつかりそうになっては姿勢を立て直すと言うことを彼女は何度か繰り返した。

しばらく見ていて私は思わずくすくすっと忍び笑いをもらした。何のことはない。彼女はこの晴れがましい席で睡魔に襲われたらしく、ひとしれずうとうとしていたのだ。

私は笑いだしたくなるのを抑えるのに苦労した。

しかしいったいどうしたことだろう。いかにも育ちのよい優雅なこの人にしては、少々不謹慎ではないだろうか。着飾って会場を埋め尽くした列席者の中で眠気を催した人など、おそらく彼女以外いないだろう。入学の喜びと安堵感に浮き立つ気分ではあっても、退屈な気分ではないはずだ。

いや、それとも彼女にとってそれはほど緊張する場所ではないのだろうか。

いのだろうか。

そう考えて私はハタと気がついた。彼女はやっぱり「美徳のよろめき」のヒロイン節子にそっくりなのだとすることに。節子と同じように彼女の日常はパーティや芝居見物やレセプションで忙しいのには違いない。そんな彼女にとっては今日のこの式典など、生活の小さなひとこまにすぎないのだろうか。

そしてまたこのG大学は多分彼女の母校なのだ。大学も高校も母校であるとすれば、彼女がというとうとしてしまったのも無理はない。

三島由紀夫の小説のヒロイン、節子を思い出させる女性のおもいがけない行為は、それがなによりも彼女が属するハイ・ソサエティの生活を暗示しているような気がした。

## 住み慣れた家で

神戸市東灘区・岩田佳子(55歳)

灘神戸生協のボランティアグループに加入している私は、現在、目が不自由で一人暮らしをしている六十五歳のA子さん宅へ、週一回掃除の手伝いに行っている。

家事援助の依頼を受けて、私をはじめてA子さんと会ったとき、そこに紹介者がいなければ、彼女が盲目であることに気づかなかったであろう。髪の手入れも行き届き、ライトブルーのセーターに色合わせのよいベストを羽織り、凛とした姿で居間に正座していた。

彼女が座っていた居間は、整然と片付けられており、塵ひとつ落ちていなかった。居間だけではなく。玄関、台所、ト

イレ、ふる場、四間ある部屋のどれもが嘗めたようにきれいになっていた。とても、目の不自由な人が一人で暮らしている家には見えなかった。

聞けば、彼女自身毎日、手探りで家の中を拭き掃除しているという。四十年間、住み慣れたわが家だからこそ、できることではあるが、よほどのきれいだきでなければ、できないことである。

彼女がわれわれに申し出た家事援助というのは、掃除機をかけて、Aさんが気づかない汚れた箇所の掃除をしてほしいということであった。長年、別のボランティアグループの人がしていたことの継続である。

Aさんの望むこととしてあげて、Aさんが少しでも明るい気分ですぐに帰ることができるならばそれがなによりである。掃除というのは、健康を害し

ない程度でよいとの私の考えは胸にしまいこんで、いまは、彼女が望む通りに掃除を手伝っている。

最近になって、このA子さんの気持ちを乱すような問題が持ち上がった。

地区の民生委員が、そろそろ盲目者専用の施設に入ってはどうか、と勧めにきたのである。何人もの人の手を煩わせて一人で頑張って暮らすよりも、施設に入ったほうが楽ではないか、と思えたのであろうか。人によっては、自らそれを望む人もいるだろう。

しかし、A子さんは、住み慣れた場所で老い、そして終えたいと願っている。だからこそ、われわれに協力を要請して、家はもとより、思い出の品々を大切に保管して、手入れをして暮らしているのである。

「一人でいると、人に迷惑かけ

るんやねえ」

あるとき、A子さんが、しみじみとした口調で言った。

東京で一人暮らしをしている母も、ときどき、同じようなことを言っている。

## わが家に 格言あり

横浜市港南区・加納礼子

今から二十年ほど前、初めて夫の両親に引き会わされたときの印象は、のんびりした楽しそうな夫婦だと思った。話がトントンと進み結婚が決まり、周囲の心配をよそに夫の両親との同居まで承諾してしまったのは、この初対面の印象が重要な判断基準になったのかもしれない。

しかし一緒に暮らしてみれば驚くことも多く、その第一番は帰宅時間に関してのこと。姑は外出がことのほか好きなタイプ。

用事があれば当然、誘いがくればさっさと出掛けてゆく。「あのう……お夕飯は……」と嫁が遠慮がちに尋ねると「わからないうから、先に食べてなさい。出た者と死んだ者は当てにできない……」

なんといい加減なこと、留守のほうにだって準備や都合があるのにと私はブツブツと面と向かっては言えず、心の中で思うだけ。



夫の帰宅時間が遅いことをつい愚痴るものなら「出た者と死んだ者は当てにすな!」と一喝。新婚早々でも夫は仕事が多

忙とかでなかなか帰ってこなかった。私は舅、姑と三人で食卓を囲み、一緒にテレビを見たりして帰りを待っていた。

以前はあんなに反感を持っていた「出た者と死んだ者は……」の姑の口ぐせであるが、当節私も外出の機会が増えてくると、その真意を納得することたびたびである。大人に限ってであるが、出先で何があるかわからないのに、家のことを心配して帰ることはかり気にしていたら、實際落ち着かないものだ。お互いに信頼していれば安心して出掛けられるし、留守を守れるということか。

そしていつの間にか私もまた子供たちに姑の格言を引き合いに出して言っている。「母の帰宅が遅いようならグズグズ言わず洗濯物を取り込み、ご飯ぐらい炊いておきなさい」と。

先日家族を置いて伊豆高原へ一泊二日の旅に出た。平日しかも楽しい仲間とのまじりつゝ気のない遊びの旅だ。わが家に格言ありてこそ出られた旅だと思つ。

# 次号投稿募集

## ●特集テーマ原稿

二二七号の特集テーマは、「増えている？セックスストレス夫婦」です。

結婚四、五年というのに、ほとんどセックスに興味がなくなったという若い夫婦が増えている。という噂をちらほら聞くことがあります。まさか、と思っていたら、締め切りを過ぎてから、この問題に関する投稿が立て続けに二つ出現したには驚きました。

たしかに噂はうそではなかったらしい。そこで次の特集テーマで扱ってみたいと思います。

セックスストレスにもいろいろ理由があるはず。単に妻の自己主張が強くなっただけかも知れませんが、投稿をなさりたい方は、どうかその背景をご自分で掘り下げて、読者に内容がよく伝わるように書いてくださいますように。

また匿名は、誌上匿名に限って受け付けておりましたが、今回に限って微妙な問題なので、匿名の場合、住所、本名を並記し

なくて結構です。つまりまったく記名のない原稿でかまいません。（もちろん記名は歓迎しますし秘密は厳守いたします）

## ●ワンポイント情報

今回は「英語上達法実験記」です。「イングリッシュ・アドベンチャー」をはじめ、新聞の全段ぬきの広告などで、こうすればらくらく英会話をマスターできる、などという広告が毎日のように目にふれます。

外国語をマスターするにはその国に行くのが一番、以前にも「わいふ」でこの問題はとりあげたことがあります。今回はそういうやり方でなく、現在広告されている英会話上達法を実際やってみた方の体験をうかがいたいです。

何を、どれくらいの間、どんなふうによつてみて、実際どんな効果があったか。どうかその体験をうかがわせてください。できたらその学習法の宣伝の切り抜きなども送ってください。たらと思えます。

分量八百字前後。

以上締め切りはどちらとも八月二十五日です。

## △氏名、住所を秘密にしたい方△

誌上匿名は自由です。原稿への書き方は投稿規定をごらん下さい。

さらに住所（県、市、町）もあきらかにしたくない場合は、その旨原稿の最初に（らん外にでも）お断り下さい。「地域の会員を知りたい」というお問い合わせがときにあります。その場合も住所氏名を知られたくない方は、あらかじめ編集部へお申出下さい。

「この文を書いた方に連絡を取りたい」という問い合わせには、書き手の方にハガキでご連絡し、直接返事をしていただいています。

## △仕事をしたい方へ△

以前首都圏内の読者へ（どんな仕事か）を送りたくて、というアンケートをお送りしたことがありました。その後の新会員、以前と状況が変わって、働けるようになったという方にも、ご希望があればお送りします。編集部までご一報下さい。

# わいふ 投稿規定

●定期購読者はどなたでも(男性でも)投稿できます。原稿には住所氏名を(都道府県名から)明記のこと。誌上匿名・ペンネーム可。

●次のコラムを設けています。

エッセイスト・クラブ  
(一六〇〇字まで)

随筆の楽しさを十分に味わわせてくれる  
よい文章をお待ちします。

ズバリ一言

(八〇〇字まで)

マスコミ、事件、商品、サービスその他、  
目にふれ耳にきき手にするものに、どうし  
てもこれだけは言わずにいられないという  
「もの申す」の欄。改善への具体策の提言  
もどうぞ。

奥さんから外さんへ

(一六〇〇字まで)

いまや家から外へ、既婚の女性がどんど  
ん進出しています。どうして、どうやって、  
何のために、あなたは奥を捨てて外へ出た  
のか。職業ばかりでなく、趣味、市民運動、  
どんな目的のためでもよいのです。家族の  
反響、得たもの失ったものetcをお書き  
ください。

マイ・ジョブ／マイ・  
プロフェッション

(一六〇〇字まで)

あなたのしていられっしやるお仕事の内容、  
どんな技能、どんな適性が必要とされるの  
か、などをレポートしてください。保険の  
外交、校正の仕事、陶芸、八百屋、何でも  
サブプレシイブ

(八〇〇字まで)

本誌の投稿や記事についての反響をお載  
せします。感想、反論、何でもどうぞ。

人間マンダラ

(一六〇〇字まで)

あなたにとって忘れられない人の姿を描  
いてください。もちろん家族の一員でもよ

いのです。

親の言い分・教師の言  
い分

(一六〇〇字まで)

それぞれ重い問題を抱えながら、面と向  
かっては言えない関係。教師から親へ、親  
から教師へ言いたいことを率直に言いあっ  
てみましょう。抽象論でなく、それぞれが  
抱えている問題を具体的に書きください。

フリースペース

(八〇〇字まで)

どんなテーマでも書けます。思想・信条  
にかかわらず、一〇〇パーセント言論の自  
由のある「わいふ」ならではのコラム。

わいわいがやがや

八〇〇字以内で。誰でも気軽に書けるコ  
ラム。

読んでみました

(八〇〇字まで)

書評のコラム。女性問題にかぎらず、視  
野の広い読書体験を。

情報コーナー

(八〇〇字まで)

お知らせ、募集、お願い、探しもの、交

換、相談、何でも。なるべく短く、要点をまとめてください。

## サークルだより (八〇〇字まで)

「わいふ」には読者が連絡をとりあい、自主的に作ったサークルがあります。作りたい、というよびかけ、こんな活動をしました、これからしますからご参加を、などというお知らせをどうぞ。

●投稿は多少添削することがありますのでご了承ください。

●以上、締め切りは原則として偶数月の二十五日。それ以後についたものは、次号まわしとなります。

規定枚数はより多くの投稿を載せるために、守っていただきたいと思います。ただし内容がよければ、多少オーバーしてもお載せします。

## コラム以外の投稿募集

## 特集テーマ原稿

毎回テーマを設定して募集しています。

## ワンポイント情報

一つのもの、または事柄に関する読者の

情報の徹底収集。テーマはそのつど設定します。

●募集欄をごらんください。

## 特別寄稿

ルポルタージュ、自分史、伝記、旅行記、その他の体験記、評論、小説、どんなジャンルのものでもけっこうです。枚数も自由。

●本誌に適合と思われるものは掲載します。本誌に適合しないが、価値ありと思われるものは、出版社に紹介、推薦します。

●本誌掲載の場合は薄謝をさし上げます。本誌に適合しないが、価値ありと思われるものは、出版社に紹介、推薦します。

●本誌に掲載の場合は薄謝をさし上げます。

## 絵・カット・イラスト・写真・コミックも募集しています。

●ご自分の投稿にイラストや写真が用意できる方は、あわせてお送りください。

## 注意

●投稿は一人一篇に限ります。ただし次のコラムへのご投稿とは違ってかまいません。

●情報コーナー・ワンポイント情報・サーブレシーブ・サークルだより。

●投稿は原稿用紙に。本誌はタテ組みです

●で、ヨコ書きはご遠慮ください(書き直すことになるので)。

●原稿はお返しできませんので、必要な方はコピーをとってからお送りください。

●匿名、ペンネームは原稿の最初に、住所・本名はすぐあとに並記してください。

●匿名、ペンネームの場合には、理由をお書きください。とくに理由がない場合は、本名でお願いします。

●匿名、ペンネームの場合には、理由をお書きください。とくに理由がない場合は、本名でお願いします。

●匿名、ペンネームの場合には、理由をお書きください。とくに理由がない場合は、本名でお願いします。

●匿名、ペンネームの場合には、理由をお書きください。とくに理由がない場合は、本名でお願いします。

●匿名、ペンネームの場合には、理由をお書きください。とくに理由がない場合は、本名でお願いします。

●匿名、ペンネームの場合には、理由をお書きください。とくに理由がない場合は、本名でお願いします。

●匿名、ペンネームの場合には、理由をお書きください。とくに理由がない場合は、本名でお願いします。

●匿名、ペンネームの場合には、理由をお書きください。とくに理由がない場合は、本名でお願いします。

●匿名、ペンネームの場合には、理由をお書きください。とくに理由がない場合は、本名でお願いします。

●匿名、ペンネームの場合には、理由をお書きください。とくに理由がない場合は、本名でお願いします。

●匿名、ペンネームの場合には、理由をお書きください。とくに理由がない場合は、本名でお願いします。

## 編集だより

●二六号をおとどけます。

この号では「子育て会議」のご出席希望の方がなく、座談会がとうとう流れてしまいました。「整理整頓」にはみなさま関心がないのでしょうか、それとも到底しつけられない、とあきらめきっていらっしゃるのでしょうか。

ともあれ「子育て会議」への細かいテーマは一応、いままでにある程度出つくしたと思われしますので、次回はこのところ国民全体の共通の関心事となっている、出生率低下の問題をからめて、「これでは子どもを生めない」というテーマを設定しました。

一人、二人は生んでも到底これ以上は、という方、いや一人も絶対生めない状況だ、という方、それでも私は生んだノという方、生んでみてはじめて分かる「子どもというもの」への思いも含めて、どうか生の声を社会に伝えるために、ご参加をお願いします。日取りは六月十五日(月)午後二時から編集部で。十一日までにお電話でお申し込みください。今回が最終回です。

●「小説を書きたい」とおっしゃって、実際に小説を持ちこまれる方がときどきいらっしゃいますが、小説という文芸のジャンルは、長年にわたる精進と才能を必要とします。「わいふ」での文に迫力があるのは、それが、体験に基づくトル・ストーリー、ノンフィクションだからです。小説には、「わいふ」に登場する文とは違うむずかしさがあることを知っておいていただきたいと思っています。

●お友達に「わいふ」を紹介してくださいるのはとてもうれしいことなのですが、ぐくまに、相手のお友達にお話を通じていないことがあり、「わいふ」をお送りするとまるで押し売りのように叱られてしまうということがあります。紹介をしてくださる方は、どうかあらかじめ、お話を通しておいてくださいますよう。

それにしても、みなさまのおかげでよくここまで続いた、と感無量ではありますが、財政はいつも火の車、ほんとうに勝手なお願ひですが、お一人が一人の読者をふやしてくださったら、と願わずにはいられます。どうぞよろしく願ひいたします。

### □購読申込は……

ハガキか電話でどうぞ。

すぐ本に振替用紙をそえてお送りしますので、折返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。二冊以上まとまりますと送料が半額以下になります。

### わいふNO.236.

(隔月刊)

1992年7月1日発行

編集・わいふ編集部

定価460円(本体447円)

(年間購読料送料共4020円)

印刷・平河工業社

発行所・(株)グループわいふ

東京都新宿区市谷加賀町2-5-23

〒162 TEL (03) 3260-4771・4773

郵便振替 東京 5-110430

加入者名 わいふ編集部

### □購読中止は……

必ずお申し出下さい。

送金をお忘れになる方が多いので、誌代が切れても引き続き送本しています。お申し出がないとお送りしてしまうので、ぜひ葉書か電話を。

はるかな四万十川  
遠い山の家……

●最新刊 / \*1300円

豊饒な自然と貧しさゆえの情愛の希有な記憶が、いま、万人の文学へと昇華する。  
『あつよしの夏』(文藝賞・坪田謙治文学賞)以前の著者の家族と、山川草木に優しく育まれた幼い日々をあざやかに描く。



笹山久三著

# 幼年記 かがやく 大気のなかで



かとしあそびの**大宇宙** ●全10巻  
かとし先生があつめにあつめた日本と世界の子ども達の遊び500種 / クイズ・なぞなぞ・切り絵・集団遊び・言葉・工作など満載 \*各1300円

ふるさとあそび**事典** させたい原体験  
を感得する。原体験教材開発研究グループ著 からだで感じ、感性と知性を育てる。原体験遊びのアイデア事典。別例収録。 \*1900円

山田桂子著 原体験教材開発研究グループ著

**台所育見** 1歳から包丁を  
板本著者 危ないからダメ!といわないで、自分でやらせてみる幼児厨房に入るのすめ。もちろん安心道具も紹介。 \*1300円

「待ち」の子育て ●ロングセラー  
山田桂子著 橋本結二写真 「待つ」ことにより育つ幼児の実践記

食事、遊び、作業を通して創造する感動の子育てとは。 \*1300円

## 聞き書 大分の食事

最新刊発売中

豊の国 大分 その豊かな味わいを、おばあさんから聞き書伝えるおいしい本!

●日本の食生活全集シリーズ 第45回配本 / 豊後・大分は「豊の国」県内各地の名物料理を紹介。大分市の「ほうろく」、豊後水道沿岸の「さつま」かまぼこ、竹田の頭料理、臼杵の黄飯、さらすまめし……見て作って楽しめる。  
☆毎日の朝昼晩の献立から行事食も。☆材料、作り方も写真を添えて。 ☆冠婚葬祭、行事他。



だんご汁(貝原西)

●既刊・好評発売中 ●定価各2900円 ●A5判 ●カラー写真豊富  
1 北海道2 青森3 岩手4 宮城5 秋田6 山形7 福島8 茨城9 栃木10 群馬11 埼玉12 千葉13 東京14 新潟15 富山16 石川17 福井18 山梨19 長野20 岐阜21 静岡22 愛知23 三重24 滋賀25 京都26 大阪27 奈良28 和歌山29 鳥取30 徳島31 香川32 高松33 岡山34 広島35 山口36 徳島37 香川38 愛媛39 高松40 福岡41 佐賀42 長崎43 熊本44 大分45 鹿児島46 沖縄

★あと二年で完結です! ●シリーズ全50巻 / 隔月刊予定 14 神奈川 29 奈良 48 アイヌ 49 50 索引

**楽味スライス自由自在**  
浅田輝子著 ●レシビがふえる味が広がる。基本スライスの使い方がらハンパ野菜の愛用の知恵も、香味の食卓演出法紹介。 \*1350円

山田貴義著 ●慣れる楽しむコツのPARTY! ベランダ・キッチンで楽しめる誰でもできるフランチ野菜づくり! \*1350円

**図解 プランターの野菜づくり**

**家庭菜園コツコツ**  
水口文夫著 ●プロが手ほどき家庭菜園宝典 52種の野菜別に、主な作業からおさえどころまで、コツと工夫を紹介! \*1350円

水口文夫著 ●プロが手ほどき家庭菜園宝典 52種の野菜別に、主な作業からおさえどころまで、コツと工夫を紹介! \*1350円



株式会社 ミネルバ書房

〒607 京都市山科区日ノ岡堤谷町1  
☎(075)581-5191 振替京都 2-8076

- 目次**
- I 民間経営の老人ホーム
  - 1 有料老人ホーム(都道府県別)…… 92 施設
  - 2 系列経営の有料老人ホーム
  - 3 厚生年金有料老人ホーム・生命保険年金
  - II ホーム・福祉の老人ホーム
  - 4 軽費老人ホーム
  - 5 養護老人ホーム
  - 6 特別養護老人ホーム
  - III 老人病院・在宅福祉サービス
  - 7 老人病院
  - 8 在宅福祉サービス



● 民間の有料老人ホーム92施設のデータをはじめ、老人ホーム・老人病院の全国リストのほか、在宅福祉サービスの一覧を掲載。また、訪問記やインタビューなど生の声も満載。

● 老後の自立のために、また自立生活が困難になったときのために、在宅福祉サービス・老人ホーム・老人病院の三つの情報を具体的に分かりやすく提供。

# これで安心！ 老後の暮らし 老人病院・ 在宅介護 全ガイド

わいふ編集部編  
A5判・美装カバー・550頁  
定価2,500円

## 腎不全を生きて

松村満美子著 ● 腎臓病患者五人の軌跡 腎不全患者たちの悲痛な叫び 先進国の中で唯一生体腎に頼る日本の腎移植。ドナーの絶対数の不足。様々な問題をかかえながら患者、医師、家族の闘いは続く。 一六〇〇円

### 目次

- I ブローグ 腎不全との出会い
- II 母と子の闘い、大島洋美の短かい人生
- III 黎明期を生きた人びと
- IV エピソード 腎臓病——闘いの歴史と今

## 日米の働く母親たち

杉本貴代栄／中田照子／森田明美編著 ● 子育て最前線レポート 男女雇用機会均等法下、働く母親の「職業と生活」を支える社会システムはどのようなべきか。日米の働く母親への面接調査をとおして現代の保育制度を実証的に検討する。 第二十九回日私幼賞受賞 ● 二二〇〇円

## 欧米女性のライフサイクルとパートタイム

三富紀敬著 ● 一八四〇年—一九九〇年におけるパートタイムの歴史を、女性のライフサイクルの変化とのかかわりにおいて実証的に分析する。三カ国の膨大な資料を吟味し、通説としてのパートタイム論に一石を投じる。 五五〇〇円